

憲兵要務(高等警察)教程

国立公文書館

分類

②③

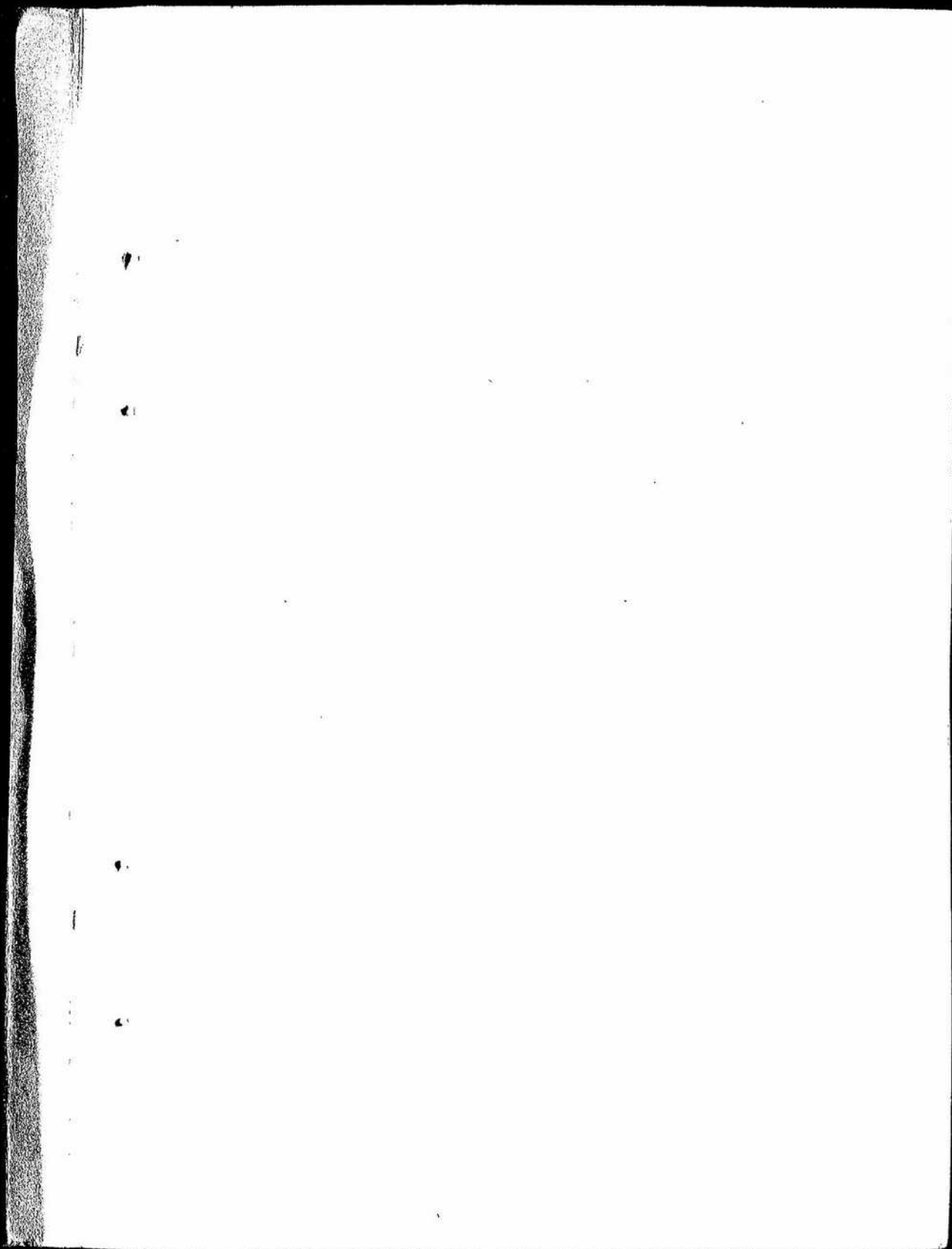
配架番号

3A

15

11-12

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10



欠損

裏面白紙

憲兵要務(高等警察)教程目次

第一章 總 說

第一節 高等警察ノ意義

第二節 社會問題ノ意義

第三節 資本主義ノ社會制度及經濟組織

第四節 社會思想概說

第一款 社會思想ノ意義

第二款 社會思想ノ種類

第一項 自由主義

第二項 左翼思想

第一目 無政府主義

第二目 社會主義

第三目 マルクス主義

第四目 我が國ヨリ觀タルマルクス主義ノ矛盾

国立公文書館	
分類	(並)
配架番号	15 11-11

第四款	無產政黨運動	八三
第五款	人民職線運動	八八
第六款	教育界ニ於ケル左翼運動	九〇
第一項	學生ノ左翼思想運動	九〇
第一目	概説	九〇
第二目	運動ノ方針	九二
第二項	小學校教員ノ左翼思想運動	九四
第一目	概説	九四
第二目	運動ノ方針	九六
第七款	左翼運動ノ一般の職務	九八
第八款	軍卜ノ關係	一〇二
第二節	右翼運動	一〇四
第一款	右翼運動ノ意義	一〇四
第二款	右翼團體ノ發展	一〇五
第一項	國粹主義運動	一〇五

第二項	實踐團體運動	一〇七
第三項	政治團體運動	一一一
第四項	在鄉軍人關係團體	一一五
第五項	學生團體運動	一一八
第三款	右翼團體ノ指導精神概觀	一二〇
第四款	軍卜ノ關係	一二三
第三節	勞働運動	一二四
第一款	勞働運動ノ意義	一二四
第二款	我力國勞働運動ノ推移	一二五
第三款	勞働爭議	一二九
第一項	勞働爭議ノ意義	一二九
第二項	勞働爭議ノ戰術	一二九
第三項	勞働爭議最近ノ傾向	一三二
第四款	軍卜ノ關係	一三四
第四節	農民運動	一三五

第一款	農民運動ノ意義	一三五
第二款	農民運動ノ戰術	一三六
第三款	小作運動	一三七
第一項	小作運動ノ意義	一三七
第二項	小作運動ノ戰術	一三八
第五節	水平運動	一四〇
第一款	水平運動ノ意義	一四〇
第二款	水平運動ノ戰術	一四〇
第三款	運動方針	一四二
第四款	軍卜ノ關係	一四三
第六節	民族運動	一四三
第一款	朝鮮民族運動概觀	一四三
第二款	臺灣民族運動概觀	一四六
第三款	軍卜ノ關係	一四七
第三章	戰時ノ國內政治思想概觀	一四八

原本不明瞭

原本不明瞭

第一節 翼贊運動

第一款 新體制運動

第二款 新體制運動發生ノ諸因

第三款 大政翼贊運動ノ目的

第一款 大政翼贊會ノ意義

第二款 大政翼贊會組織ノ概要

第三款 大政翼贊會ト國會及軍トノ關係

第一款 翼贊政治會

第二款 經濟新體制

第一款 經濟新體制ノ必要性

第二款 統制經濟

第一款 統制經濟ノ意義

第二項 統制經濟ノ目標ト機構

第三節 統後治安ニ關スル諸問題

第四章 高等警察服務

第一節 總說

第二節 思想警察服務

第一款 思想上ノ要注意人

第二款 警察服務

第三款 爭議警察服務

第四節 選舉警察服務

第五節 水平事件服務

第六節 檢舉事例

第七節 報告通報手續



高等警察要務敘程

第一章 總 說

第一節 高等警察ノ意義

高等警察ノ意義

第一 高等警察ノ意義

高等警察トハ、國家社會全體ノ安全ヲ目的トスル警察テアツテ、直接個人ノ安全ヲ目的トスル普通警察ト異リ、其ノ多クハ政治上ノ原因ニ依ルモノテアルカラ別ニ之ヲ政治警察ト呼ハレルコトカアル。而シテ高等警察ハ廣義ノ行政警察（司法警察ニ對ス）ノ一部門タル保安警察（狹義ノ行政警察ニ對ス）ニ屬シ、其ノ中ニ於テ普通保安警察ニ對シ高等保安警察ト稱セラレルモノデア

ル。高等警察ハ通常（地方警察官廳ニ於テ）之ヲ普通高等警察ト特別高等警察トニ分チ、前者ハ主トシテ政治運動ヲ後者ハ主

憲兵ノ服
務スル高
等警察ノ
意義

トシテ社會運動ヲ其ノ作用ノ對象トシテ居ル。
社會運動トイフノハ、社會問題ノ解決ヲ目的トスル實踐運動
ヲアツテ、社會問題トイフノハ直接社會制度ノ缺陷ニ起因シ
テ生スル各種ノ問題、例へハ思想問題、労働問題、農民問題
學生問題、水平問題、民族問題等テアル。故ニ特別高等警察
ハ思想、労働問題等ノ確決ヲ目的トスル集會、結社、多衆運
動、其ノ他ノ社會運動ノ觀察及取締ヲ任務トスル警察作用テ
アルト謂フコトカ出來ル。

第二 憲兵ノ服務スル高等警察ノ意義

憲兵ノ服務スル高等警察ハ地方警察官廳ニ於ケル分類トハ稍
其ノ趣ヲ異ニシ地方警察官廳ニ於ケル特別高等警察ニ普通高
等警察ヲ加味シタルモノヲ指稱シテ居ルカ然シ其ノ内容ハ軍
事ニ關スル特殊ノ使命ヲ有スル軍事高等保安警察ヲ指稱シ、
其ノ目的ハ直接軍ノ存立、安寧、秩序ノ保持ヲ主眼トシテ公
安ヲ維持スルニ在ル。從ツテ其ノ對象ハ主ニ軍ノ存立、安寧

社會問題
ノ意義

第一 社會問題ノ意義

一般ニ社會問題ト謂フ語ニハ廣狹二様ノ意義カアル。
廣義ノ社會問題トハ吾々人ノ社會生活ニ關係ヲ有シ、社會ノ
表面ニ現ハレタル一切ノ問題ヲ謂フ。

例へハ、近頃ノ青年ハ一般ニ労働ヲ厭フ傾向アルハ由々シキ社會問題テアルト
謂ヒ、或ハ淫蕩ナル流行歌ノ蔓延スルハ風俗上由々シキ社會問題テアルト謂フ
如キ場合テアル。

狹義ノ社會問題トハ廣義ノ社會問題中特ニ社會制度ノ缺陷カ
ラ生スル問題ノミヲ謂フ。

秩序ニ影響ヲ及ボストコロニ社會運動テアル。

而シテ社會運動ハ直接社會制度ノ缺陷カラ生レル所ノ社會問題ヲ一定ノ方針
即チ、社會思想ニ基イテ解決シヨウトスル實行運動ヲアルカチ、社會運動理解
ノ手引トシテ、先ツ、社會問題、社會制度、社會思想ノ諸問題ニ付若干ノ説明
ヲ記セルコトカスル。

第三節 社會問題ノ意義

社會問題
發生ノ原因

然シテ年々狹義ノ社會問題モ時代ニ依リ又人々ニ依ツテ種々其ノ内容ヲ異ニスル例ハ、納税ニ依ツテ選舉權ヲ制限スル様ナ制度ハ公平ナル政治カ行ハレナイ處カアルカヲ、其ノ制度ヲ改メ、全國民ニ選舉權ヲ平等ニ與ヘナケレハナラナイトテ普通選舉ノ唱ヘラレタ當時ノ社會問題ハ、主ニ政治問題テアツタカ、今日ニ於テハ、資本家ト労働者トノ關係ヲ平等ニスル様ナ社會制度ヲ實現シヨウトスル問題、即チ、労働問題カ思想問題ト共ニ重要ナル社會問題トナツタ。其ノ他農民問題、學生問題、水平問題等モ亦狹義ノ社會問題テアツテ悉ク高等警察ノ對象トナル事柄テアル。

第二 社會問題發生ノ原因

社會問題ハ社會制度ノ缺陷ヨリ發生スルモノナルコトハ既ニ述ヘタル所テアルカ、然ラハ社會制度ノ缺陷ハ如何ニシテ發生スルカト謂フニ元來制度トイフモノハ、其ノ時ト所ノ事情ニ應シテ人間ノ意志ニ依ツテ創造セラレタモノテアルカラ、事情ノ變化ニ伴ヒ制度モ亦之ニ適應スル如ク改革セラレネハナラナイモノテアル。

資本主義
ノ意義

第一 資本主義ノ意義

社會事情カ變化シタノニ拘ラス一旦成立シタトコロノ制度ハ不變テアルトシタナラハ、社會事情ト社會制度トノ間ニ間隙齟齬ヲ生スル様ニナル、其處ニ所謂社會的缺陷ノ發生ヲ見ルニ至ルノテアル。而シテ社會問題ノ發生ニハ、例ヘハ、労働者ノ因窮ニ因ル悲惨ナル現象アリトセハ夫レハ現代社會制度ヨリ生シ、且現制度ノ缺陷ニ基因スルノテアル。故ニ現制度ハ改革セラレネハナラヌトスルカ如キ過程ヲ辿ツテ社會制度ノ缺陷ハ指摘セラレ遂ニ社會問題ノ發生ヲ見ルニ至ルノテアル。

第三節 資本主義ノ社會制度及經濟組織

一般ニ現代經濟社會ヲ稱シテ資本主義ノ經濟社會ト謂ヒ、其ノ生産組織ハ資本主義的の生産組織ナリト稱セラレル。然シテラ、此ノ資本主義ト謂フ言葉ハ現代ヲ表徴スル代表語トシテ屢々用ヒラレテ居ルノニ拘ラス、其ノ内容ハ必スシテ明カテ

資本主義
社會制度

ハナイ。資本主義ノ觀念ハ一人ハ唯彼自身ノ快樂及苦痛ニ依ツテノミ動キ之以外何物ト雖モ人ヲ動かスカナシト謂フ主張及利益ヲ以テ終局ノ目的トナシ、之カ爲ニ人ハ生活スルモノデアルトト謂フ二箇ノ主張ヨリ成立シ、兩者ハ相互密接ナル關係ヲ持ツテキル。從ツテ此ノ兩主張ハ資本主義經濟理論ノ基礎的觀念デアツテ、私有財産及自由放任ノ社會制度ヲ肯定スルモノデアアル。而シテ、一般ニ資本主義トハ「生産ノ要素中資本ニ對シ優越性ヲ認メ、其ノ増殖ヲ以テ最緊要事トシ、之カ爲ニハ其ノ他ノモノヲ犠牲ニ供スルモ致方ナシ」トスル思想デアリ、資本主義的生產組織トハ「上ニ資本家カアツテ企業ノ經營ヲ司リ、其ノ下ニ多數ノ労働者カアツテ其ノ命ニ從ヒ生産ニ從事スル組織デアアル」ト解セラレテキル。

第二 資本主義ノ社會制度
資本主義ノ社會制度ヲ特色付ケルモノハ、私有財産制度及自

私有財産
制度

由放任制度ノ二制度デアツテ又之ハ實ニ現代經濟生活ノ二大柱石デアアル。

(一) 私有財産制度

私有財産制度トハ個人又ハ個人ノ集合體カ合法的ニ獲得シタ財産ニ對シテハ、其ノ個人又ハ個人ノ集合體ニ、絶對的ノ支配權ヲ認メタル制度デアアル、即チ労働ニ依ツテ得タルト或ハ相續、贈與、其ノ他如何ナル方法ニ依ツテ得タルト拘ラス、其ノ方法カ合法的デアル限りハ其ノ財貨ヲ自由ニ使用シ、處分スルコトノ出來ル制度デアアル。

資本主義諸國ハ國法ヲ以テ私有財産ヲ保護シテ居ル。私カ憲法ニ於テモ其ノ第二十七條第一項ニ「日本臣民ハ其ノ所有權ヲ侵サルコトナシ」ト云ヒ、我カ民法第二百六條ニ「所有權ハ法令ノ制限内ニ於テ自由ニ其ノ所有物ノ使用收益及處分ヲ爲ス權利ヲ有ス」ト規定シテキルノハ、私有財産權ヲ公法上及私法上ニ於テ認メタルモノデアアル。然シ我カ國ニ於ケル所有權ハ必スシモ絶對的ノモノテハナイ、即チ、憲法第二十七條第二項ニ「公益ノ爲必要ナル處

自由放任制度

分ハ法律ノ定ムル所ニ依ル」ト規定シ、又民法カ「法令ノ制限内ニ於テ」ト規定シテキルノハ之ヲ示スモノテアル。

(一) 自由放任制度 (自由競争制)

自由放任制度トハ、國家カ個人ノ經濟生活ニ對シ、最少限度ニ於テノミ干涉シ得ル制度ヲ謂フ。換言スレハ各個人ニ其ノ自ラ利益ナリト信スル所ニ從ヒ、自由ニ其ノ經濟活動ヲ爲サシムルコトカ即チ自由放任制度テアル。

自由放任制度ハ自由放任主義ノ實現セラレタモノテアルカ自由放任主義トハ經濟上ニ用ヒラレタル一種ノ自由主義テアル、故ニ又經濟的自由主義ト云ハレテキル。而シテ經濟的自由主義ノ結果トシテ自由競争ノ行ハレルノハ當然テアル。尙此ノ自由放任主義ニ依リ主張セラレル自由ニハ營業ノ自由、勞働ノ自由、契約ノ自由、及經濟ニ關スル限り團結ノ自由ヲモ包含シテ居ル。

第三 資本主義ノ經濟組織

資本主義經濟組織ノ基礎ヲナスモノハ自己責任主義營利主義及企業組織ノ三者テアツテ其ノ一ヲ缺如シタナラハ資本主義

自己責任主義

經濟組織ハ崩壊シ其ノ經濟社會ハ成立シ得ナイノテアル。

(一) 自己責任主義

自己責任主義トハ、國家ハ自ラ進テ國民ノ經濟生活ニ干渉スルコトナク、各人ヲシテ其ノ好ム所ニ從ヒ生産或ニ消費ヲ爲シシメル反面之ニ依ツテ生産スルトコロノ結果、即チ其ノ責任ヲモ各個人ニ負擔セシメントスルモノテアル、生産者ハ自ラ損益ヲ負擔シナケレハナラナイノテ各々全力ヲ盡シテ需要供給ヲ爲シ、經濟行爲ヲナス爲其ノ經濟社會ハ常ニ活氣ヲ呈スル。而シテ自己責任主義ノ結果、生産或勞働ノ自由ハ認めラレテ茲ニ營業自由ノ制度トナツテ現ハレルノテアル。

(二) 營利主義

營利主義トハ、需要供給ヲ測リ價格ノ變動ヲ察シ、成ルヘク收入ヲ支出ヨリ多クシ、ソレニ依ツテ利益ヲ得ルコトヲ目的トスルモノヲ謂フ

而シテ營利主義ニ依リ活動スル生産者等ハ、其ノ才能ヲ盡シ、以テ競争ニ打

勝チ、自己ノ運命ヲ開拓セントスルカラ、自然ノ富源ハ十分ニ利用セラレ、資本、勞働モ亦活用セラレ、競争ノ利益ヲ擧ケルコトカ出來ル。然シ其ノ競争激烈ニ且ルトキハ、弱肉強食トナリ社會上憂慮スヘキ問題ヲ生スルコトトナル。

(三) 企業組織

生産ノ三要素ヲナス勞働、土地、資本ノ全部又ハ一部ヲ他ヨリ與ヘラレテ生産ヲ營ム者ヲ企業家ト謂ヒ、此ノ結合統一ノ組織ヲ企業組織ト謂フ。而シテ企業ノ形態ハ之ヲ大別スルト個人企業ト共同企業ノ二トナル。個人企業ハ企業形態ノ最モ單純ナモノテアツテ、一個人カ全責任ヲ以テ事業ノ經營ニ當リ、其ノ損益共ニ之ニ歸スルモノヲ謂フノテアル。之ニ反シ共同企業ハ、二人以上ノ者カ共同シテ事業ノ經營ニ當リ、之カラ生スル損益ハ契約ニ基キ其ノ間ニ分配セララルモノヲ謂フ。共同企業ハ更ニ之ヲ會社企業、公營企業

及組合企業ノ三ニ分ツ、會社企業ハ我カ國法上之ヲ合名會社、合資會社、株式合資會社及株式會社ノ四種ニ區別セラレテ居ル。

資本主義經濟組織ノ基礎トシテ最も重要ナル役割ヲ演シテ居ルノハ以上ノ中ノ會社企業テアル。

第四 資本主義ノ利害

資本主義ノ利害

(一) 功績

資本主義ハ、私有財産ヲ權利トシテ認定シ、之ヲ他ノ侵害ヨリ防衛スル制度ヲ確立シタ。即チ之ニ依リ、各人ハ初メテ自己ノ努力カ酬ヒラレ、科學者ハ安心シテ發見、發明ニ從事スルコトカ出來、更ニ自由競争ノ容認ハ、各人ヲシテ其ノ創意心ニ基キ自由、獨立ノ活動ヲ促進シ、斯クテ物質文明ノ建設ニ貢獻シタノテアル。次ニ資本主義ノ擧ケタトコロノ功績ハ、生産力ノ増進テアル。即チ社會全體トシテ生産ヲ増加シ土地、勞働、資本等

生産ノ要素ヲ活用スルコトカ出来タノテ、生産技術ハ進歩シ、經營方法ノ改良ヲ促シ、社會ノ文明ヲ一層進歩セシメ原則トシテ經濟生活ヲシテ秩序、安定ヲ得セシメタノテアル。

(二) 弊害

資本主義ハ、右ノ如キ幾多ノ功績ヲ舉ケタケレトモ、他方ニ於テハ、種々ノ弊害ヲ醸生スルニ至ツタ。其ノ弊害ノ主ナルモノハ左ノ通りテアル。

(1) 物質文明ノ繁榮ノ結果ハ、人類全體ハ其ノ恩澤ニ均霑シ以テ、各人ハ皆幸福テナケレハナラナイ筈テアルノニ、事實ハ、下層階級ニハ憎惡ト反感トカ瀾漫シ、上層階級ニハ不安ト、陰鬱トヲ齎シタ。

(2) 競争激烈ノ結果ハ勳モスレハ不正ナル方法ニ依ツテ、其ノ利益ヲ獲得セントスル者ヲ生シ社會道德ノ低下ヲ招來シタ。

(3) 競争激甚ヲ起ムル爲、經濟的弱者ハ經濟的強者ノ壓倒スル所トナツテ、遂ニ競争ニ堪ヘス資産ヲ失ヒ労働者トナルニ至リ、失業ノ憂目ヲ見ルニ至ル、斯クシテ貧富ノ懸隔甚シクナルニ至ツテ、社會生活ノ基礎ヲ脅威スル様ニナツタ。

(4) 資本家階級ト労働者階級トノ所得ノ不公平、生活ノ差異感情ノ疎隔等ハ漸次兩階級ノ對立ヲ深刻化シ、所謂労働問題ヲ發生スルニ至ツタ、斯クシテ労働問題ヲ中心トシテ現代經濟社會組織ノ缺陷ヲ攻撃シ、之ヲ顛覆シ、以テ新社會ヲ組織セントスル運動ノ發生ヲ見ルニ至ツタノテアル。

第四節 社會思想概説

第一款 社會思想ノ意義

社會思想トハ、社會組織ヲ變革シテ其ノ缺陷ヲ除去セントスル思想テアル。而シテ同シク社會組織ニ對スル思想ニモ、現價

度ヲ維持セントスル保守的思想ト、變革ヲ企圖スル進歩的思想
トカアル、後者ハ、又漸進的ニ其ノ目的ヲ達セントスル比較的
穩健ナ思想ト、之ニ反シ急進的ナ思想トカアリ、此レ等社會思
想中、特ニ高等警察ノ目標トナルノハ主トシテ急進的思想デア
ル。

第二款 社會思想ノ種類

一ノ社會思想ノ發生ニハ、必ス相當ノ社會的原因カアル。從
ツテ社會思想ノ觀察ニ當ツテハ各思想ノ由來ヲ極メ、其ノ由テ
來ル社會事象ヲ忽ニシテハナラナイ。而シテ高等警察ノ對象メ
ルヘキ社會思想ハ其ノ數極メテ多ク、其ノ總テハ資本主義經濟
組織ノ缺陷ヲ是正シテ現代社會組織ニ根本的變革ヲ加ヘントス
ル廣義ノ社會主義思想、即チ所謂左翼思想ト之ニ對スル右翼思
想トヲ以テ二大主流トナスモノテアル。

而シテ此ノ兩翼思想特ニ左翼思想ヲ理解スル爲ニハ、現代社
會制度ノ基調ヲナス所ノ思想、即チ自由主義ヲ一瞥スル必要カ

アル。

第一項 自由主義

第一 自由主義ノ意義

自由トハ一強弱ナキ狀態一ヲ謂フ。而シテ自由主義トハ社會
生活ニ於テ強弱ヲ成シ得ル限リ少クセントスル思想デアツテ
後進ノ無政府主義トノ差異ハ無政府主義カ絕對的自由ヲ實現
セントスルニ對シ自己主義ハ相對的自由ヲ要求セントスル點
ニアル。自由主義ハ人間ノ本性ヨリシテ或ル程度ノ強弱ハ止
ムヲ得ナイモノトシテ之ヲ區メルカ、唯成シ得ル限リニ於テ
強弱ヲ制限セントスル點ニ其ノ特質ヲ存スルノテアル。自由
主義ハ現代政治、經濟其ノ他ノ思想的基調ヲナスモノテアル
カ、歐洲ニ於ケル宗教改革ニ當リ、先ツ宗教ニ對スル羅馬法
皇ノ強弱ヲ排除セントシテ宗教上ノ自由ヲ主張シタノニ端ヲ
發シタモノテハト爾ハレザイル。然ルニ宗教上ノ自由ノ要求
ハ、信仰上ノ自由タケテナク、總テ、一般ニ思想上ノ自由ニ

一六
擴張セラレ、身體上ノ自由、團結ノ自由、政治上ノ自由、家
族の自由、國民の自由、國際的自由等カ各種ノ方面ニ於テ叫
ハレ、近世數百年ニ亘ツテ社會制度ノ改革原理トナツタ。經
濟上ノ自由モ亦其一テアル、從ツテ自由主義カ實現セント
スル自由ハ、極メテ廣汎ニ亘リ、其ノ種類ニ依ツテ、各種ノ
自由主義ニ分類スルコトカ出來ル。茲ニハ政治上及經濟上ノ
自由主義ニ付略述スルコトスル。

(一) 政治的自由主義

政治的自由主義トハ、人間生活ニ於テ國家社會ヨリモ、個
人ヲ重シシ、個人ノ自由ヲ最大限度ニ要求セントスル思想
テアツテ、此ノ政治上ノ自由主義ニ基ク政治ヲ民衆政治、
又ハ議會中心ノ政治ト謂ヒ、又之ヲ「デモクラシー」トイ
フ語ヲ以テ呼ンテ居ル。

普通選舉ニ依リ、廣ク國民ノ參政權ヲ認ムル制度モ亦此ノ主義ノ現ハレテア
ル。

而シテ、政治上ノ自由思想ハ、佛人モンテスキュー、カ國政ノ三權分立ノ下
ニ於テノミ、政治的自由アリト唱ヘテカラ世界各國ヲ風靡シ、有ユル立憲國
ニ於テハ、所謂三權分立ノ制ヲ採用シ、各獨立機關ヲシテ、相互權力ノ濫用
ヲ戒メ、國政ノ運用ヲ完全ナラシメルニ至ツタノテアル。

然シテカテ、本來「デモクラシー」ト自由ト平等トヲ骨子トシテ民主政治ヲ
要求スル政治思想テアルカラ、我カ國ノ如ク三千年來、炳易トシテテナク、
國家統治ノ大權力、天皇ニ存スル國家ニ於テハ、斷シテ許スロトノ出來ナイ
思想テアル。

又茲ニ注意シテケレハナラナイノハ、我國ニ於テモ屢々用ヒラレル政黨政治
議會政治ト謂フ言葉テアル。

政黨政治トハ、議會ニ多數ヲ占メル政黨カ常ニ議案ノ決議ニ對スル大勢ヲ支
配スル關係カヲ議會ニ絕對多數ヲ有スル政黨ヨリ大臣ヲ任命シ、内閣ヲ組織
スレハ國政運用ニ便テアルト謂フ理由ニ依テ、最大多數ノ政黨ノ黨首カ常ニ
内閣總理大臣トナツテ内閣ヲ組織シ、政治ノ衝ニ當ラナケレハナラナイト謂
ヒ、政黨權力常ニ所謂盟約的ニ政黨ノ手ニアルヲ謂フノテアル、然シ、政黨

經濟的自
由主義

人カ常ニ口ニスルカ如ク、之ヲ以テ憲政（立憲政治）ノ常道テアルト謂フハ
我カ帝國憲法ノ下ニ於テハ大ナル誤テアル、何故カトイフニ、内閣總理大臣
以下大臣ノ任命ハ、天皇ノ大憲ニ屬シ、濫ニ私議スヘキモノテハナイカラテ
アル。

次ニ、議會政治トハ、議會中心主義政治ヲ意味シ、國家ノ政治ハ悉ク議會ニ
於ケル議決ニ依テ行ハルヘキモノテアルトノ意味テアル、乍併、帝國議會ハ
憲法上、天皇ノ翼贊機關テアツテ、天皇中心主義ノ下ニ國政ハ運用セラレヘ
キモノテアルカラ、我カ國ニ於テハ純然タル議會ハ存在シ得ナイノテアル。
從テ、憲法ノ規定ニ基イテ行ハレル、所謂、立憲政治ト議會政治トハ其ノ意
義ニ於テ、大ナル差異アルコトヲ知ラネハナラナイ。

(二) 經濟的自
由主義

經濟的自。由。主。義。トハ、前ニモ述ヘタ如ク、經濟上ノ自由放
任ヲ要求スル自由主義テアツテ、現時ノ資本主義ノ根本觀
念ヲ爲スモノテアル。而シテ、經濟的自。由。主。義。ハ、私有財
產制度ト、自由競争制度トヲ確立シ、ソレニ依テ、現在ノ

無政府主
義

資本主義制度ノ柱石ヲ構成シタノテアル。
尙、此ノ種ノ自由主義ニハ、政治上ノ自由主義ト、思想上
ノ自由主義トカ密接ナル關係ヲ有スルコトハ勿論テアル。

第二項 左翼思想

第一目 無政府主義

無。政。府。主。義。トハ、國家社會等ノ人間ニ對スル一切ノ權力支配ヲ
認メナイ絶對的自由主義ノ主張テアル。即チ、何等他ノ掣肘ヲ
受ケス各人ノ自由ナル行動ニ依ツテ、各人ノ人格完成ヲ許ス自
由聯合ノ理想社會ヲ建設セントスル思想テアル。此ニ、一般ニ
無政府主義トハ、國體ヲ破壊スル革命思想テアルト謂ハレテキ
ル。而シテ、無政府主義ノ實現手段トシテハ直接行動、即チ、
暗殺、爆彈投下等ニ依ル暴力革命カ最モ多ク採用セラレタノテ
無政府主義ト謂ヘハ、直チニ、暴力革命ニ依ル國家破壊ノ主義
ナル如ク思ハレルニ至ツタ。

社會主義

第二目 社會主義

第一 廣義ノ社會主義

廣義ノ社會主義ハ狹義ノ社會主義ヲ始メトシテ共產主義、社會民主主義、國家（國民）社會主義及無政府主義ヲ包含スル觀念テアツテ、唯一ノ主義思想ノ體系ヲ指スモノテハナク、所謂社會ヲ何等カノ形態、方法ニ於テ改造セントスル有ユル思想ノ流ヲ總稱スルモノテアルカラ判然タル定義ヲ附スルコトハ困難テアルカ、之ヲ概括的ニ謂ヘハ、一人ニ依ル人ノ支配、又ハ搾取ヲ除キ、各社會人ヲシテ等シク勞働ニ從事セシメ、且其ノ所産ヲ公平ニ享樂セシメンコトヲ主義トスル一思想ト謂フコトカ出來ル。

第二 狹義ノ社會主義

狹義ノ社會主義ハ、生産機關（土地、工場、資本等）及金融機關其ノ他ノ私有私營ヲ廢シテ國有又ハ公有、即チ共有スルコトヲ實現セントスル主義テアル。而シテ普通一般ニ、社會主義ト稱スル場合ニハ、漠然タル廣義ノ社會主義ノ意テハナ

第三 空想的社會主義

クシテ一ツノ思想體系トシテノ社會主義、即チ、狹義ノ社會主義ヲ指稱スルモノテアル。
第三 空想的社會主義
空想的社會主義ハマルクス一派ノ唱フル科學的社會主義ニ對スル名稱テアツテ、階級協調ヲ精神トシ、宣傳ト教育トノ方法ニ依リ理想的協同社會ヲ構成セントスル主張テアルカ、其ノ方法手段ハ餘リニモ空想的テアツテ社會生活ノ現實的認識ヲ缺如シタタメ今日テハ殆ント問題トセラレナイ。

第一 概念

第三目 マルクス主義

マルクス主義ハ、之ヲ科學的社會主義トモ云フ。即チ、從來ノ社會主義ハ學者思想家ノ空想的ナル理想ヲ表現シタルニ過キス、實際ニハ何等ノ致ラ奏スルモノテナイトシテ之ヲ排斥シ、純ニ科學的根據ニ基イテマルクス及エンゲルスニ依リ完成セラレタル社會主義理論テアル。

唯物史觀

其ノ要諦ハ「萬物ハ常ニ流轉シ生滅シテキル。人間社會モ亦
歷史的ニ發展シ進化スル、即チ、資本主義社會モ亦發達シテ
或段階ニ達スルナラハ必ス其ノ内部ニ抱懷スル矛盾ニ因テ瓦
裂シ新タナル社會ノ發生ヲ期來スルモノデアル」ト謂フニ在
ル。マルクス主義ハ前述ノ理想的社會主義ノ後ヲ承ケテ唱ヘ
ラレタモノデアツテ、徒ラニ社會組織ノ不備ヲ嘆スルノミテ
ナク、進ンテ資本主義社會ヲ解剖シ、其ノ矛盾、不合理ノ原
因ヲ探究シテ、階級闘争ヲ強調シ、資本主義ノ没落ヲ説キ、
近世社會主義ノ祖トシテ社會主義運動ヲ指導シ、一時革命ノ
波ヲ以テ全歐洲ヲ風靡セントシタケレトモ歐洲大戦カ勃發ス
ルヤ戦争ニ關スル意見ノ對立ニ依リ二派ニ分立スルニ至ツタ
即チ、一ハ共產主義トナリ、他ハ社會民主主義トナツタ。
然シマルクス主義ノ重要ナル學說ハ、唯物史觀、剩餘價值説
資本集積説、資本主義崩壞説、階級闘争説等デアル。

(一) 唯物史觀

唯物史觀ハマルクス主義理論ノ中最モ重要ノ要素デアツテ
全組織中ニ浸透シテホルトコロノ獨特ノ歷史哲學デアル。
而シテ、唯物史觀ト剩餘價值説トノ二大發見ニ依リマルク
ス主義ハ科學的トナツタ。マルクスノ唯物史觀ニ從ヘハ「
歴史ハ人類進化ノ過程デアツテ常ニ物質生活力其ノ中心ヲ
ナシテ居ル、而シテ過去一切ノ歴史ハ原始時代ヲ除イテハ
階級闘争ノ歴史デアルト云フニアル。即チ、古代ノ社會
制度ハ自由民ト奴隸トノ經濟的對立ノ社會デアツテ奴隸ハ
自由民ノ物質生活ノ生産手段トナリ、又中世ノ封建社會制
度ハ貴族ト農奴トノ經濟的對立ノ社會デアツテ農奴ハ大名
僧侶ノ物質生活ノ基礎デアツタ。尙近世ノ資本主義制度ニ
於テハ労働者ハ資本家ノ衣食住ノ生産手段トナツテキル、
將來ハ労働者ヲ中心トスル社會主義社會カ歷史的進化ノ必
然的法則トシテ出現セラレラテアラウト云フデアル。

剩餘價值

(二) 剩餘價值説

剩餘價值

或ル商品ヲ作り之ヲ市場ニ於テ賣却シタ場合、其ノ賣上値
段カラ商品ヲ作ル爲ニ拂ツタ労働者ノ賃金（可變資本）ト
建物ヤ原料機械等及其ノ他ノ消耗品代、即チ、生産手段ニ
費シタ生産費（不變資本）ト引去ツタ時、其處ニ幾分か
ノ純益カ殘ル、之カ即チ剩餘價值トアル。此ノ剩餘價值ハ
常ニ労働其ノモノニ何等關係ヲ持タナイ企業家ノ懐ニ入り
彼等ノ生活ノ資料トナリ、其ノ一部ハ更ニ次ノ資本トナル
然ルニ此ノ剩餘價值ハ労働者カ其ノ労働ノ結果作り出シタ
生産品ノ價值ヨリハ常ニ幾キ賃金ヲ支拂ハレルニ因ツテ生
スルモノテアルカラ剩餘價值ノ獨占ハ即チ労働者ニ對スル
搾取テアル。要スルニ資本トハ企業家カ労働者ヨリ搾取シ
タモノニ外ナラヌト説クノカ剩餘價值説ノ骨子テアル。

資本集積説

(三) 資本集積説
剩餘價值ハ利子利潤地代等ノ名ニ依ツテ所有階級ノ取得ス
ルトコロトナリ、其ノ一部ハ化シテ新タナル資本トナル。

資本主義崩壊説

此ノ資本ハ更ニ剩餘價值ヲ生ミ、其ノ剩餘價值ハ又資本ニ
繰込マレル。斯クシテ資本ハ益々膨脹シ、集積シ、遂ニ公
少數ノ所有階級ノ手ニ集中サレル。而モ企業家ノ間ニ於テ
モ大資本ヲ強シ大規模ナル生産的手段ノ下ニ低廉ナル生産
費ニ依ツテ生産シ得ル所謂大企業家ハ競争場裡ニ於ケル優
勝者トナリ、小企業家ハ漸次大企業家ニ合併セラレ斯クシ
テ資本ハ集積ト共ニ經營ノ集中ヲ見ルニ至ルト説ク。之カ
資本集積説ノ骨子テアル。

(四) 資本主義崩壊説

商品ヲ基礎トスル自由ノ社會ニ於テハ人ハ其ノ所有スル所
ノ生産機關ヲ以テ各自由ナル生産ヲ行フ。即チ生産界ノ斯
クノ如キ無政府状態ノ下ニ於テハ生産ハ常ニ不規則ヲ極メ
遂ニ生産過剩ノ結果ヲ來シ、屢々生産及販賣ヲ頓挫セシメ
恐慌ハ頻々トシテ起リ、生産物ハ堆積シ、硬貨ハ潜伏シ、
工場ハ閉鎖シ、労働大衆ハ生活資料ヲ失ヒ、世ノ中ハ不景

氣トナル。然シ是等ノ状態ハ倍カニ商品生産ノ調整ニ依ツテ經濟界ノ回復ヲ圖ルコトヲ出來ルカ、斯カル状態カ周期的ニ繰返シ現ハレルコトニ因リ企業ハ遂ニ採算カ取レナクナル。即チ、資本主義經濟ハ其ノ自ラノ性質ニ依ツテ自然ニ崩壊スルモノデアルト説ク。

(五)階級闘争説

マルクスハ其ノ著「共產黨宣言」ノ冒頭ニ於テ「過去一切ノ歴史ハ階級闘争ノ歴史デアリ、此ノ階級闘争ハ近代社會ニ於テハ所有階級ト労働階級トノ闘争デアルト述ヘテキル。即チ、資本主義發達ノ結果、中産階級ハ崩壊シ、社會ハ生産手段ノ所有者トシテノ所有階級ト何物モ所有シナイ無産階級トニ分レ、此ノ兩階級對立ニ於テ資本ノ集積及集中ノ行ハレル結果、無産階級ノ膨脹ト其ノ窮迫トノ結果ハ遂ニ尨大ナル無産階級ノ自覺ヲ導キ、其ノ一致團結ハ、政治上

第二 マルクス主義ノ批判

ノ闘争ニ於テ勝利ヲ占メルコトトナルノテ無産階級ハ、先ツ彼等自身ヲ支配階級トシテ組織シ、生産手段ヲ國家、即チ、労働階級ノ手ニ集中スルコトカ必然デアルト主張シテキル。

マルクス主義ノ矛盾セル點ヲ概括的ニ說明スレハ、第一、其ノ主張スル唯物史觀ハ世界ノ本體ヲ凡テ物質ト觀、心ヲ物質ノ作用、物質ノ現象ト解シテ居ルノテアルカ吾々カ獨自ノ精神ヲ有シテ居ル限り、唯物論タケヲ以テシテハ人間生活ノ全般ニ對シ徹底シタ解釋ヲ下スコトハ出來ナイ。人間生活ニハ唯物質テハ働リ切レナイ精神生活ノ部面カ多分ニ存シテキル種メテ卑近チ一何ハ、日本ノ忠孝、禮先崇拝、信仰生活等ハ唯物質テハ到底之ヲ解釋スルコトカ出來ナイテハナイカ。第二ハ、マルクスカ過度ニ労働其ノモノニ偏重シテキルコトデアル。實際問題トシテ生産ニ労働ノ必要ナルハ勿論デアル

カ同時ニ資本モ亦同様ニ重要性ヲ有シテキル原料ヤ生産機具
 機械ナクシテハ如何ニ労働力ヲ振ツテモ一箇ノ生産品モ作り
 出スコトハ出来ナイノテアル。然ルニマルクスカ商品ノ價值
 ハ其ノ中ニ含まレタル社會的必要労働量ニ依テ決定セラレル
 モノアルトシ、資本ノ存在ヲ輕視シテキルノハ大ナル矛盾テ
 アル。與スルニマルクス主義ハ徹頭徹尾資本ヲ貶ス爲ニ立テ
 タル議論テアルト謂ハネハナラナイ。

第三ニ、マルクスハ凡テ資本ハ資本家ト企業家トカ労働者ヨ
 リ搾取シタトコロノモノテアルト述ヘテイルカ、一部分ノ資
 本家ノ搾取状態ヲ觀察シテ、直チニコレヲ以テ全體ノ眞理ナ
 リトスルコトハ出来ヌ。今日ニ至ルマテノ歴史ニ於テ資本カ
 勤儉節約其ノ他搾取ニ原因シナイトコロノ結果ニ依リ作ラレ
 タル場合ハ決シテ尠クナイ。然ルニマルクスカ經濟史ノ研究
 ヲ特ニ重視シテキルノハ其ノ主張スル理論ト矛盾スルモノテ
 アル。

第四ニ、マルクスハ人間ノ歴史ハ階級闘争ノ歴史テアルト言
 ツテ居ルカ、歴史ヲ檢討スルニ、或ル時代ニ於テハ利害相反
 スル階級間ニ闘争ヲ演出シタ時代ノアルコトハ事實テアルカ
 ソレハ階級闘争ト同時ニ階級融和カ常ニ行ハレ、斯クシテ、
 社會文化ハ進展シテ來タノテ階級闘争ノ繰返サレタモノト
 スレハ社會ハ常ニ破壊セラレテ建設カナイコトニナル。ソレ
 ハ事實ト相違スル。故ニマルクスノ理論ハ歴史上ノ事實ヲ無
 視シタトコロノ訛辯ト謂ハナケレハナラス。

第五ニ、マルクスハ筋肉労働タケヲ重視シテ精神労働ヲ無視
 シテイル。生産物ノ產出上重要ナ地位ヲ占メルモノハ、
 筋肉労働ト共ニ工場經營、其ノ他必要ナル企業家達ノ精神勞
 働テアル。而シテ精神労働ハ筋肉労働ニ比シ極メテ困難ナ立
 場ニアル。マルクスノ論ハ事實ヲ無視シタ筋肉労働偏重論テ
 アルト云ハサケレハナラス。

我カ國ノ唯物史觀ト唯マルクス主義ノ矛盾ヲ

第一 マルクス主義ノ唯物史觀ト我カ國體

マルクスハ其ノ唯物史觀ノ原理ニ於テ、現代ノ資本主義制度ハ必然的ニ社會主義制度ヘ進化スヘキモノナルコトヲ強調シ我カ國ノマルクス主義者モ亦コノ理論ヲ以テ現代制度ノ崩壞ト日本國家ノ消滅竝無產者獨裁政治出現ノ必然性ヲ主張シタカ、我カ國ノ歴史ヲ按スルニ古代神話ノ時代ハ暫ク措キ、族制時代、莊園時代、封建時代、資本主義時代等其ノ社會制度進化ノ歴史ハ外程上歐洲諸國ト略類似ノ過程ヲ辿ツテハ居ルカ、歐洲諸國カ社會制度ノ變遷ニ伴ヒ、其ノ政治組織、經濟組織、諸文化等カ必ス根本的ノ變革ヲナシタノニ對シ我カ國家ニ於テハ其レ等ト全然趣ヲ異ニシ、外觀上ノ社會形態コン變化ハシタカ其ノ如何ナル制度ニ際シテモ常ニ皇室ヲ中心トスル國家ノ中樞權力ノ下ニ進化シ、社會制度ノ進化ト國家權力ノ關係トハ全然別個ノ問題ニ屬シテ居ルノテアル。換言スレハ萬世一系ノ皇室ノ下ニ社會制度ノ進化ヲ來シテキルコト

ハ、實ニ三千年來不變ノ歷史的事實テアル。故ニ常ニ歷史的事實ヲ基礎トシテ立論スルトコロノマルクス主義ノ科學的理論ニ從ヘハ、我カ國ハ將來モ永遠ニ皇室中心ノ下ニ現代資本主義制度カラ次ノ社會制度ニ進化スルモノアルト結論セネハナラス。然ルニ世ノマルクス主義者等カコノ歷史的事實ヲ無視シテ日本資本主義ノ崩壞ト同時ニ無產者獨裁國家カ出現スルモノテアルト主張スルコトハ彼等自身ノ理論的矛盾ヲ暴露スルト共ニ我カ國體ヲ知ラナイ妄論テアルト謂ハナケレハナラズ。

次ニマルクス主義ハ其ノ唯物的史觀ニ基イテ社會制度ハ經濟的基礎ノ變化ニ從ツテ決定セラレ、各時代ニ於ケル經濟的基礎ノ上ニ、其ノ上層建築トシテ、政治的形態、法律、思想カ作ラレルモノテアルト主張シテイルカ、我カ國ノ歴史ニ徹スルニ決シテ經濟的基礎ノ上ニ政治、法律、思想等カ作ラレテハ居ナイ。寧ロ反對ニ、政治形態ノ下ニ法律、經濟關係カ規

マルクス
唯物主義

正セラレ思想カ作ラレテ居ルノヲ見ルノテアル。之ヲ近世日本社會制度ノ變遷ニ見テモ、徳川封建時代ノ經濟關係カ崩壞シ、新ニ成立シタ經濟關係ノ上ニ日本社會制度カ作ラレタモノハナクシテ、徳川幕府ノ崩壞ト大政ノ奉還ニ因リ、皇室ヲ中心トシテ新ニ明治政府ナル政治形態カ形成セラレ、其ノ政治組織ノ下ニ法律カ制定セラレ封建制度カ漸次解消シテ新ラシイ經濟組織カ構成セラレタモノテアル。現代ノ資本主義制度モ明治政府ノ下ニ新政治組織成立シ明治二十二年ノ憲法發布ニ因ツテ私有財産カ法的ニ保障セラレ更ニ日清日露ノ兩役ヲ經テ資本主義的經濟關係カ發達シ、世界大戦ニ依ツテ、所謂、國際資本主義國トシテノ發達ヲ見ルニ至ツタモノテアツテ、マルクスノ主張スル如ク經濟的關係カ土臺トナツテ、政治、法律、思想的關係ヲ建設シタモノテハナイ。

第二 マルクスノ唯物主義

マルクスノ唯物主義ハ、人生ノ崇高ナル精神生活ヲ全然閉却

共產主義
ノ概要

第一 共產主義ノ概要

シタ所論テアルカ、我カ國ニ於テハ之ニ反シ、傳統的精神生活テアル忠孝、武士道ノ精神カ多クノ社會生活ヲ支配シテキル。而シテ、此等ノ國民道德ハ人格價值ヲ以テ最高價值トスル精神主義、理想主義テアツテ、此レ等ノ精神生活ハ唯幾生活トハ全然別個ノ世界ニ於テ其ノ生命ヲ保ツテ居ル。此ノ我カ國民ノ傳統的精神生活ハマルクスノ主張ヲ以テシテハ到底説明シ得ナイモノテアルコトヲ知ラホハナラヌ。

第五目 共產主義

社會主義ト共產主義トハ共ニ私有財産制度ヲ否認スル思想體系テアツテ社會主義ハ生産機關ノ私有ヲ否定スルケレトモ、消費財ノ私有ハ之ヲ認メルモノテアル。換言スレハ土地、工場、機械、工具、其ノ他生産ニ必要ナル資本、所謂、生産機關ハ之ヲ社會ノ共有ニ歸セシムルケレトモ社會ノ一切ノ成員ニハ其ノ勞働ニ應ジテ生産品ヲ分配シ、其ノ自由處分ヲ認メ

ントスルモノアル
 共產主義ハ生産機關ノ私有ヲ否定スルト共ニ消費財ノ私有ヲ
 モ否定スルモノデアアル。換言スレハ生産機關ハ悉ク之ヲ社會
 ノ共有ニスルト共ニ、社會ノ成員ニハ、各能方ニ應シテ勞働
 セシメ、其ノ生産品ハ擧ケテコレヲ社會ノ共有トシ、社會ノ
 規定スル一定ノ消費財ノ中ヨリ、各人ノ欲スル財貨ヲ均等ニ
 分配セントスルモノデアツテ社會主義ニ比シ一層急進的ナル
 モノデアアル。之ヲ契約スルト爾者ハ共ニ私有財産ヲ否定スル
 カ、其ノ廢止サルヘキ私有財産ノ範圍ヲ生産手段ニ限定セン
 トスルモノカ社會主義デアツテ、生産、消費、何レノ部置ニ
 モ及ホサウトスルモノカ共產主義デアアル。
 以上ノ如キ區別ハ大體十九世紀ノ後半頃迄ノ觀念デアツタケ
 レトモ、現在ニ於テハ爾者ノ區別ハ私有財産廢止ノ範圍問題
 テハナク「私有財産ヲ廢止スル實現ノ方法ヲ暴力革命ニ求メ
 無産者ノ獨裁政治ヲ認メルヤ否ヤ」ノ問題ニ置イテ居ル。換

現在ノ共
産主義

言スレハ、現在ノ共產主義トハマルクス主義實現ノ方法ヲ暴
 力革命ニ求メ無産者獨裁政治ニ依ツテ實現シヨウトスル主義
 ト謂フコトカ出來ル。

第二 「ボルセヴィズム」ノ發生

「ボルセヴィズム」ニ於ケル「ボルセヴィズム」ノ發生
 「ボルセヴィズム」ニ於テハ一八七九年ニ秘密結社「土地及自由團」トイフモノカ生レ、之
 カ分裂シテ一ハ民意黨トナリ、一ハ社會民主黨トナツタ。前者ハ恐怖手段ニ依
 ツテ社會主義的社會ノ急進ナル建設ヲ企圖シタノニ對シ、社會民主黨ハ正當マ
 ルクス主義ニ基キ社會主義的社會ノ歴史の必然性ヲ期待シタノデアアル。然ルニ
 一九〇〇年前後ヨリ社會民主黨ノ内部ニ議會主義的右翼ト革命主義的左翼トノ
 二派ノ理想的對立ヲ生シタカ、一九〇六年ストツクホルムニ於ケル同黨大會ニ
 於テ兩派ノ論争ハ行ヘ左翼レーニン派ト右翼ブレハノフ派トニ分レテ投票カ
 行ハレタカ、左翼派カ多數デアツタノテ之ヲ「ボルセヴィキ」(多數派)ト呼
 シタ。斯クシテ爾來レーニン一派ノ左翼的革命黨ヲ「ボルセヴィキ」ト呼ビ「
 ボルセヴィキ」ノ主義主張ヲ「ボルセヴィズム」ト呼フニ至ツタノデアアル。
 「ボルセヴィキ」ハ最初ハコレヲ過激派ト呼ビ「ボルセイズ

於ケルニ
 「ボルセ
 ヴィズム」
 ノ發生

「プロレタリア」の歴史的使命

共産主義の批判

ムラト過激主義ト呼ンタカ、現在ニ於テハ「ボルセヴィズム」ハ恰モ共産主義ノ別名テアル如ク考ヘラレテキル。

第三 「プロレタリア」ノ歴史的使命

共産主義ノ歴史の必然性ト暴力革命ニ付テ共産主義者ハ、常ニマルクスノ唯物史観ニ立脚シテ資本主義社會ノ崩壊ト、共産主義社會ノ出現トヲ歴史の必然ノ歸結テアルト強調シテイ
ルカ、他面常ニ「プロレタリア」ノ歴史的使命ト云ツテ居ル

第四 共産主義ニ對スル批判

(一) 共産主義者ハ、前述マルクスノ所論ニ基キ、資本主義ハ其ノ内在スル諸矛盾ノ激成々熟ニ因ツテ崩壊シ共産主義社會カ必然的ニ出現スルト稱シテ居ルカ、何故共産主義カ歴史の且必然的ニ出現セネハナラヌカラ説明シテキナイ。又歴史の必然的ニ共産主義社會カ出現スルモノトスレハ「プロレタリア」ノ歴史的使命ト稱スル革命ノ指導ハ不必要トナル、之ハ矛盾テハナイカ。

(二) 歴史の必然性ヲ根本トシテ説明スル共産主義者ノ論旨ハ、

歐洲諸國ニ於ケル國家興亡ノ歴史ト、社會制度ノ變遷過程トニ照應スル時ハ、或ハ其ノ必然性ヲ妥當付ケルモノカアルカモ知レヌカ、然シ乍ラ我カ國ノ共産主義者カ其レ等ノ論理ヲ遵シテ以テ直チニ我カ國家ニ其ノ必然性ヲ強調スルカ如キハ、其ノ所謂歴史的事實ヲ無視シタ非科學的理論テアルト謂ハナケレハナラナイ。

我カ國ノ共産主義者カコノ歴史の必然性ニ對スル自家擴張ニ遭遇シ、我カ國ノ歴史的事實ヲ無視シタ理論ノ實行ハ到底不可能テアルコトヲ正視シ、我カ國情ニ即シタ理論構成ノタメ共産主義ノ陣營ニ反旗ヲ擡シタモノカ即チ彼ノ解消派テアル。

(三) 無産者ノ獨裁ニ付テ

共産主義者ハ常ニ資本主義社會ト共産主義社會トノ間ニハ一ツノモノヨリ他ヘ到ル過渡的時代トシテ「プロレタリア」

然則國家カ必然的ニ發生スル。而シテ此ノ獨裁ノ主要機關ハ勞働農民代表委員ヲナケレハナラス。此ノ下ニ於テハ先ツ第一ニ、共產主義社會ノ低キ段階テアル社會主義ハ完成セラレ、私有財産（生産手段）ハ廢止セラレテ全社會ノ共有ニ歸シ、社會ノ總テノ勞働員ハ社會ノ生産物ノ中ヨリ、其ノ當分ニ應ジテ分配クル時代トナリ、次テ完全ナル共產社會カ實現セラレテ消費財ノ私有モ廢止セラレ、人々ハ其ノ總テニ應ジテ労働シ、欲望ニ應ジテ與ヘラレル共產主義ノ總テ時代カ實現セラレ、遂ニハ獨裁國家ノ存在モ不必要トナリ、無制權力ハ消滅スルニ至ルモノテアルト述ヘテ居ル。然シテ今ノ現在ソヴェイトロシヤニ於テハ勞働黨執政ノ實現ハ稍高ト稱スルロシヤ共產黨ノ雖然タル獨裁政治ヲアツテ共產黨員以外ノ者ノソヴェイト政權獨與ハ絕對不可能テアリ、實質ハ「プロレタリア」ノ獨裁テハナクシテ實ニ少數ノロシヤ共產黨者少少ノ共產黨幹部カ一億數千

萬ノロシヤ民族ニ號令シツツアルノテアル。而シテロシヤノ制度ニ於テモ新經濟政策ノ採用等ニ依ツテ反對ニ資本主義的政策ノ採用等ニ依ツテ反對ニ資本主義的政策ニ逆轉シツツアルノヲ見ル。

第六目 社會民主主義

第一 社會民主主義ノ意義

社會民主主義トハ社會主義ト民主主義トノ結合セルモノヲ意味シ議會制度ヲ通シテ一切ノ社會問題ヲ解決シヨウトスル思想テアル。約言スレハ社會民主主義ノ主張ハ共產主義ニ比シ穩健テアツテ且共產主義ト是モ尖鋭ニ對立スル理論ハ革命ノ方法及政治形態ニ關スル見解ニ存スルモノト謂フコトカ出來ル。

第二 社會民主主義ノ主張

(一) 議會主義（革命ノ方法）

社會民主主義者ハ政治的闘争ノ中心ヲ議會内ニ於ケル闘争

社會民主主義ノ意義

社會民主主義

ニ置クヘキコトヲ強固スル。即チ議會主義ヲテアル。而モ議會ヲ革命戰術ノ一トシテ利用スヘキコトヲ主張スルノミテナク、議會ニ多數ヲ占メルコトニ依テ平和種ニ革命ヲ行フコト換言スレハ革命ノ前進性ヲ主張スルモノテアル。

(三) 獨裁反對 (民主主義)

社會民主主義者ハ獨裁主義ニ反對シ社會主義ハ「デモクラシー」政治ノ下ニ實現セラルヘキモノテアルト主張スル。即チ革命後ノ政治形態ハ民主主義政治タルヘキモノテアツテ「プロレタリア」獨裁政治ト云フ如キ一階級ノ專制ハ絕對ニ排斥シ多數ノ長衆ノ意思ニ從ツテ政治ヲ行ヒ社會主義社會ヲ實施セシムヘキテアルト謂フノテアル。

第三項 右翼思想

右翼思想
「ファツ
シズム」

第一

「ファツシヨ」運動ノ起原
「ファツシヨ」運動ノ起原ハ伊太利ノムツソリニ政治運動

ニ端ヲ發スル。

彼ハ歐洲大戰直前迄ハ伊太利社會黨機關紙ノ主幹テアツタカ主戰論ヲ唱ヘタ廉ニ因リ社會黨ヲ除名セラルルヤ社會主義ヨリ轉身シテ愛國的民族主義運動ヲ爲スニ至リ一九一九年同志百五十名ヲ以テ「戰闘者ファツシヨ」ナル新團體ヲ組織シタ。

「ファツシヨ」トハ「結束」ノ意テアル。當時伊太利ノ政治的事情ハ混亂ノ極ニ達シ、國內一般ノ社會情勢モ頗ル不安テアツタ。「ファツシヨ」運動ハ國內ノ斯クノ如キ危機ニ直面シテ著シイ發展ヲ遂ケ一九二一年ムツソリニハ「ファツシスト」國民黨ヲ組織シタ。彼ノ率ヒル在郷軍人、中産階級者、勞働者等ノ「ファツシヨ」團體ハ其ノ國情ヲ慨嘆シ、一九二二年十月決然起ツテ「クーデター」ヲ斷行シ、内閣組織ノ大命ヲ受ケ、茲ニ獨裁政府ヲ樹立シタ。爾來十有七年餘ムツソリニハ其ノ政權ヲ保持シ引續キ獨裁政治ヲ行ヒツツアル。

第二 「ファツシズム」ノ發生

ムツソリニ此ノ運動ヨリ類似ノ運動カ各國ニ起ツテ來タ。斯カル種類ノ運動ハムツソリニノ世界的ニ有名ナル「ファツ

「ファツ
シズム」
ノ發生

「シヨ」ニ因ンテ一般ニ「フアツシヨ」運動ト呼ハレルニ至ツタ。

「フアツシヨ」ノ意義

第三 「フアツシズム」ノ意義
「フアツシズム」ニ關シテハ「フアツシヨ」自ラ何等説明スル所ナク、從テ何ヲ以テ「フアツシズム」ト見ルヤニ關シテハ未タ定説ハナイ。併シ乍ラマルクス主義者ニ依レハ「フアツシズム」トハ自由主義及共產主義ヲ除ク社會改革思想テアツテ愛國主義ヲ標榜シ、而モ究極ニ於テハ資本主義ヲ擁護スル思想テアルト評シテキル。

「フアツシズム」ノ内容

第四 「フアツシズム」ノ内容
「フアツシズム」ノ代表的理論トシテハ伊太利ノ「フアツシヨ」ノ綱領、政策、行動等ヨリ歸納シテ構成セラレタモノヲ舉ケルコトカ出來ル。其ノ重ナルモノハ次ノ如キモノデアアル

(一) 愛國主義
所謂「フアツシズム」ノ政黨乃至團體ニハ或ハ愛國主義的

大衆行動主義

(二) 大衆行動主義
主張ヲ掲ケ、或ハ國民主義ヲ標榜シ、或ハ國家主義ヲ提唱スルモノカアルケレトモ、愛國主義的又ハ民族主義的精神ヲ其ノ基調トシテキル點ニ於テハ同一デアアル。而シテ此ノ二ツノ主義ハ觀念的ニ觀ルトキハ國民主義ハ國際主義ニ對立シ、國家主義ハ個人主義ト對立シ、其ノ内容ハ同シテナイ。然シ乍ラ現實的政黨ニ於テハ兩者トモ國際主義ヲ否認シ、團體主義、全體主義ヲ唱ヘルモノデアアルカラ、結局ニ於テハ兩者ハ同一ノモノト解シテ差支ナイデアアル。

(三) 大衆行動主義
「フアツシズム」ハ反議會主義ヲ採用シテ居ル。今日ノ選舉ハ決シテ公正ナモノトハ斷ヒ難イ。從テ選舉ノ結果ハ必スシモ國民ノ輿論ヲ示スモノテハナク議會ニ於テ輿論政治ヲ期待スルハ、恰モ木ニ依テ魚ヲ求ムルカ如ク到底多數國民ノ利益幸福ヲ實現スルコトハ困難デアアル。

獨裁主義

ノ大衆行動アルノミテアツテ夫レハ示威運動、大衆ヲ煽動
スル演說會等ノ方法ニ依ツテ行ハレル。
而シテ議會ハ單ニ大衆行動ノ一部分トシテ大衆的宣傳ノ目
的ニノミ利用スヘキテアルト謂フノテアル。

(目) 獨裁主義

「フアツシズム」ニ民主主義ヲ以テ國民ノ安危ヲ及肩ニ擔
ヒ斷乎タル政策ヲ實現スルコトノ出來ル永續性アル獨裁政
府ヲ樹立セントスル。

而シテ獨裁政治ノ形式ハ共產黨ノ如ク、一階級獨裁制ヲ採
用セス、全國民的組織即チ階級ヲ問ハス有爲ノ人物ヲ以テ
政府ヲ組織セントスルノテアル。

(四) 經濟組織ノ改革又ハ變革

現在ノ資本主義經濟組織ニ對シテハ比較的徹底的改革ヲ爲
スヘキコトヲ主張シテ居ル。

(四) 反共產主義

經濟組織
ノ改革又
ハ變革

反共產主義

共產主義反對ハ「フアツシズム」發生ノ社會的根據ノ一ヲ
爲スモノテアルカラ共產主義ノ主張ニ對シ對立的态度ニ出
ルノハ當然テアル。

第五 我カ國ニ於ケル「フアツシズム」

西洋崇拜癖アル日本人中ニハ伊太利ニ「フアツシヨ」ノ標頭
ヲ見ルヤ、直チニ採ヲ以テ官僚「フアツシヨ」或ハ軍部「フ
アツシヨ」等ト呼稱シ、甚シキニ至ツテハ反國家主義的思想
運動ニ對應ス愛國運動ヲ目シテモ直チニ「フアツシヨ」運動
テアルト解スル者カアル。兎ニ角權力的武力的形態カ存在ス
レハ直チニ「フアツシヨ」呼ハリヲスル傾向カアル。斯クノ
如ク「フアツシヨ」ニ對スル解釋ハ區々テアツテ現ニ政黨政
治ニ反對スルモノハ凡テ之ヲ「フアツシヨ」テアルト速斷ス
ルモノサヘアル状態テアル。

然シ乍ラ、我カ國ニ於テモ滿洲事變ヲ契機トシテ「フアツシ
ズム」熱勃興シ、此ノ極思想ノ出現シタコトハ否ムコトノ出

我カ國ニ
於ケル
「フアツシ
ズム」

來ナイ事實テアル。

第二目 「ナチズム」

第一 ナチス運動ノ起原

ナチスハ獨逸ヒツトラールカ祖國ノ國權ヲ回復セントシテ起シタ所ノ政治運動テアル。彼ハ一九一四年七月南獨バイエルン州ノ首府ミュンヘンニ於テ歐洲大戰ニ遭遇シ直チニ從軍シタカ一九一八年十月戰傷ヲ負ヒ戰線ヲ後退陸軍病院ニ於テ療養中祖國ハマルクス派ノ策動ニ依リキール軍港ニ於ケル水兵ノ革命事件ヲ發端トシ遂ニ聯合軍側ニ投降セルヲ聞キ爾來マルクス主義ヲ祖國獨逸ノ敵トシテ之ヲ擊滅スルノ決意ヲ固メ治癒退院後獨逸勞動黨ニ加入シ幾許モナクシテ之カ指導權ヲ獲得シ一九二〇年二月ナチス即チ獨逸國家社會黨ヲ創立セリ。

次テヒツトラールハ一九二五年猛烈ナル議會運動ヲ開始シ漸次自黨ノ議員數ヲ増シ一九三三年一月遂ニ首相トナリ其ノ翌年

更ニヒンデンブルグ大統領ノ後ヲ承ケテ獨逸ノ總統（フユラ）トナリ遂ニ其ノ政府ヲ獲得シタノテアル。

第二 ナチズム（獨逸國家社會主義）ノ意義

ヒツトラールハ自ラナチズムヲ定義シテ曰ク「我等ノ偉大ナル國家、獨逸ヲ理解シ人民トシテモ國家トシテモ此ノ獨逸以上ニ如何ナルモノモ尊キモノハ存在セスト信シテ居ルモノ夫レカ即チナチズムテアルト。更ニナチスノ指導者ドクトル、ライハ之ニ附言シテ曰ク「眞ノ社會主義ハ其ノ各市民カ其ノ智モ其ノ生命モ彼ノ民族ト彼ノ獨逸ニ對シテ捧クヘク準備シテ居ルコトニ於テ成立シテ居ルト。

之ニ依リナチズムハ強烈ナル國家主義テアルコトカ明瞭テアル、從來ノ社會主義ハ個人又ハ階級ノ幸福カ其ノ主眼點テアツタノテアルカ此ノ主義ニ於テハ國民全體ノ利益カ其ノ目的テアル從テ個人企業ト個人所有權トハ唯ソレカ社會全體ノ利

益ニ役立ツト云フ範圍ニ於テノミ存在カ許サレルモノテアル
ヒツトラ一ハマルクスノ精神ノ中心ハ「無産者」ト云フ觀念ニアル。此ノ觀念
ハ破壞的テアリ、階級闘争ハ之カ爲ニ起リ産業ハ衰へ獨逸ハ之ニ依テ衰亡スル
故ニ此ノ無産者ノ觀念ヲ撲滅スルヲ要ストシ別ニアルバイター(勞働者)ト云
フ觀念ヲ國家ニ普及シ無産者ノ觀念ト置キ換ヘタノテアル。此ノ勞働者ノ觀念
ニ依レハ「勞働者ハ社會構成ノ一部分テアル各々其ノ人格ヲ異ニスルト共ニ其
ノ職能ヲ異ニシ從テ此ノ社會構成員ノ間ニ優劣ノ差カナク勞働者各個ノ人格ハ
名譽アル光輝存在テアツテ國家ノ繁榮ヲ以テ自己ノ繁榮ト基礎ト考ヘ從テ國家
ニ對シテ其ノ義務ヲ痛感シ社會ノ産業ニ對スル協力ノ自覺ヲ有セオハナラヌト
云フノテアル。

第三 ナチズムノ内容

フアツシズムノ内容ニ於テ説明シタ所ト略同一ニ付省略スル

第三目 我カ國ニ於ケル右翼思想

我カ國ニ於ケル右翼思想ハ必スシモ「フアツシズム」系テハ
ナイト斷定スルコトカ出來ルカ之ニ類似ノ點ハナイトハ云ヘヌ

日本主義

其ノ思想ヲ大別スルト日本主義、國家(國民)社會主義、及
本自治主義ノ三ト爲スコトカ出來ル。其ノ主張ノ概要ハ左ノ通
テアル。

第一 日本主義

日本主義ハ人ニ依リ其ノ主張ヲ異ニスルケレトモ一君萬民ノ
理想ヲ揚ケ、天皇中心ノ下ニ萬民平等ノ理想ヲ實現セントス
ル點ニ於テ何レモ共通點ヲ有シテキル。

日本主義者ノ二三ノ主張ヲ例示スルナラハ左ノ如クテアル
「日本精神ハ階級利益ヲ本位トスル部分主義テナク、全體
ヲ生カシ日本全體ノ利益ト幸福トヲ發展セシムルトコロノ
原動力テアル」

「日本主義ノ眞髓ハ萬世一系ノ天皇ヲ中心トシテ日本民族
カ一心同體ニ家族生活ヲ爲シ一切ノ自我ヲ棄テテ此ノ中心
的對象ノ中ニ自己ノ一切ヲ捧ケルコトニ依ツテ自己ヲ最も
完全ニ生カスノ道トスル處ノ信念ト實踐ノ總テヲ指稱スル

モノテアル

所謂議會政治又ハ政黨政治ニ對シテハ之ヲ以テ我カ國體ニ適合セサルモノトシテ獨裁政治ヲ主張シ、又國際的政策ハ國際協調ノ中ニ日本第一主義ヲ採リ、經濟政策ハ反資本主義ヲ提唱スルモノテアル。

第二 國家社會主義及國民社會主義

國家社會主義ノ意義ニ付テハ未タ定説ハナイカ、國家主義、社會主義トノ結合シタモノト觀ルヘク、約言スレハ、先ツ國民全體ノ幸福ヲ實現シ、利益ヲ増進スル爲ニ、一國內ニ社會主義ヲ建設シタル後、國際協調ヲ圖リ、世界萬邦ノ利益ヲ考慮スヘキテアルト論スルモノテアル。
次ニ國民社會主義トハ、國民主義ト社會主義トノ結合シタモノト觀ルヘキテ其ノ國家理論ハ民族的國家觀テアツテマルク、主權ノ階級的國家觀ヲ否定シ、國家ノ本質ハ社會ノ統制權ヲ護ノ傾向ヲ示シ、一般國民ノ幸福ヲ主眼トシテ民族ノ發展カ

農本自治主義

第三 農本自治主義

同時ニ國家ノ發展テアルトナスモノテアル。
然シ乍ラ實際問題トシテ國家社會主義ト國民社會主義トノ兩者ヲ區別スルコトハ至難テアツテ我カ國ニ於テハ多少國民社會主義ノ傾向アルモ等シク國家主義ト稱セラレテキル。

農本自治主義ハ農業ヲ基本トスル經濟組織ヲ樹立シ、農村ヲ基礎トスル自治制度ヲ建設スルコトヲ以テ其ノ根本精神トスルモノテアル。即チ、此ノ制度ヲ以テ我カ國建國以來ノ國是テアルトシ、資本主義制度ハ商工業ニ偏シ、都市ヲ發展セシムル代リニ農村ヲ破壊シ、自治ノ基礎ヲ危クスルモノテアルトシテ之カ廢止ヲ主張スルモノテアル。

第二章 日本社會運動概觀

第一節 左翼運動

第一款 日本共產黨運動

第一 國民共產黨
〔大正一〇、八組織〕
〔同 一〇、一二檢舉〕

國民共產黨

大正十年八月二十一日、近藤榮藏、高津正道等ニ依ツテ創立
セラレタ曉民共產黨ハ我カ國ニ於ケル最初ノ共產黨テアツタ
カ同年十二月一昧ノ者カ治安警察法違反トシテ檢舉セラレ一
頓控スルニ至ツタ。

五三

第一次共 産黨

第二 第一次共產黨

〔大正一〇一七組
同 一〇一六檢舉三〇名〕

大正十一年四月、保釋出獄シタ近藤榮藏等ハ密ニ同志數名ト
相謀ツテ再ヒ黨ノ結成ヲ計畫シ、遂ニ同年七月十五日國際共
産黨（第三インターナショナル）日本支部トシテ日本共產黨
ヲ設立シ、境利彦カ其ノ總務幹事トナツタ。而シテ同黨ハ大
正十二年三月頃ニ於テ八十餘箇ノ細胞ト五十餘名ノ黨員ヲ獲
得シタト稱セラレテ居タケレトモ、其ノ年六月三十餘名ノ幹
部カ檢舉セラレ、治安警察法違反トシテ處刑セララルニ至ツ
タ。

第二次共 産黨

第三 第二次共產黨

〔三、一五事件 昭和元、一三組
同 三、一六檢舉四八五〕

此ノ第一次共產黨ニ連繋シ各地ニモ長野共產黨〔大正一三、一三組
同 一三、一四檢舉〕 名古屋共産
黨〔大正一三、一七組〕 那馬青年共產黨〔大正一三、一七組
同 一三、一八檢舉〕 力組織セラレテ居タ
然シ之等ノ相繼ク檢舉ト大正十二年九月ノ關東地方大震災トハ我カ國ノ共產黨
運動ヲ全體的ニ頓座セルニ至ツタ。

留分子ニ依リ其ノ後再建運動行ハレ、大正十五年末頃ニハ百
數十名ノ黨名ヲ組織スルコトカ出来タノテ遂ニ結黨ヲ企テ、
同年十二月山形縣五色温泉ニ於テ福本和夫、徳田球一、佐野
學、渡邊政之輔、佐野文夫等ノ幹部ニ依ツテ再ヒ日本共產黨
ノ創立ヲ見ルニ至ツタ。黨ノ目的トスル所ヲ約言スレハ「世
界革命ノ一部トシテ暴力ニ依ル日本革命ヲ行ヒ労働者階級ニ
依ル獨裁政治ヲ實現セントスル」モノテアル。

斯クノ如クニシテ日本共產黨ハ再建セラレタケレトモ、共產黨運動ノ指導理論
ニ付ニツノ流レカアツテ、互ニ對立シテ容易ニ一致シナカツタ。即チ、山川均

五三

山川「イ
ズム」

ノ主張スル山川「イズム」ト福本和夫ノ主張スル福本「イズム」ノ對立カ之デ
アル。

(A) 山川「イズム」ニ依レハ、革命ノ進行ハ大衆ノ左傾化ニ基礎ヲ置カナケレ
ハナラナイ、從テ先ツ日本共產黨ハ大衆ノ獲得ニ努ムヘキテアル。又一方ニ
於テハ、生産機關カ一定ノ程度ニ發展シ、大衆カ其ノ採取ニ堪ヘ得ナイト謂
フコトヲ意識シタトキニ於テノミ革命ハ成就スルモノテアル。故ニ革命運動
ハ此ノ基礎理論ノ上ニ進導シテハナラナイト謂フニアル。

(B) 福本「イズム」ハ、革命運動ノ促進ハ精銳ナル分子ノ活動ニ依テノミ目的
ヲ達スルコトカ出來ル、從テ共產黨ハ一切ノ問題ニ對シ、峻烈ナル理論闘争
ヲ行ヒ分裂スヘキモノハ分裂シ合一スヘキモノハ合一シテ、眞ニ主義理論ノ
同一ナルモノノミカ團結シ革命ノ氣運ヲ促進スヘキテアル。

闘争ノナイ所ニ發展ハナイ、發展ハ闘争ニ依テノミ求メラルヘキモノテアル
ト述ヘテ居ル。

以上ノ如ク兩者ノ意見カ對立シタノテ、昭和二年、福本ヲ始メ、渡邊政之輔及
佐野文夫等ヲモスコトニ派遣シ、「コミンテルン」ノ批判ヲ仰イタ。然ルニ「

福本「イ
ズム」

三、一五
事件
第三次共
産黨

「コミンテルン」ハ福本「イズム」ニ反對シ、且精細ナル活動方針ヲ指示シタノ
テ福本「イズム」ハ俄ニ凋落スルニ至ツタ。

斯クテ昭和三年一月以降、日本共產黨ノ活動ハ從來ノ秘密主
義ヨリ一轉シテ公衆ノ面前ニ露骨トナリ、ビラ等ノ上ニハ現
ニ日本共產黨ノ名ヲ用ヒ、其ノ綱領等モ機會アル毎ニ大衆ノ
目ニ觸レサセル政策ヲ採ルニ至リ、同年二月ノ衆議院議員選
舉ニ際シテハ黨名ヲ印刷シタ宣傳ビラノ類ヲ盛ニ撒布シタ。
然ルニ昭和三年三月十五日未明、四百八十餘名ノ共產黨關係
者ハ一齊ニ檢舉セラレタ。之カ即チ三、一五事件テアル。

第四 第三次共產黨(四、一六事件)

三、一五事件ノ以後、黨關係者ハ間斷ナク行ハレタケレトモ
最高幹部タル佐野學、渡邊政之輔、鍋山貞親、市川正一、三
田村四郎等カ檢舉ニ洩レテ居タタメ、黨ノ再建運動ハ執拗且
大膽ニ行ハレタ。

即チ三、一五事件直後、ロシヤニ赴イタ市川正一ハ昭和三年

四、一六
事件

十月新組織方針ヲ携ヘテ歸國シ、活潑ニ組織運動ヲ進メ、全國的ニ再ヒ相當ナ組織ヲ現出シタ。昭和四年四月十六日所謂四、一六事件ノ一齊檢舉ノ行ハレタノハ之カ爲テアル。而シテ此ノ檢舉ニ際シテハ、黨ノ直接關係者以外ニ、同情的立場ニ立チ、黨關係者ニ資金及住宅等ヲ提供シタ者カ多數檢舉セラレタ。

解黨派

又佐野學、鍋山貞親、市川正一、三田村四郎等ハ此ノ檢舉ニモ免レタケレトモ廳テ市川先ツ捕ハレ、鍋山、三田村亦幾何モナク赤坂ノ花柳界ニテ藝妓ト遊興中ヲ檢舉セラレテ醜ヲ天下ニ晒シ、佐野ハ上海ニ於テ同年夏檢舉セラレ、渡邊ハ基隆埠頭ニ於テ自殺シ、斯クテ黨幹部ハ全部消滅スルニ至ツタ。茲ニ注意ヲ要スルハ、共產主義實現ノタメニ合法ヲ主張スルニ至ツタ解黨派ト謂フモノノ存在テアル。即チ、解黨派トハ日本共產黨關係者中ノ幹部數名カ三、一五事件ノ爲入獄中、黨ノ從來ノ行動ヲ反省シタル結果、從來黨カ大衆ノ支持ヲ受ケルコトカ出來ナカツタノハ、其ノ綱領カ日本ノ現實ニ適應シナカツタ

更生共產黨

第五

爲テアルトシ、日本共產黨ハ須ク「コミンテルン」ヨリ絶縁シ、獨自ノ指導精神ヲ戰術トヲ採用スヘキテアルト主張スルモノテアツテ、其ノ主張中最モ肝要ナル點ハ君主ニ對スル從來ノ誤謬ヲ清算シタル點テアル。

第五 更生共產黨

(一三二二事件 昭和四年七月二日 檢舉七八一織)

三、一五事件、四、一六事件ノ檢舉ニ依リ、黨ノ活動ハ一時閉塞シタケレトモ當時檢舉ヲ免レタ田中清玄、前野善四郎等ノ中央分子ハ昭和四年六月ヨリ黨ノ再建ヲ企テ、七月ニハ機關紙「赤旗」ヲ再刊シ、黨ノ再組織擴大強化ニ努メタカ絶エス檢舉彈壓ヲ加ヘラレタ。之カ爲殘留分子ハ其ノ壓迫ヲ避ケテ東京ヨリ地方ニ黨ノ中央根據ヲ移動シ、昭和五年一月十二日ヨリ十六日ニ亘リ和歌山縣二里ヶ濱ニ於テ擴大中央委員會ヲ開催シ、田中清玄ヲ委員長トシテ正式ニ共產黨ヲ再建シタ

二、二二
事件

昭和五年二月、衆議院總選舉ニ際シテハ選舉闘争同盟ヲ組織シテ全國的ニ大膽ナル表面運動ヲ開始シ軍隊、軍工場、地方大工場等ニ盛ニ宣傳ビラヲ撒布スルニ至リ、遂ニ二月二十二日一齊ニ檢舉セラレタ。之カ即チ二、二二事件テアル

尙本檢舉ニ當ツテモ四、六事件ト同様大學教授、著名作家カ資金供給者トシテ多數檢舉セラレタ。

新生共產黨

第六 新生共產黨 (昭和六、一、二 組織熱海事件又ハ一〇、三〇事件)

屢次ノ檢舉ニ依リ日本共產黨首腦部ハ潰滅シタケレトモ、昭和六年一月ロシヤヨリ移カニ歸國シタル風間丈吉及四、一六事件保釋出獄中ノ紺野與次郎等中心トナリ、黨組織再建ヲ企テ昭和六年一月十二日黨中央部ヲ組織シタ。而シテ此ノ非常時共產黨ハ日本團體ノ精華タル天皇制ニ對シ從來ノ如キ消極的態度ヲ棄テ積極的ニ公然ト鬪争スヘキコトヲ主張シタ。勿論之ハ「コミンテルン」ヨリ授ケラレタ指令ニ因ルモノテアルカ、其ノ影響ハ外廓團體タル日本勞働組合全國協議會(略稱全協)ノ行動ノ上ニ行ハレ全協ハ君主制ノ廢止ヲ最高「スローガン」トシテ公然ト真正面ニ掲クルニ至ツタ。

又滿洲事變對國際聯盟關係、農村ノ窮乏金融ノ逼迫等國際的、國內的、諸情勢ニ因リ世界戰爭ノ危機ニ直面シテ居ルト爲シ、軍隊ヲ革命線ニ獲得スルタメ

昭和七年七月中央委員會軍事部ヲ設立シ機關紙「兵の友」ヲ創刊シテヨリ其ノ對軍隊活動ハ著シク活潑トナリ、陸海軍ヲ通シ軍隊工場ニ働キ掛ケ、細胞ヲ結成シテ軍隊ノ赤化ニ努メ、遂ニ海軍々令部ノ組織策動ヲ始メ、陸海軍諸部隊ニ於ケル劃期的各種策動事件ヲ惹起スルニ至ツタ。

一方共產黨中央部ハ戰爭勃發ニ際シテノ内亂計畫ノタメ、巨額ノ資金ヲ收集スルコトヲ計畫シ、其ノ目的ヲ遂行スル爲ニハ其ノ手段ヲ選ハス、即チ太蒸銀行「ギヤング」事件ヲ初メトシ良家ノ子女ヲシテ大金ヲ拐帶セシメ、富豪ノ弱點ヲ擡ツテ脅喝ヲ行ヒ、美人肩ヲ以テ富豪ノ子弟ヨリ資金ヲ取ル等ノ方法ヲ講シ資金調達ニ狂奔シタケレトモ遂ニ昭和七年十月ノ所謂一〇、三〇事件ニ依リ、昭和四年七月以降ノ第四次共產黨ハ一時潰滅ノ狀態ニ陥ツタ。

第七 共產黨幹部ノ轉向問題

昭和八年六月佐野學、鍋山貞親等ノ有力幹部ハ日本ノ客觀的情勢ヨリ判斷シテ「コミンテルン」ノ指令カ到底我カ國ニ於テハ行ハレ難キヲ知り國際共產黨トノ分離、君主制ノ容認、政敵主義ノ拋棄等ヲ發表シタ。此ノ轉向問題ハ日本共產黨遲

一〇、三〇事件

共產黨幹部ノ轉向問題

動ニ一大波紋ヲ起シ、相イテ轉向聲明書ヲ發出セシメ、惜モ日本共產黨ノ轉向時代トモ稱スヘキ状態ヲ現出シタ。然レ乍ラ、彼等ノ轉向内容ハ未タ幾多ノ疑問カ存シ、其ノ真意カ察邊ニアルカト謂フコトハ全く不明テアル。蓋シ彼等ノ主張ハ單ニ我カ國情ニ從ヒ其ノ政策ヲ變更シタ共產主義ニ過キナイカラテアル。

第八 非常時共產黨事件後ノ狀況

日本共產黨ハ昭和七年十月非常時共產黨事件トシテ世人ニ一大衝撃ヲ與ヘタル所謂一〇、三〇事件ノ一齊檢舉ニ遭遇シ、殆ント組織怒潰滅ノ状態ニ陥リ再起困難ト思ハレタケレトモ其ノ後漸ク相互ノ連絡ヲ恢復スルヤ、新ニ國際共產黨暫定規定ニ依リ黨員ノ獲得組織ノ變改ヲ企圖シ、又新戰術ヲ採用シテ軍需工場従業員ノ赤化ヲ煽動シ、或ハ軍事部突撃隊ヲ編成シ、一意軍隊ノ崩壞ヲ目標トシテ行動スル等、其ノ活動ハ決シテ屏息シナイノミナラス却テ執拗潛行的トナリ、當局屢次

非常時共產黨事件後ノ狀況

ノ彈壓ニモ屑セズ漸次組織網ヲ擴大シ、大衆ノ獲得運動ヲ續ケタノデアアル。

尙其ノ頃我カ國思想運動史上未曾有ノ不穏ヲタル司法官赤化、教員、官公吏ノ檢舉等弊弊スヘキ事件ヲ續出シテ心アル國民ヲシテ多大ノ不安ヲ感セシメタ。加之、強黨分子ハ黨ノ衰勢挽回ヲ爲、昭和十年「コミンテルン」第七回大會ノ決議ニ基キ「ファッシュム」ノ攻撃ニ對スル勞農大衆ノ獲得ヲ目標ニ内部抗争ヲ中止シ、社會大衆黨及右翼其ノ他有ニル合法團體ニ擬裝潛入シ、合法假面ノ下ニ再建運動ヲ企圖スルニ至ツタ。而シテ昭和十一年ニ於テハ、舊形態ニ基ク潛行運動ノ外ニ、佛蘭西、西班牙等ノ人民戰線ノ刺戟ヲ受ケテ此ノ新形態ニ依ル運動ヲ畫策シ、殊ニ二、二六事件ニ依ル一般社會ノ混亂及官憲取締ノ間隙ニ乘シ、地方ニ於テ秘ニ再建運動ヲ企テルト共ニ又合法組織ノ實權ヲ掌握シ其ノ闘争目標ヲ反「ファッシュヨ」戰線ノ確立ニ導キ、以テ「コミンテルン」ノ方針具現ニ努メタヲテアル。

第九 人民戰線新裝共產黨

以上述ヘタ如ク我カ國ノ共產主義運動ハ數次ノ彈壓ニ因リ殆

人民戰線新裝共產黨

六二
 ント潰滅状態ニアツタケレトモ、昭和十年七月「コミンテル
 ン」第七回世界大會カ從來ノ闘争方針ヲ一變シテ「人民戦線」
 ヲ確立シテ以來、共産黨ヲ通シ、我カ國ニ對シテハ積
極的ニ働キ掛ケテ來タ。之ニ勢力ヲ得タ和田四三四、宮本喜
 久男等ハ昭和十一年四月、大阪ニ於テ日本共産黨準備會ヲ結
 成シ、東京ノ同志著述家江口漢、千賀史郎、草間三喜雄ト連
 絡ヲ取り、合法的假面ノ下ニ蠢動ヲ開始スルニ至ツタ。
 依テ昭和十一年十二月五日、全國一齊ニ之等非法分子ノ總
 檢舉カ行ハレ、被檢舉者實ニ千三百名ニ及ンタ。
 茲ニ注意ヲ要スル點ハ、彼等ノ闘争方針カ從來ノ夫レト異リ、
 合法的假面ノ下ニ、或ハ政黨ニ、或ハ労働組合ニ潛入シ、之
 等團體員ヲ形式的ニ共産黨ニ加入セシムルヨリハ、寧ロ實質
 的ニ共産黨ノ活動ニ參加サセルコトニ力ヲ注ク戦術ヲ採用セ
 シムルコトデアツテ是レ皆「コミンテルン」ノ方針指示ニ基
 クコトハ勿論デアル。

支那事變
 勃發ニ於
 ケル狀況

第十 支那事變勃發後ニ於ケル狀況

昭和十二年七月支那事變勃發スルヤ、共産分子ハ之ヲ以テ所
 謂「戦争ヲ内亂ヘ」移スヘキ絶好ノ機會デアルト爲シ事變初
 期ニ於テハ専ラ人民戦線運動ヲ通シテ左翼的意識ノ啓蒙ニ努
 メテ居タカ事變ノ長期ニ伴ツテ之等合法ヲ擬装スル運動ハ社
 會各方面ニ廣範圍ニ亘ツテ巧妙ニ展開セラレ特ニ思想前衛者
 ヲ中心トスル活動ノ活潑化ヲ認メラルルハ注意ヲ要スル所テ
 アル又一方非合法ニ依ル黨再建運動モ擡頭シ來ツテ頓ニ活潑
 トナリ昭和十二年以降ノ檢舉情況ハ左ノ通ニシテ彼等ノ策動
 ニ對シテハ將來益々嚴視ヲスルモノトス

昭和十二年度	一五二二名
昭和十三年度	六四九名
昭和十四年度	三二五名
昭和十五年度	六三三名
昭和十六年度	九三四名

第二款 日本共産黨外廓運動概説

日本共産黨ノ直接指導下又ハ影響下ニ在ツテ其ノ補助的役割ヲ演シ黨ノ目的達成ノ爲行動スル團體ヲ其ノ外廓團體ト謂ヒ其ノ團體ノ活動ヲ共産黨外廓運動ト謂フノテアル

第一項 日本共産青年同盟

日本共産青年同盟ハ大正十五年八月共産主義陣營ニ於ケル一幹部テアツタ北浦千太郎一派ニ依テ組織セラレ全日本無産青年同盟ノ後ヲ承ケ昭和三年二月改稱創立セラレテ日本共産黨ノ指導下ニ活動シテ居タ團體テアル。

昭和五年ノ「メイヂ」ニ際シテハ、共産黨ノ「テロ」戦術ヲ採用シテ暴動化ヲ計畫シ、川崎市ニ於テハ黨及全協ノ指導下ニ共青一派カ所謂武装蜂起ヲ行ヒ多數ノ檢舉者ヲ出シタ。

又同七月中央部ハ殆ント潰滅ノ状態ニ陥ツタカ六年二月官川寅雄等ニヨリ再建セラレ、爾來中央部員ノ檢舉ニ遭遇シタケレトモ常ニ之ヲ補充シツツ執拗ニ運動ヲ

續ケ、殊ニ六年十月ニハ「無産青年」ヲ中央機關紙トシテ其ノ組織ヲ同盟ニ解消スル等、専ラ大衆化ニ努メ、翌七年四月ニハ黨ヲ入黨中テアツタ五郎丸芳晴カ歸國シ、中央執行委員長トナリ、擴大強化ニ努メタカ昭和七年十月以來ノ檢舉ニ依テ中央部ノ組織ハ潰滅スルニ至ツタ。

其ノ後、殘留分子等ニ依リ再建運動行ハレ國際共産青年同盟（キーム）ト連絡ヲ取ツタケレトモ日本共産黨ノ衰滅ニ伴ヒ其ノ活動ハ頓挫シタ模様テアル。

第二項 日本赤色救援會

日本赤色救援會ハ昭和三年四月千葉縣野田醤油ノ大争議ニ際シ、其ノ争議ニ因ル犠牲者及其ノ家族ヲ救援スルコトヲ名トシテ組織セラレタコロノ爲「解放運動犠牲者救援會」ノ後身テアツテ昭和五年八月「國際赤色救援會」（「モツブル」）ノ日本支部トシテ之ニ加盟シ、「日本赤色救援會」ト稱シテ非合法運動ニ入り、昭和八年九月徹底的彈壓ニ遇ツタカ其ノ後モ執拗ニ再建運動ヲ畫策シタ。

日本赤色救援會

而シテ本會ノ主ナル行動ハ、日本共產黨員及其ノ家族遺族ノ救済運動ヲ始メトシテ公判闘争、共產黨被告ノ釋放、奪還ノ示威運動、病氣引取人ナキ出獄者ノ救援、慰安ノ徹底、更ニ之ヲ革命運動ニ再起サセルタメ「救援ハウス」ノ設立計畫等、共產黨ノ指導下ニ非合法運動ヲ爲シタケレトモ前述ノ如ク彈壓セラレ殆ント影ヲ没スルニ至ツタ。

第三項 日本「プロレタリア」文化聯盟

日本「プロレタリア」文化聯盟

日本「プロレタリア」文化聯盟ハ略稱「コツブ」ト稱セラレルモノデアツテ一般ニ共產黨ノ支持團體ト認メラレ、我カ國左翼運動ニ於ケル重要且廣汎ナル舞臺ニ活躍シタ。

文化團體ノ活動力左翼運動ニ重要ナル意義ヲ有スト謂フ見地カラ、全日本無産階級力結成セラレタノハ昭和三年三月テアル。而シテ同年十二月ニハ「全日本無産階級團體協議會」(ナツブ)ト改稱シ、機關紙トシテ「ナツブ」「戦旗」等ヲ發行シ、文化運動ニ依ル「共產主義ノ宣傳普及」ヲ目的トシテ活動シツツアツタカ、昭和六年末共產主義文化戦線ハ統制指導ノ爲從來分散シテ居

タ文化團體ヲ結合シテ「日本プロレタリア文化聯盟」ヲ結成シ、大衆的啓蒙運動ヲ行ツタ。然ルニ國家主義運動ノ擡頭トシテ昭和七年春以來治安維持法ノ強行トニ依リ主腦部ノ檢舉セラレタルモノ多數ニ上リ彼等ノ運動ハ大打撃ヲ蒙リ昭和七年六月十九日「コツブ」擴大協議會ハ解散命令ヲ受ケ、又昭和八年四月十六日演劇同盟大會ノ即時解散等カアツテ其ノ表面的活動ハ不可能トナツテ殆ント秘密結社化シタタメ從來ニ於ケル共產黨運動中ノ唯一ノ合法舞臺モ失ハレルニ至ツタ。

其ノ後、藤森成吉、江口渙、長谷川如是閑等ノ有力ナル指導者ハ人民戦線運動ノ擡頭ニ乘シ、廣汎ナル日本「プロレタリア」文化運動ヲ展開セントシ先ツ我カ國人民戦線運動ノ中心母體タルヘキモノヲ社會大衆黨トナシ、其ノ外廓運動ヲナス社會民主主義者ニシテ同黨ニ關係ヲ有スル賀川豊彦、安部磯雄等ヲ之ニ参加サセテ日本「プロレタリア」文化運動ノ再建ヲ圖策シタ。

反帝同盟

第四項 反帝同盟

第一 沿革

我が國ニ於ケル反戰反帝國主義運動ハ、昭和二年頃ヨリ發生シ、種々ノ名稱ヲ冠シテ居タカ、昭和四年十一月ニハ國際反帝國同盟（在ブラッセル）反帝國主義民族獨立支持同盟ノ略（日本支部トシテ「日本反帝國同盟」ト改稱シタ。而シテ其ノ本部テアル實際反帝國同盟ハ「コミンテルン」ノ政策實行ノタメノ有力ナル補助機關テアツテ純然タル共產黨秘密結社（外廓團體）テアル。

第二 目的

反英同盟ノ目的

反帝國同盟ノ目的ハ帝國主義諸國ノロシヤ攻撃ノ防衛、植民地ノ獨立、資本主義ノ打破ニアル。而シテ其ノ手段ハ昭和三年共產黨第六回世界大會ノ決議ニ依レハ、戰爭反對ノ名ノ下ニ資本主義諸國ノ軍備ヲ崩壞サセ勞働者武装ノ實際的方法ニ依リ「祖國擁護ノ拒否」「自國敗壞主義」「真正國際主義」ヲ主張シ、帝國主義戰爭ヲ「ブルジョア」ニ對スル「プロレタリア」ノ内亂ニ轉化サセテ革命ヲ

活動ノ概要

第三 活動ノ概要

成就セシメントスルモノテアル。

日本反帝國同盟ハ機關紙「反帝新聞」（昭和五年十一月創刊）ヲ刊行シ又「コミンテルン」ノ指示ニ基キ毎年八月一日ヲ「反戰デー」（赤色デー）ト定メ其ノ他凡テノ機會ヲ利用シテ其ノ宣傳普及ニ努メタ。

滿洲事變カ勃發スルヤ反帝國同盟ハ其ノ活動ヲ工場、農村ニ於ケル日常闘争ニ集中シ、「該活動ヲ通シテ兵營、軍艦内ノ活動ヲ強化スルコト」「戰爭反對闘争ヲ大衆的ニ遂行シ工場、農村ノ一切ノ反帝活動ヲ反戰闘争ニ集中シテ大衆的行動ヲ組織シ内亂準備ノ爲ニ系統的ニ活動スルコト」ヲ任務トシ、反帝日報（滿洲事變勃發直後刊行）ヲ頻繁ニ發行シテ機會アル毎ニ滿洲事變ニ對スル反戰的宣傳ヲ行ツタカ其ノ他ニ於ケル主要ナル活動トシテハ「上海反戰大會」ノ支持昭和八年八月行ハレタ關東防空大演習ニ對スル反戰闘争、及第二回全國大會ノ開催等テアル。第二回全國大會ハ昭和八年四月五日ニ至リ東京ニ於テ極秘裡ニ開催セラレ、過去一箇年ニ於ケル同盟ノ活動ヲ自己批判シタ後、同盟ノ當面ノ

任務トシテ「現在ノ客觀的情勢カ日本反帝同盟ニ課スル政治的任務ヲ大衆ノ日
常的請要求ト結ビ付ケ、其ノ基礎ノ上ニ之ヲ工場、農村ニ持チ込メ大衆的反帝
闘争ヲ展開シテ同盟ヲ大衆化スヘキコト」ノ根本方針ヲ樹テ、此ノ見地ヨリ超
黨派の大衆活動ヘノ轉換、大工場ヘノ基礎ノ擴大、加盟團體トノ協同連帶ノ組
織化等當面ノ中心任務實現ノ爲ノ具體的方法ヲ討議決定シタノテアル。

昭和八年九月、世界反戰大會カ上海ニ於テ開催セラレルコトナルヲ我カ國ニ
於テハ反帝同盟ノ全活動ハ本大會ノ積極的支持ニ集中セラレ、六月下旬共產主
義系諸團體ノ「極東反戰會議支持團體協贊會」カ非合法的ニ組織セラレ此ノ國
體ヨリ上海ニ日本代表ヲ送り八月二十五日共產主義系ノ諸人物ヲ中心トシテ左
翼及自由主義者ノ一部ヲ加ヘタ「極東平和友の會」ノ創立ヲ見テ右協贊會ノ外
廓團體的役割ヲ演スルコトトナツタカ、之ヨリ先昭和七年十月三十日ノ一齊檢
舉ニ因リ共產黨首腦部カ彈壓ヲ受ケタ結果、反帝同盟ノ活動モ其ノ實行力ヲ失
セ、主ニ文書宣傳ニ終ツタノテアツタ。然シ乍ラ彼等ノ運動ハ尙執拗深刻テア
ツテ其ノ殘黨ハ決死的活動ヲ以テ破壞セラレタトコロノ黨ノ再建整備ニ腐心シ
昭和八年三月十日陸軍記念日ヲ期シテ軍事部機關紙「兵士の友」更生第一號ヲ

再刊シ、六月二十日第七號迄繼續發行シタ。加之、反戰資料供給ヲ目的トスル
「日本共產黨中央情報部々報」ヲ創刊シ、又日本共產青年同盟機關紙「無産青
年」紙上ニ「兵士欄」ヲ設ケル等之ヲ通シテ日常發生スル凡ユル社會事象ヲ
巧ニ軍事問題ニ關聯サシテ事實ヲ誇張シ、或ハ捏造シテ民心ヲ煽動シ兵士ノ獲
得、軍需品工場ヘノ侵入、勞働争議等ノ利用、反戰闘争化ヲ企圖シ之カ大衆化
ヲ策シタ。

第三款 共產黨運動ノ一般戰術

第一 テーゼ

軍隊ニ戰術アル如ク共產黨運動ニモ一ツノ戰術カアル共產黨
運動ノ戰術ヲ知ルニハ

- 1、運動ノ方針
- 2、運動ノ方法
- 3、運動ノ形態
- 4、一スローガン

等ヲ研究スルヲ要ス就中運動ノ方針ハ戰術ノ主眼ヲナスモノ

テアツテ是カ即チ「テーゼ」テアル、
「テーゼ」ハ他ノ運動方法「スローガン」等ヲ決スル重要ナル役割ヲ演スルモノナ
ルヲ以テ特ニ慎重ナル態度ヲ以テ決定發表セラレ一旦決定セ
ラレタル黨員ハ之ヲ金科玉條トシテ嚴重ニ遵守スルモノテア
ル故ニ共產黨運動ヲ知ラントセハ先ツ充分ニ此ノ「テーゼ」
ヲ知ラネハナラヌニ

第二 黨員ノ獲得

ノ最初ニ於ケル共產黨組織時代ニハ「インテリ」階級カ規約
ヲ作成シ之等ヲ中心トシテ其ノ周圍ノ者ヲ糾合シ此ノ規約
ヲ遵守セシメ人物考査ヲ行ヒタル後正黨員トセリ。
隨テ幹部カ自己ノ知レル者ヲ引付ケテ子弟ノ如クナシタル
爲黨派的對立ヲ免レサリキ。

2 然ルニ昭和二年七月「コミンテルン」ヨリハ
「特ニ工場ヲ重要視シ工場内ニ細胞ヲ組織シ逐次擴大シテ
黨ノ組織ヲ成ス手段ヲ採用スヘシ」トノ指令ヲ受ケテヨリ

其ノ運動大衆化サレ從テ急遽ニ黨員ヲ増加スルニ至リタリ
而シテ彼等ノ黨員獲得ノ方法ハ先ツ「オルガナイザー」カ
眞面目ノ勞働者又ハ事務員ヲ裝ヒテ工場ニ雇ハレタル後
漸次本性ヲ現ハシ先ツ座談會或ハ訪問等ニヨリ對手ヲ作り
其ノ相手方ヨリ信用ヲ得ルコトニ努メ次第ニ信用ヲ得ルニ
及ヘハ之カ世話係等トナリ凡有機會即チ勞働爭議小作爭議
等ヲ處理スル爲組合ヲ組織シテ卑近ノ事象國民ヲ不平不滿
的事項ヲ指摘曝露シテ大衆ヲ指導スルコトニ努ム。
例ヘハ讀書ヲ好ムモノニ對シテハ合法雜誌ニ黨ノ指令等ヲ
切抜き貼付セルモノヲ同覽セシメ鬪爭心反逆心等ヲ誘起シ
就中共産主義ニ共鳴ノ見込濃厚ナリト認ムル人物ノ家庭身
分又ハ力働等ヲ觀察シテ目録ヲ付ケタ後入黨ヲ勸メ本人カ
入黨意志アリトセハ先ツ其ノ推薦ヲ中央委員會ニ廻付シ之
ヲ候補者トシテ一定時間訓練シ特定ノ期間ヲ經過シタル後
茲ニ正式黨員トスル方式ヲ執ルノテアル

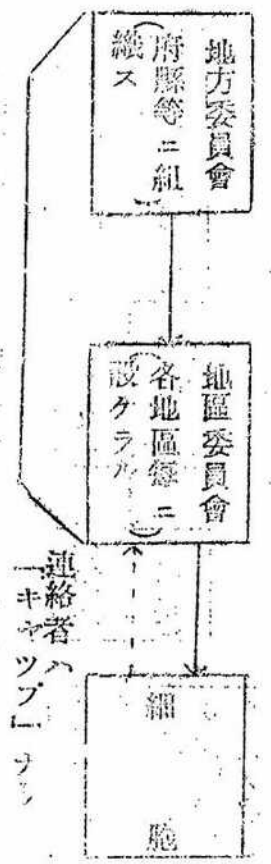
第三 黨ノ組織

而シテ一旦入黨セハ嚴格ナル規律ニ服セシメラレ時ニ秘密ノ嚴守又ハ私生活ニ迄嚴重ナル監視カ加ヘラルルヲ例トス

共產黨ノ組織ニ付述フレハ大要次ノ如シ先ツ黨最高ノ意思決定機關トシテ大會アリ執行機關トシテ中央執行委員會アリ其ノ下ニ常任執行委員會アリ其ノ組織ヲ系統的ニ圖示セハ左ノ如シ



又地方ニハ左ノ如キ組織ヲ有ス



何レモ委員ヲ以テ組織セラレ委員長之ヲ指導ス

細胞ハ通常三名トシ多キモ七八名ヲ以テ限度トス之ヲ指導スルモノハ「キヤツプ」ナリ

第四 「フラクシヨ」運動

「キヤツプ」ハ細胞ヲ代表シテ地區委員會トノ連絡ヲ職任トシ又細胞ヲ指導ス

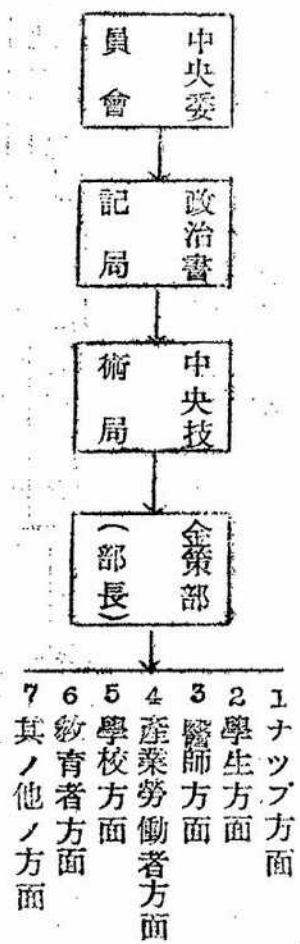
黨ノ組織ノ内情ハ何レモ極秘ニ附セラレ一般黨員ハ上下ノ關係ヲ僅カニ承知シ居ルニ過キス横ノ連絡ハ一切不明テアル

「フラクシヨ」トハ異ナル他ノ組織ノ中ニ侵入シテ其ノ組織内ニ黨ノ分派ヲ作り分派ノ有スル政策ヲ其ノ組織團體ニ及

ホサシムル運動ヲ贈フ例ハ合法團體タル〇〇労働組合ノ中ニ「全協」ノ分派（左翼分派）ヲ作り其ノ全協ノ政策（例ヘハ天皇制打倒）ヲ〇〇労働組合員ニ植付ク其ノ合法團體ヲ極左化セントスル運動テアル

第五 資金獲得運動

黨活動ノ爲當然資金ノ必要ヲ生ス此ノ資金ヲ何レヨリ持チ來ルカ即チ資金獲得運動テアル第一次共産黨時代ニハ「第三インター」ヨリ資金ヲ供與セラレタルカ其後打續ク檢舉ニ依リ資金獲得意ノ如クナラサル爲次ノ如キ組織ニ依リ資金獲得ヲ行フニ至レリ



即チ資金ハ金策部部長カ主トシテ七方面ヨリ獲得ニ努メタリシカ此ノ資金網モ數次ノ檢舉ニ依リ破壊セラレ現在確實ナル組織ハナイ

第六 「アジトル」(隠家)

「アジトル」ハ秘密本部或ハ秘密會合所トナルコトアルヲ以テ一定シアラサルヲ常トス
「アジトル」ヲ選フニハ概ネ左ノ如ク二方面ニ注意ヲ拂ハレアリ

- 1 大都會ノ股賑ナル場所ヲ選フ
- 2 別荘地帯、温泉地、遊覽地、避暑避暑地等ヲ選フ
- 而シテ住宅ヲ借りル時ハ婦人ノ名ヲ用ヒ新婚ヲ裝ヒ或ハ富豪ノ子弟ヲ裝ヒ又ハ病人ヲ裝フ或ハ「アパート」下宿ヲ轉々シ右翼人物ノ家ヲ下宿トシテ借り受ケ女ナルトキハ女中ニ住ミ込ムコトアリ尙家ヲ借りル時ノ注意トシテハ
- 1 大通リ附近ノ家

2. 話聲ノ隣ニ洩レヌ所
 3. 裏口裏通りノアル所
 間借りヲ爲ス時ハ次ノ如キ注意ヲ拂フ
 1. 貸間主ヤ隣家ノ模様ヲ調査ス
 2. 自己ノ衣服動作友人ノ來訪等常ニ一定ノ職業アル如ク裝フ
 3. 外出ノ際他人ニ覗カレヌ所ヲ借ル
 4. 貸間主カ自己ノ部屋ヲ窺フモノトシテ警戒シ部屋モ一般善
 良ナル家庭ト同様ニ裝飾等ヲナス

第七 「アドレス」(名宛人)
 秘密保持上又ハ同志トノ連絡上他ヨリ疑ハレサル爲ニ同志間
 ニ於テ特定ノ場所ヲ定メ其ノ場所ヲ名宛人トシテ郵便、小包
 等ヲ届クル所ヲ「アドレス」ト謂フ。
 「アドレス」トシテ選定又ハ利用セラルルモノ左ノ如シ。
 1. 「シンパ」ニシテ直接共産主義運動ニ關係ナキモノ
 2. 共産主義運動ニ全く無關係ナルモノ

3. 更ニ前二項ノモノノ親族又ハ知人友人等ノ關係ニアルモノ
 又「アドレス」ニハ
 1. 「レポアド」(手紙ヲ受取ルモノ)ト
 2. 「送本アド」(新聞雜誌ヲ送ルモノ)トアリ
 而シテ彼等(黨員)ハ郵便物ヲ發送セハ必ス其ノ發送セル郵便
 便物カ「アド」ノ許ニ異狀ナク到着セシヤ否ヤヲ調査シ調査
 ノ結果若シ到着セザレハ大イニ警戒シ早速轉々ト居所ヲ移動
 スルヲ常トス。

第八 秘密連絡

1. 街頭連絡モ秘密連絡ノ一ニシテ「レポーター」トハ常之ヲ
 指稱スルモノテアル。
 而シテ街頭連絡ハ通常定時的ニ行ハレアリ其ノ擔當事項ハ大
 要次ノ如シ。

- (1) 情報ノ交換
- (2) 指令ノ傳達

(イ)重要文書、宣傳文書ノ受授

右「レボ」ハ縦ノ連絡ノミヲナシ其ノ擔當者ノ氏名モ偽名ヲ用ヒテ行ヒ直接連絡ヲ避ケ數人ノ「レボ」ノ手ヲ經テ逡傳的ニ行ハル故ニ「レボ」ハ其ノ系統的組織關係等ハ承知スルニ由ラナシ。

2.「レボ」ノ連絡場所ハ往來ノ繁盛ナル街路及其ノ他劇場映畫館「デパート」等多數人ノ出入スル場所ニ於テ行ハルルヲ常トスル。

3.連絡方法ハ

(イ)小紙片ニ暗號ニテ認メタル指令等ヲ受授ス之カ爲豫メ指定セラレタ日時場所ニ約束ノ服裝携行品(例ヘハ帽子ヲ右手ニ持チ如何ナル服ヲ着用シ居ル等ノ如シ)其ノ他同志間ニ合言葉又ハ合印ヲ用フルコトアリ。

(ロ)又例外トシテ豫テヨリ打合セタル事項ヲ新聞紙又ハ廣告

等ニ掲載スルコトアリ例ヘハ女中ヲ募集スル要件トシテ年令何年容貌ハ斯様等トノ字句ヲ利用シテ之ニ意味ヲ含メシムルコトアリ。

(ハ)電報ニヨリ暗號又ヲ使用シテ行ハルルコト多シ例ヘハ父「キトク」或ハ母死亡等ノ字句ヲ用ヒ之ニ重要意義ヲ含マシムルコト多シ

(ニ)其ノ他連絡又ハ暗示ノ方法トシテ門前又ハ玄関入口ニ植木鉢ヲ置キテ安危ヲ標識シタル例又ハ鼠糞ニ蒲團ヲ撒ケ置キテ標識トセルコトアリ

第九 秘密通信

共產黨員ハ其ノ指令又ハ同志相互ノ通信ノ爲各種ノ簡易ナル暗號ヲ使用スルヲ通常トス今之等ノ中簡易ナル暗號ヲ分類セハ左ノ如クテアル。

(イ)分置法(約定ニ基キ信書又ハ新聞等ノ特定文字ニ依ル)

(ロ)照文法(普通文ヲ以テ他ノ意味ヲ表ハス)

(A) 隱字法 (秘密イシキニ依ルモノ)
 (B) 約束法 (特別ナル規約ニ依ルモノ)
 (C) 簡單ナル一般形式ノ暗號ニ依ルモノ又ハ圖式繪畫物器等ノ利用ニ依ルモノ (説明ハ防諜教程ニ載ル)
 以上ノ如ク同志暗號ハ極メテ簡易ナルモノナルヲ以テ通信文檢閱等ニ於テハ周到ナル注意ヲ以テ之カ發見ニ努メネハナラヌ

第十 秘密保持

黨運動カ本來秘密非合法ナルタメ彼等ハ秘密ノ嚴守ニ最大ノ注意ヲ拂ヒ之ヲ生命トシ如何ニシテ秘密ヲ保持スルカニ付テハ常ニ之カ對策ニ腐心シテ居ル。
 而シテ秘密保持ニ關スル黨上級ヨリノ指令ハ常ニ常識的ニ各種行動ニ對シ仔細ニ示サルルモノトス
 例ヘハ
 1. 住居ハ隣家ト話聲ノ洩レル所ヲ避ケヨ

- 2. 文書ニ床下ニ天井裏板等ニ隠スナ
- 3. 集會會合等ハ「カルタ」會等ニ偽裝シテ行フ
- 4. 同志カ來タトキハ絕對ニ他ノ同志ト話シヲスルナ
- 5. 變裝等ハ外形ノミナラス實質的素整ヲ付ケネハナラヌ。

第四款 無產政黨運動

第一 無產政黨ノ意義

無產階級ノ政治的利害ヲ代表シテ活動スル政黨ヲ凡テ無產政黨ト謂フ換言スレハ無產階級カ政治的ニ團結シテ日常ノ政治的經濟社會的利益ノ爲ニ資本主義的諸制度ノ改廢ヲ期スルコトヲ目的トスル政黨テアル

第二 我國無產政黨運動ノ概要

過去ニ於テ幾度カ時期尙早ノ名ニ依テ決又ハ擧リ撥シノ選命ニ遭ツタ選舉法改正法律案 (普選法) ハ大正十四年ニ兩院ヲ通過シ茲ニ我國ニ於ケル無產政黨進出ノ根本法規カ確定セ

ラレタノテ無産政黨ノ續出ヲ見ルニ至ツタ。

(一) 労働農民黨

大正十四年十二月淺沼稻次郎ハ合法無産政黨トシテ労働農民黨ヲ結成シタカ其ノ内部ニ極左分子ヲ含ミ其ノ行動綱領カ安寧秩序ヲ害スルモノトシテ即時解散ヲ命セラレタノテ更ニ極左團體分子ノ加入ヲ拒絶シ再建シタケレ共内部ニ於テ思想的ニ對立シ分裂ノ結果昭和三年十二月政治自由獲得同盟トナリ更ニ昭和四年十一月大山郁夫等ヲ中心トスル労働黨トナツタカ後社會大衆黨ニ併合セラレタ。

(二) 日本農民黨

労働農民黨ノ右翼分子テアツタ平野力三等ハ大正十五年黨ヲ脱シテ極右派テアル日本農民黨ヲ組織シタ。

(三) 社會民衆黨

労働農民黨カ漸次左傾化スルヤ之ニ反對シ、安部磯雄等亦黨ヲ脱シテ大正十五年末社會民衆黨ヲ結成シタ。

社會民衆黨

日本労働黨

(四) 日本労働黨
労働農民黨ノ麻生久等ハ黨内ノ中間派ヲ提ケテ脱黨シ日本労働黨ヲ創立シタ。

無産大衆黨

(五) 無産大衆黨
昭和三年七月山川均、鈴木茂三、堺利彦、一派亦労働農民黨ヨリ分離シテ無産大衆黨ヲ組織シタ。

社會大衆黨

(六) 社會大衆黨
昭和三年十二月、日本農民黨、日本労働黨、無産大衆黨及四箇ノ地方政黨トノ間ニ協調成リ、合同シテ麻生久ヲ委員長トスル日本大衆黨ヲ結成シタカ、日本大衆黨ハ更ニ昭和五年七月別ニ他ノ二政黨ト合同シテ全國大衆黨ヲ組織シ、翌六年七月全國大衆黨ハ労働黨ヲ合同シテ全國労働大衆黨ヲ作り、翌七年社會民衆黨ト合流シテ社會大衆黨ノ成立ヲ見タノテアル。

(七) 日本國家社會黨

昭和六年滿洲事變勃發スルヤ社會民衆黨ノ幹部テアツタ赤松克麿ハ脱黨シテ石川準十郎ト共ニ國家社會主義派ヲ指導シ漸次同志ヲ獲得シテ昭和七年五月赤松克麿ヲ黨務長トスル日本國家社會黨ヲ結成シタ。

(八) 日本無産黨

昭和十一年十一月社會大衆黨ノ主義精神ヲ快トシナイ一派ハ本黨ヲ脱退シテ勞働組合法、小作法獲得同盟ヲ組織シタカ、更ニ同年七月政治團體トシテ勞働無産協議會ヲ結成シ人民戰線運動ノ推進勢力テアルコトヲ表明シ、昭和十二年三月日本無産黨ト稱シ、表面社會大衆黨ト對立スルニ至ツタ。

第四 無産政黨ノ運動方針ト其ノ動向

我カ國ニ於ケル無産政黨運動ノ大勢ヲ決スルモノハ最大ノ左翼無産政黨タル社會大衆黨ノ運動方針及其ノ動向テアル。社會大衆黨ノ運動方針ハ表面穩和テアルカ、多分ニ國際主義

無産政黨ノ運動方針ト其ノ動向

的テアリ、其ノ基調ヲ爲スモノハマルクス主義ノ理論テアツタ。然ルニ滿洲事變後ニ於ケル社會情勢ヨリマルクス主義ニ基ク公式的運動方針ノ軌線ヲ自覺シ、黨更生ノ爲從來ノ國際主義政策ニ轉換セントシタカ奮勞農系ニ屬スル一派ノ組織ナル反對ニ遣ツテ其ノ目的ヲ達シナカツタ

社會大衆黨ノ滿洲事變後ニ於ケル最も主要ナル行動ハ、昭和八年六月二十四日擴大政策委員會ニ於テ「轉換期建設政策案」四項目ヲ審議可決シタルコトテアル。其ノ内容ハ經濟問題ヲ主トシテ「國家主義ノ真洋化、及軍部接近」等ヲ劃策スルモノテアツテ黨ノ運動精神ノ轉向カ窺ハレル。

第五 支那事變勃發後ノ狀況

社會大衆黨ハ支那事變勃發ト共ニ從來ノ反戰態度ヲ一變シテ學園一致ニ邁進スル態度ヲ表明シ大體ハ社會民主主義ヨリ漸次全體主義ニ移行シタ。

然シ黨内ノ右翼化ニ謀ラナイ一派ハ、昭和十五年臨時議會ニ

支那事變勃發後ノ狀況

於ケル獨逸陸夫代議士ノ除名問題ヲ繰リ進テ脱退シテ、新黨
結成ヲ準備シタカ結社禁止ヲ命セラレ、社大黨モ亦昭和十五
年七月六日停黨シ、現在無産政黨トシテ存在スルモノナシ。

第五款 人民戰線運動

人民戰線
運動

人民戰線運動ニハ二様ノ意義カアル。即チ、一ハ共產黨ノ新
戰術ノ意テアリ、他ハ一フアツシズム一反對ノ有ユルモノヲ混
織シ、其ノ鬭爭力ヲ強化スル爲ニ集結スル共高戰線ノ意テアル
故ニ先ツ前者即チ共產黨ノ新戰術トシテノ該運動、特ニ時局ニ
鑑ミ支那ニ於ケル人民戰線運動ノ狀況ヲ詳述スル。

一九三五年七月一コミンテルン第七回大會ニ於ケル決議ニ
基キ反一フアツシヨ一鬭爭、帝國主義戰爭反對ヲ當面ノ主要任
務トスル中國共產黨ハ直チニ鬭爭目標ヲ抗日ニ置キ同年八月一
日ヲ以テ一抗日救國ノタメニ全國同胞ニ告クルノ誓一ヲ公ニシ
國民黨、軍閥ニ對スル從來ノ抗爭ヲ抗日人民戰線へ轉換スルニ
至ツタ。之ニ依レハ滿洲事變以來ノ滿洲國獨立、北支自治政體

ノ成立ヲ以テ一日本帝國主義ノ對支進攻ノ新ナル強化ト南京政
府ノ一歩的投降トニ依ツテ、我方北支各省ハ東北西省ニ次テ已
ニ事實上中國ヨリ距離サレタモノトナシ一致團結シテ外侮ヲ
防グヘキコトヲ主張シ、中國國民黨ニ對シテハ、遠方ニ過去ノ
日和見的態度ヲ捨テ、各黨名派ト共同シテ救亡聯合戰線ノ確立
ヲ促成スルコトヲ要望シ、遂ニ昭和十一年五月抗日人民戰線派
ノ各團體代表者五十餘名ヲ上海ニ集合シテ全國各界救國聯合會
ヲ組織シ、茲ニ中國ニ於ケル抗日人民戰線ヲ統一スルニ至ツタ
ノデアアル。

爾來之等分子ノ策動ニ依ツテ帝國間ニ幾多ノ紛爭ヲ惹起シ、
殊ニ昭和十一年十二月十二日發生セル西安事件ハ國民黨政府ヲ
完全ニ容共抗日政策ニ轉化セシメ、昭和十二年七月支那事變ノ
勃發ヲ見テカラハ蘇支兩國ノ提携力露骨トナツテ「コミンテル
ン」ノ活動ハ表裏ニ互ツテ活潑トナリ、東洋平和延テハ世界平
和ノ見地カラ憂フヘキ狀況ヲ現出シタカ幸ニ皇軍ノ偉大ナル實

力ニ依ツテ支那境域ノ幾分ハ救ハレツツアルケレトモ背後ニ於テ「コミンテルン」ノ策動ヲ思フトキ共產黨ノ戰術トシテノ人民戰線運動ニ對シテハ一日ノ偷安モ許スコトハ出來ナイ。次ニ「フアツシズム」反對ノ意味ニ於ケル人民戰線運動モ亦共產主義黨分子潛入ノ虞カアツテ之ニ對シテモ亦深甚ナル關心ヲ必要トスル。故ニ假令如何ナル名稱内容ヲ有スルモノテアツテモ人民戰線運動ニ對シテハ其ノ實體ヲ究明シ深甚ナル警戒ヲ怠ツテハナラヌ。

第六款 教育界ニ於ケル左翼運動
第一項 學生ノ左翼思想運動

第一目 概説

我カ國ニ於テ初メテ東大新人會、早大民人同盟等ノ學生社會運動團體ガ發生シタノハ大正七、八年ノコトデアルカ、其レカ左翼共產主義的色彩ヲ帶フルニ至ツタノハ大正十一、二年ノ頃デアル。

共產主義思想カ一度、學生團體ニ侵入スルヤ恰モ燎原ノ火ノ如ク蔓延シ、共產主義ハ實ニ學生層内ニ於テ壓倒的勢力ヲ獲得スルニ至ツタ。從ツテ我カ國社會運動ニ於ケル左傾學生ノ役制ハ極メテ重要ナモノデアツテ共產主義系諸團體ニハ多數ノ學生ガ潛在シテキタノミナラス運動資金ノ如キモ之等學生層カラ支出セラレタ。其ノ甚タ巨額ニ上ツテキル。例ヘハ、昭和五年ノ初頭ニ檢舉セラレタ共產黨事件ニ於テハ黨活動資金一萬六百二十五圓ノ内其ノ約三割ハ學生層ノ支出シタモノデアリ、昭和三年以來、昭和七年迄ニ檢舉セラレタ共產主義學生ノ數ハ勞働者層民層ニ比シテ壓倒的高率ヲ示シテキタ。學生團體トシテ有名ナルハ前述ノ東大新人會、早大民人同盟ノ外ニハ大正十二年ニ設立シタ學生社會科學聯合會（略稱ハ學聯）カアリ、各大學ノ専門學校ニハ社會科學研究會カアツタ。昭和三年ノ學生團體ガ解散セラレテ後ハ學生運動ハ社會ノ裏面ニ染ク潛行スルニ至ツタ。即チ昭和三年ノ三一五事件

以來引キ續ク組織ニ依リ其ノ組織分子ヲ失ツタ共産青年同盟ハ學生層ニ働キ掛ケテ之ヲ一般極左運動ノ有力ナル活動ト爲サントシ、學聯ヲ一般「プロレタリア」運動ノ中ニ吸收スル方針ヲ採ツタ。此ノ方針ハ學生「テーゼ」ト稱セラレルモノヲテ爾來、學生中ノ優秀分子カ續々共産青年同盟ノ組織内ニ参加シタカ、更ニ昭和六年、新學生「テーゼ」ヲ定メテ一般學生大衆ヲ目標トスル運動方針ヲ採用スルニ及ンテ各大學、專門學校等ニ於テ團體組織ヲ禁止セラレタ左翼學生等ノ共産青年同盟ノ組織内ニ融セ入ル者急激ニ増加シタノミナラス、殊ニ注目スヘキハ一般中等學校生徒ノ間ニ迄モ左翼流行運動カ擴大シテ行フタ點テアル。

第二目 運動ノ方針

學生左翼思想運動ノ方針ハ其ノ基礎ヲ學生「テーゼ」ト新學生「テーゼ」トニ置イテ居ルカ、此ノ兩「テーゼ」ヲ要約スルト次ノ如キモノトナル。

第一 運動ノ目的

運動ノ方針

- (一) 學生左翼運動ハ黨及同盟ノ運動ヲ支持シ之ニ参加スルコト
- (二) 同盟ノ直接指導ノ下ニ運動ヲ行フコト
- (三) 一般學生層ニ對シテハ左ノ目的の限界ヲ以テ臨ムコト
 - (1) 革命ニ際シ學生大衆ヲシテ好キ傍觀者トシテ之ヲ中立化セシム
 - (2) 學生中尖鋭分子ハ「プロレタリア」ト稱ラ組シ革命ノ第一線ニ立タシム
 - (3) 他ノ一部ハ革命ノ好キ精神的及物質的支持者タラシム

第二 運動機關ノ組織

- (一) 共産青年同盟學校細胞ヲ組織スルコト
- (二) 補助組織トシテ、自治學生層會、反帝同盟、赤色救護會、學生消費組合、自主的「スポーツ」團體等ヲ組織スルコト
- (三) 「フロンツ」活動(他ノ組織内ニ侵入シテ分派ヲ作ル運動)ヲ行フコト

第三 滿洲事變後ノ動向

滿洲事變後ニ於ケル學生左翼思想運動ハ純然タル共産主義運動ノ一翼トシテ活動スルニ至リ之ガ特徴ニ
 (一) 反戰運動ニムカフ注イタコト

(二) 天皇制打倒ノ「スローガン」ヲ前面ニ押し出シタコト

(三) 日本共産黨ノ資金網ヲ廣ク學生層内ニ張ツタコト等カ注目サレル

第二項 小學校教員ノ左翼思想運動 第一目 概説

小學校教員中ニハ學生ト同様、單ナル好奇心或ハ學究的興味カラ左翼思想ヲ研究シ、次第ニ左翼化スル者モ少クナイカ寧ロ教員自身ノ生活境遇、或ハ兒童及其ノ父兄ノ生活ノ困窮ニ對スル同情等カラ左傾スルニ至ル者カ多イ。從ツテ其ノ左傾ノ度合モ概シテ深刻テアルカ、然シ其ノ職務ハ純真ナル小學兒童ノ訓化ヲ擔當シ國民教育ノ根底ヲ築キ上クヘキモノテアルカラ其ノ思想狀況ニハ深甚ナル注意ヲ拂フ必要カアル。

小學校教員ノ左翼思想運動ハ昭和四年末、東京府下ニ於テ小學校教員聯盟ト稱スル秘密團體カ結成セラレタノカ始マリテ其ノ後新興教育同盟準備會(略稱、新教)ト、日本勞働組合全國協議會(略稱、全協)ニ屬スル日本一般使用人組合教育勞働部

(略稱、勞勞)トカ中心トナリ小學校教員ノ左翼運動ヲ煽動シ且指導シタ。

抑々新興教育同盟準備會ナルモノハ前記ノ小學校教員聯盟ナル左翼秘密組織カ解散セラレテ後、其ノ組織分子カ中心トナツテ新興教育研究所ヲ創立シ、昭和六年十二月左翼文化運動戰線統一ノ爲結成セラレタル「プロレタリア文化聯盟」ニ加盟シ、左翼文化團體ト緊密ナル提携ヲ取ツテ左翼文化運動ノ一翼トシテ活動シタカ「プロレタリア文化聯盟」ノ指導ニ基キ同盟組織トスルタメ、先ツ新興教育同盟準備會ト改稱シタモノテアル。機關紙トシテ「新興教育」ヲ又大衆的新聞トシテ「教育新聞」ヲ發行シテ讀者ノ獲得ニ努メ、各地ニ支局或ハ讀書會カ結成セラレテ、其ノ讀者網ハ頗ル廣範圍ニ互ツテキタ。

日本一般使用人組合教育勞働部ハ昭和五年十一月ニ結成セラレタ日本教育勞働組合ノ改組セラレタモノテアツテ教育會ヲ目標ニシテ極左思想ヲ宣傳、普及ニ努メ各地ニ支部設立ノ運動モ

起リ多數ノ檢束者ヲモ輩出シタ。

第一 新教ト教勞トノ任務ノ限界

(一)新教ハ表面合法的團體ヲ標榜シ、左翼運動ニ對スル智識ノ缺ケタル小學校教員ヲ會員ニ獲得シ先ツ新教ノ支部ヲ組織スル。

(二)教勞ハ専ラ秘密組合運動トシテ全國ノ小學校教員ヲ政治的經濟的ニ動員スルコトヲ目的トシ、新教ノ活動ニ依リ相當ニ左翼意識ノ進ミタル者輩出スルニ至ラバ、教勞ハ之等ニ働キ掛ケ組織擔當者(オルグ)ニ依テ教勞支部ヲ組織スル。

(三)教勞ハ新教ニ對シ、指導的地位ヲ保持スル。

第二 實際運動ノ方針

(一)其ノ組織擴大強化ノ爲同志ノ獲得

(二)兒童ヘノ働キ掛ケ

(三)兒童父兄ヘノ働キ掛ケ

第三 運動方法

(一)同志獲得ノ手段

教員會ニ新ニ哲學、文學、經濟、歷史、「スポーツ」等ノ研究會ヲ作り、或ハ既設ノ研究會、懇和會、趣味ノ會等ニ「フラクシヨン」ヲ滲入セシメ左翼意識ヲ注入シテ同志ヲ獲得シ、其ノ他有ユル機會、例ヘバ道場ノ途中、職員室ニテ雜誌ノ際等ニ各人ノ思想傾向ヲ觀察シ、之ニ雜誌「新與教育」ヲ與ヘテ閱讀セシメ或ハ各人ノ不平不滿ヲ相談相手トナル等ノ方法ニ依テ左翼思想ニ誘導シ、其ノ組織ヘノ吸收ヲ謀ル。

(二)兒童ヘノ働キ掛ケノ手段

「プロレタリア」小學或本ト云ウカ如キモノヲ兒童ニ配布シ、或ハ固定教科書ノ各課ニ付左翼的歪曲ヲ加ヘテ兒童ニ左翼思想ヲ注入シ、又擔任ノ兒童ヲシテ自治會、「クラス」會、赤熱ノ會等ヲ作ラシメ、之ニ對シ左翼意識ノ注入及訓練ヲ施ス。

(三)兒童ノ父兄ヘノ働キ掛ケノ手段

無産父兄會、或ハ青年補習會等ヲ作り、之等ニ教勞發行ノ「教育新聞」(現在ハ廢刊)等ヲ讀マシメ、或ハ「家庭新聞」ナル印刷物ヲ兒童ヲシテ家庭ニ

左翼運動
ノ一般的
戰術

持チ歸ラシメ、斯クノ如クシテ父兄ニ漸次左翼意識ヲ注入スルノテアル。

第七款 左翼運動ノ一般的戰術

共產黨ノ書籍ハ總テ戰術戰略ノ理論ニ基イテ書カレテ居リ、其ノ用語モ總テ戰爭用語カ用ヒラレテ居ル。是レ、露國共產黨ノ師祖レーニンカ瑞西ニ亡命中舉獨逸軍事學ノ權威クラゼウイツクノ著書ヲ研究シ、階級闘争ヲ一ノ戰爭ナリト見做シテ、軍事學ヲ巧ミニ共產黨ノ理論ニ取入レタタメト謂ハレテ居ル。而シテ左翼思想ニハ各種ノ類別カアルカ、何レモ共產主義思想ヲ根底トシテ居ル關係上其ノ運動ニ伴フ戰術ニハ共產黨獨得ノ戰術ヲ除クノ外一般ニ共通シタ特徴カアル、固ヨリ其ノ戰術ニハ千變萬化ノ方策カアリ、頗ル精緻ナモノテアルケレトモ、一般的方式ハ概ネ次ノ如キモノテアル。

即チ「プロバカンダ」(宣傳)及「アヂテーシヨン」(煽動)ニ依リ大衆ニ黨争ノ必要ヲ強調シ、次テ「スローガン」(標語)又ハ「オルガナイザー」(組織擔當者)「フラクシヨン」(分

「プロバカンダ」
「アヂテーシヨン」
「スローガン」
「オルガナイザー」
「フラクシヨン」

派)等ニ依リ端節ニ大衆ヲ把握シ、又ハ之ヲ索引シ以テ連帯ノ目的達成ヲ圖ルノテアル。

第一 「プロバカンダ」ト「アヂテーシヨン」ハ其ノ戰術戰略「プロバカンダ」(略稱「プロ」)ハ宣傳、「アヂテーシヨン」(略稱「アヂ」)ハ煽動ノ意ニシテ各其ノ自前手段ノ爲ニ被是混用セラレル。即チ被壓迫、搾取等ノ事實ト主義ノ理論等ヲ大衆ニ教ヘ、煽動ヲ高唱シ、現ニ活動中ノ團體ノ存在スルニトテ大衆ニ知ラシメ政治的隱微戰術ト指シテ階級的的自覺ヲ促シ經濟上政治ノ不平不満ヲ起サシメ以テ其ノ運動ニ共鳴セシメントスルモノテアル。其ノ手段方法ハ個人の交際、講義ヲ始メ座談會、研究會、讀書會又ハ演説、演劇、歌劇、映畫、書籍、新聞、雜誌、「ボスター」、「ピラ」等各種ノ方法ヲ用ヒ、殊ニ大衆運動「デモ」、「デロ」、「ゼネスト」等直接行動ニ當ツル場合ニハ通常其ノ以前ニ「アヂ」、「プロ」等ヲ行フ。然レ共黨ノ壓迫ニ對シテハ秘密ニ「アヂ」

政治的曝露

第二 政治的曝露

「プロ」ヲ行フ傾向カアル。

政治的曝露トハ大衆ノ政治的不満又ハ反抗ヲ糾合シ又ハ之ヲ促進スル闘争手段テアツテ例ヘハ軍費ノ過大、大衆課税ノ不合理、資本家地主本位ノ政治等真相ト相違シテ居ル事實ヲ大衆ニ曝露スルモノテアル。又卑近ノ事實、例ヘハ資本家地主ノ不徳義、非行、醜事實、勞働者ノ悲惨、小作人ノ窮乏等ヲ針小棒大ニ記述シテ反感ヲ激發シ大衆ノ階級闘争意識ヲ高揚サセルコト等之ニ屬スル。

「スロ」

第三 「スロ」

「スロ」トハ標語又ハ合言葉ノ意ニシテ「アヂ」、「コロ」ニ使用スル主張ノ要綱テアル。一般ニハ團體ノ行動、綱領、政策ヨリ案出スルケレトモ、時トシテ臨時ニ特殊ノ事項、場所等ニ適合サセル爲ニ作製スルコトカアル。前者ヲ「中心スロ」ト呼ビ、後者ヲ「臨時スロ」ト云フ。

反軍策動

第四 反軍策動

「ス」等ハ或ハ演説ノ演題「ボスター」、演説稿、一ニ「ス」等ニヨリ一紙ヲナイケレトモ多クハ機關紙、公文、一ニ「ス」等ニヨリ一紙ヲ宣傳スルコト最モ多ク特ニ右翼系ニ於テハ

軍事上ノ利益ヲ害スル反軍策動ノ手段ハ其ノ系統、社會階級等ニヨリ一様テナイケレトモ多クハ機關紙、公文、一ニ「ス」等ニヨリ一紙ヲ宣傳スルコト最モ多ク特ニ右翼系ニ於テハ露骨ノ不穩文書トシテ軍又ハ軍要路者ヲ攻撃シ非合法的ニ暴行シ又ハ合法的出展物ト雖屈出前ニ領布シテ官憲ノ取締ヲ逃避ニ終ラセルコトカ多クアル。尙自由主義者又ハ社會主義者等ハ國防ノ不調和等ヲ演説又ハ帝國主義等ヲ演説シテ大衆ニ對シテモノ増加シ得ニ最近ニ於ケル左翼階級ノ一ニ「ス」等一人民戰線統一運動ノ如キハ軍部打倒、軍事準備後ヲ當面ノ目標トシ下層大衆ヲ偽階シ目的ノ貫徹ヲ計ツテ居ル。

其ノ他ノ
方法

軍トノ關
係

而シテ之等ハ徵兵検査、入退營、召集、演習等軍ノ主要行專ノ際又ハ政治、經濟、外交、社會ノ諸問題發生ニ際シ、巧ミニ之ニ關連サセ、又左翼團體等ハ所謂記念日（マイデー）、露西亞革命九、一八等）等ニ於テ計畫的統制的ニ決行スルヲ例トシテ居ル。

第五 其ノ他ノ方法

彼上ノ外「アゴト」（隱家）「アドリス」（匿名人）等ヲ設ケテ秘密運動ノ連絡、協議等ニ利用シ又ハ通信、連絡ノ便ヲ圖リ又通信ノ爲ニハ屢々各種ノ暗號ヲ用ヒル。

秘密連絡ノ方法ニ至ツテハ諜探ノ行フ秘密連絡ノ方法ト略同一ノ方式ヲ採用シテ居ルノカ通常テアル。

第八款 軍トノ關係

凡ツ左翼運動ハ既存國家權力ニ對シテ戰ヲ挑ムモノテアル。左翼運動者等ハ現存國家機構ハ嚴然タル軍ノ存在ニ依リ其ノ安全性ヲ保障モテレテ居ルト見ル。故ニ現存國家機構ヲ變革シテ

彼等ノ目的ヲ達成スルタメニ、國軍ヲ崩壞ニ導クカ要ハ少クモ自己ノ陣營内ニ導入スルコトハ彼等ノ一様ニ願望スル所テアル

第三 反對スル左翼運動ノ動キ對ケハ右ノ如キ意圖ノ下ニ行ハレル。殊ニ共產主義者ニ於テハ其ノ究極ノ目的タル武裝革命ニ依ル「プロレタリア獨裁」ノ樹立ト戰争反對ノ策動トハ互ニ相結合シ、彼等ノ全運動ヲ通スル一貫セル方針トシテ其ノ全戰略、全戰術ノ基礎ヲ成スモノテアル。即チ戰争ニ依ツテ生スル國內的不安ヲ利用シテ、共產主義革命ヲ實行スルト云フ悉ルヘキ目的ハ彼等ノ不斷ノ策動ヲ、存エル反戰争反帝國主義意識ヲ注入戰争反對「スローガン」ノ不斷ノ提揚、日常不斷ノ經濟的、政治的紛争ヲ反戰争ニ轉換スルコト、軍隊赤化ノ種種ヲ組織ト提揚等ニ集注セシメテ居ルノテアル。斯クテ之等ノ個々ノ反戰策動ハ將來ノ大陰謀實行ノ基礎工作タル役割ヲ占メ、階級闘争意識ノ大衆的傳播ハ國民ノ團結ヲ宣傳シ、軍民ヲ離間シ、軍長將校ノ舊成分子タル青少年ヲ腐蝕シシメ軍人ノ忠誠心ヲ喪失セシ

104

メ建軍ノ根基ヲ破壊シ以テ革命實行ヲ容易ナラシムル爲ノ準備
工作タルノ役割ヲ果スノテアル。
斯クテ愈々戦時トナルヤ、銃後ノ統一ヲ破壊シ、戦争遂行ノ
原動力トモ謂フヘキ國民精神ヲ麻痺セシメ、戦争遂行ノ意志ヲ
挫折セシメ、流言虚報、特ニ反戰思想ノ流布、軍民離間工作ニ
拍車ヲ掛ケ、戰機熟スルノ時機ニ重要資源、施設並ニ機關ノ破
壞工作ヲ行ヒ、軍需工場業ニ「ストライキ」ヲ煽動スル等所謂
「自國敗戰主義」ヲ實行ニ狂奔スルコトヲ使命トシテ居ル。
今次事變ニ際シテハ國民精神ノ昂揚ト當局ノ對策宜シキヲ得
テ共產主義者及其ノ他ノ左傾分子モ鳴ヲ鎮メテ、表面的ニ見ル
ヘキ活動ヲシナイカ、元來彼等ノ目的ト使命トニ鑑ミ、軍トシ
テハ寸刻ノ油斷モナク、嚴ニ其ノ動向ヲ監視警戒セナケレハナ
ラヌ。

右翼運動ノ意義

第二節 右翼運動
第一款 右翼運動ノ意義

人
人
人

右翼運動トハ、自由主義乃至社會運動ニ對抗シ、國家主義ヲ
標榜スル國粹運動ノ意テアル。

我カ國ニ於ケル右翼運動ハ、既ニ明治年間ニ於テ其ノ萌芽ヲ
見、頭山滿ノ率ユル青年結社「玄洋社」ハ對外的ニ國家ノ發展
ヲ助長セントシテ起テ、内田良平亦其ノ志ヲ繼イテ黑龍會ヲ創
設シ、自由主義思想ニ對抗シ、應ニ應ニ其ノ機ニ努力シタ。
次テ、歐洲大戰後自由主義及社會主義思想カ我カ國思想界ヲ
風靡スルニ至ルヤ、各所ニ右翼團體カ續生シ、殊ニ昭和五年、
倫敦條約ノ締結、昭和六年滿洲事變勃發ヲ契機トシ、所謂、國
家非常時局ニ際會シテ特ニ刮目スヘキ發展ト活躍トヲ示スニ至
ツタ。

國粹團體
運動ノ意義

第二款 右翼團體ノ發展
第一項 國粹團體運動
國粹團體トハ世界大戰後ニ於ケル主義ノ流行ニ對抗シテ
國粹保存ヲ指導精神トスル團體ヲ謂ヒ、近代思想團體トシテハ



幼稚ノ識ヲ免レナカッタ。蓋、此ノ種團體ニハ個人ヲ中心トシ
タモノカ多ク、又團體の大家の組織ヲ有セス、其ノ指導精神モ
理論的ニハ極メテ簡單テ且明確ヲ缺キ、從ツテ其ノ一部ハ既成
政黨ノ院外團或ハ所謂暴力的存在ニ過キナカッタ爲テアル。其
ノ後漸次實踐團體其ノ他ト提擡シテ發達シ、今ヤ單ナル反動保
守團體ナリトシ忽ニスルコトカ出來ヌ状態ニナツタ。此ノ種團
體ノ主ナルモノハ次ノ如クテアル。

大日本國粹會

第一 大日本國粹會
大日本國粹會ハ關西ノ俠客西村伊三郎カ當時擡頭シタ社會主
義思想ヲ憂慮シ、仁俠ノ風ヲ廣ク天下ニ普及スル目的ヲ以テ全
國ノ俠客ヲ結合スル必要ヲ唱へ、床次竹次郎、川村竹治等ノ盡
力ニ依ツテ大正八年京都ニ創立シタモノテアル。

而シテ本會ハ元、關西ヲ中心トシテ創立セラレ、昭和七年頃ニハ會員二十萬ト稱
セラレタ。
本會ト別個ニ同一ノ趣旨ノ下ニ（昭和三年）關東地方ヲ中心ニ結成セラレタ關東

大日本正義團

國粹會カアリ、會員五萬ヲ集シタ。而シテ關東、關西ハ籠馭リ、人的關係其ノ他
ノ事情ニ依リ容易ニ合同シナカソタカ、昭和九年豫備役海軍中將森山慶三郎ト同
陸軍中將古谷清等ノ盡力ニ依リ合同スルニ至ツタ。尙同會ノ關東首腦者河合徳三
郎カ同會ヨリ獨立シテ大正十年創立シタ大和民勞會ナルモノカアル。

第二 大日本正義團

大日本正義團ハ關西ノ級分トシテ有名ナル小林佐兵衛ノ二代
目酒井榮藏カ大正十四年ニ創立シタモノテアツテ昭和七年頃
ニ於テ會員八萬ト稱セラレタ。

而シテ酒井榮藏ハ俠客テアルト同時ニ播州鐵道社長其ノ他ノ
事業ニ關係ヲ有スル實業家テアツテ正義團設立後、勞働問題
ニ關シ勞働者ノ爲ニ盡力シタ結果團員ニハ所謂俠客ノ外ニ勞
働者、會社員等カ多數加入シテ居ル。

實踐團體ノ意義

實踐團體ハ積極的、具體的綱領ヲ掲ケテ大衆的ニ進出シ、其
ヲ急進的行動ヲ執ル團體テアツテ、其ノ主要ナルモノノ概略ヲ

學ケルト左ノ如クテアル。
第一 大日本赤誠會

豫備役砲兵大佐橋本欣五郎ハ在職當時「飛躍的大日本國家體制大綱」ヲ起草シテ他日ニ備ヘテ居タトコロ、昭和十一年八月豫備役編入ヲ見ルヤ之ヲ契機トシテ國家革新運動ヲ開始シ從來同大佐ト關係カアツタ右翼團體中

木曜俱樂部松延繁次（元神武會主腦者）梅神武會關係者今牧嘉雄 舊愛國政治同盟陶山篤太郎淡交會西本喬

等ヲ中心ニ創立準備ヲ進メ十月十七日宣言規約ヲ發表シテ大日本青年黨ヲ結成シタカ昭和十五年十一月三日大日本赤誠會ト改稱ス。

本黨ハ其ノ主張、組織、運動方針、共ニ既成右翼團體ト其ノ形態ヲ異ニシ眞ニ愛國至誠ノ青年ヲ以テ黨ヲ結成シ嚴重ナル黨規ト統制ノ下ニ軍隊式ニ訓練セラレタ黨員カ國家革新ノ嚮導トナリ大衆覺醒ノ原動力トナルタメ極力既成右翼團體中ノ不純分子ノ加入ヲ排撃シ優秀幹部ハ之ヲ可及的ニ獲得シ、ソレニ依テ

團體自體ヲ其ノ影響下ニ吸引シテ漸次黨員トシテ之ヲ消化セントスル方針ヲ採ツテ居ル、又黨員ノ獲得ハ量ヨリ質ニ重キヲ置クトコロノ歐選主義ヲ採ル爲ニ急速ナル發展ハ望ミ得ナイカ同黨ノ眞精神ノ大衆化トハニ伴フ資金ノ充テシ見ルニ至ラハ相當ノ發達ヲ遂ケル可能性カアル。尙同黨ニ於テハ昭和十一年十一月九日附黨勢擴張ノ爲ニ橋本大佐カ起草シタ「飛躍的大日本國家體制大綱」ヲ橋本欣五郎宣言トシテ黨員及準黨員並各方面ニ配布シテ居ル。尙橋本大佐ハ瑞穂俱樂部小林順一郎、大日本生産黨吉田益三等ト共ニ全日本主義運動ノ橫斷的連絡統一強化ヲ目標ニ、昭和十一年十一月二十一日以來之ノ綜合機關トシテ時局協議會ノ結成ニ着手シ、十一月二十一日其ノ創立ヲ見テ第一回會員總會ヲ開催シタ。

建國會

第二 建國會

建國會ハ大正十三年以來急速ニ發展ヲ遂ケタ反社會主義運動團體中ノ老社會系ニ屬スル團體テアツテ大正十五年赤尾敏が創立シタモノデアアル。元來赤尾敏ハ無黨派主義者テアツタカ其ノ空想獨斷的ナルヲ痛感シテ心境ニ變化ヲ來シ、津久井

雄渥美勝等下共ニ建國會ヲ組織シ先ツ建國祭ノ必要ヲ提唱シテ上杉博士ヲ會長ニ頭山清、水田秀次郎、丸山鶴吉、平沼麟一郎等ヲ顧問トシ、建國祭ノ母體トシテ建國會ヲ設ケタノテアルカ後建國會トヲ分離シテ建國祭ハ永田秀次郎、建國會ハ赤尾敏カ之ヲ繼イダノテアル。

而シテ建國會ハ實力ヲ以テ左翼ト抗争シタト云フ點ニ於テ最モ戰團的ナ團體テアル。其ノ社會的ニ有名ナ事件トシテハ「メーデー」禁止運動、「ロシヤ」大使館、労働農黨本部大山都夫宅ヘノ爆彈事件、無産青年同盟本部襲撃等甚々多ク、各種ノ社會問題政治問題ニ於テ日本主義ノ立場カラ實力的運動ヲ繼續シタノテアル。

建國會ハ機關紙「日本主義」ニ依ツテ思想ノ宣傳ヲ行フト共ニ何レノ團體トモ提携セズ孤軍奮闘ヲ續ケタノテアルカ、其ノ最モ注意スヘキ點ハ日本主義精神カ甚々濃厚ナコトニ在ル。日本ハ單ナル國家主義ニ満足シナイテ日本主義ニ依テ日本ヲ救フノミテナク世界ヲモ掩ハナケレハナラヌ、我カ日本國家ゴソ遺棄

國家主義テアルトシ純粹日本主義ニ準據シテ共產主義、社會主義及國家社會主義ニ絶對反對ヲ唱ヘタ。

建國會ハ此ノ純日本主義ニ則ツテ眞ニ日本團體ニ即シク政治的改革ヲ行ハンコトヲ主張シテ來タノテアルカ其ノ運動方法ハ理論ヨリモ實力ヲ以テ之カ徹底ニ努メテ居ル。而シテ滿洲事變勃發以來右翼思想ノ異常ナ擡頭ト共ニ其ノ行動ハ動モスレハ暴力ニ訴フル嫌カアツタカ最モ熱烈ニ愛國思想ノ鼓吹ニ努メテキル

政治團體運動

第三項 政治團體運動

右翼政治團體運動トハ所謂政治運動ニ重點ヲ置クモノノ意テアツテ其ノ主要ナルモノハ次ノ如クテアル。

大日本生産黨

第一 大日本生産黨

(一) 大日本生産黨ハ昭和六年六月二十八日大阪地方ノ中小商工業者並國粹團體ヲ基礎トシテ結成セラレタモノテアルカ其ノ後漸次勢力ヲ増大スルニ從ツテ本部ヲ東京ニ移シ、會長ニ黒龍會ノ内田良平、顧問ニ頭山清ヲ擧ケテ同年十一月二十日第一回大會ヲ開イタ。而シテ創立當時ノ參加團體ニハ

黑龍會、明德會、日本國民黨、本地日本聯盟、大阪同仁會、大阪北濱自仁會、神州護國黨、三木組與長會、洛北青年同盟、公德會、日本光風會、大阪經親會、大阪市電親友會等ノ團體カアル其ノ中心人物ハ主ニ黑龍會系統ノモノデアツテ内田良平、池田弘、葛生能久等デアルカ現黨主ハ吉田益三テアル。

然ルニ其ノ後日本國民黨ヲ始メ津久井龍雄一派ノ急進愛國黨、急進愛國労働者總聯盟等カ相次テ合流シ、更ニ日本國民黨創立者、八幡博堂、鈴木善一等ノ青年闘士、自治革正黨等ノ参加ヲ見、之等新進分子ノ活躍ト相俟ツテ生産黨ハ漸次保守的舊殻ヲ脱シテ多分ニ戰闘的トナリ、其ノ組織モ亦漸次擴大セラレテ昭和七年ノ總選舉及其ノ後ノ縣會議員選舉ニ當ツテハ何レモ生産黨ノ政策ヲ提ケテ公認候補ヲ立ツルニ至ンタ。

神兵隊事件後、時不振ノ状態ニアツタカ最近ニ於テハ七

、五事件ニ關係者ヲ出ス等其ノ活動ハ相當活潑トナツテ來タ。

(二)其ノ後大日本生産黨ハ既成政黨ノ地盤ニ對シテ挑戰シテ若干ノ議員ヲ獲得スルコトヲ得タカ其ノ效果ハ極メテ微少デアツタノテ一等口軍部ニ接近シテ之ト提携シ「クーデター」ノ施行ニ依ツテ目的ヲ達成スルニ如カスト爲シ軍部接近ノ傾向カ濃厚トナツタカ昭和八年七月生産黨ノ青年分子ニ依テ企圖セラレタ神兵隊事件カアツテカラハ其ノ運動ハ消極的ニ傾イタ。

即チ、大日本生産黨青年部ハ愛國労働黨ト結ヒ、昭和八年七月七日國防祈願「デモ」ヲ行ハント計畫シタノテアルカ幹部ノ反對カアツテ之ヲ中止シタ、然ルニ其ノ後青年部長鈴木善一等ハ再舉ヲ計ツテ各方面ニ指令ヲ發シ、國防祈願祭ニ托シテ地方同志ヲ糾合シ、各府縣牧野内大臣、西園寺公使、政民兩院總裁等ノ暗殺ヲ計畫シ、七月十日午後十一時頃明治神宮表參道、神宮前會館ニ集會シタノヲ監視廳ノ探知スル所トナツタ約五十名カ檢査セラレタ。而シテ彼等ノ本件執行ノ動機ハ其ノ供述スル所ニ依ルト飽ク迄國防祈願ノ外他意ナシト主張シタカ家宅搜索ノ結果發見セラレタ諸物件及據文ノ内容等ニ徴シ、其ノ根底ハ

相當深刻ナモノカアルノテ取調ヲ續行シタトコロ、事件ハ意外ナル方面ニ波及シテ資金關係ノ道及ヨリ東京、松屋常務ノ内藤某ヲ中心ニ、大阪ノ實業家島徳藏等カ此ノ事件遂行ニ依ル様式買賣ノ思惑ノ爲之カ決行ニ要スル資金ヲ提供シタ等ノ事實迄發覺スルニ至ツタ。之カ所關神兵隊事件テアル。

(三)右事件ニ依リ、本黨ハ其ノ無統制振カ表面ニ示ハレ、津久井龍雄一派ノ大日本青年同盟、三宮維信一派ノ大日本愛國青年同盟等ノ脫黨トナリ、剩ヘ右事件ニ關シ前田虎夫、鈴木善一、影山正治、橋詰宗治、片岡駿等ノ中心人物カ檢舉セラレテ本部機構ハ壊滅ニ瀕シタノテ黨ノ幹部ハ更生策ニ腐心シ昭和八年七月二十四日聲明書ヲ發表シテ該事件ニ對スル黨ノ態度ヲ明カニシ、更ニ九月十四日黨ノ指導精神ヲ基調トシ「國是及國策私案」ト題スル内田良平執筆ノ印刷物ヲ全國ニ配布シ黨員ヲ激發シタカ活潑ナル新興勢力ヲ失ツタ本黨ハ其ノ後漸次國家主義的色彩ヲ減殺スルニ至ツタ。

東方會 第二 東方會

東方會ハ昭和九年九月中野正剛カ「東方會」ナル政治結社ヲ組織シタノニ始リ其ノ後多少ノ消長轉變ヲ重ネテ來タカ、最

在郷軍人關係團體

近ハ約二萬三千ノ會員ヲ擁シ、實業運動ニ高度政治ヲ確保シ「舊政黨並ニ反動勢力反擊」等ヲ旗幟ニ、益々活潑ナル活動ヲ企圖シ全國的ニ國民運動ヲ展開シツツアル。

第四項 在郷軍人關係團體

在郷軍人ヲ主體トスル右翼團體ハ總テ滿洲事變後發生シタルモノテアル。次ニ其ノ主要ナルモノヲ述ヘルカトスル。

第一 皇道會

(一)滿洲事變ニ次ク五、一五事件ノ突發ハ一般國民ニ非常時時代ノ深刻ナ印象ヲ與ヘ、殊ニ之等ノ事件カ軍部ニ關係カアツタ爲昭和五年ノ倫敦條約並ニ當時ノ統帥變動タル憤懣ヲ抱イタ在郷軍人ノ間ニ著シイ刺戟ヲ與ヘ協調外交反對、政黨政治排撃、延テハ國家革新ノ風潮愈然トシテ勃興シタノテアル。即チ皇道會ハ斯クシ如キ風潮ノ中ニ在郷軍人ヲ基礎トシテ結成セラレタトコロノモノテアル。

(二)皇道會ハ昭和七年十一月豫備役陸軍少將黒澤主一郎、同編重兵少佐水谷直藏カ

中心トナツテ皇道會準備會ヲ結成シ、在郷將校ヲ主體トシテ皇道主義ニ依ルル代ノ政治經濟機構ノ合法的平正ヲ獲得シテ實踐ナル組織運動ヲ進メツツアツトキ、日本國家社會黨ノ紛糾分裂ニ際シ日本皇民組合ノ在郷力ニ一派カ皇道會下ノ積極的提議ヲ要望シ、皇道會支持ノ態度ニ出テタノテ其ノ運動ハ一貫ト活氣ヲ呈シ、終ニ昭和八年四月五日皇道大會ヲ舉行スルニ至ツタ。

(三)本會ハ在郷軍人ト皇民トノ提議ニ依リ、皇道政治ノ徹底、昭和新年日本ノ振興ヲ日課トシテ立ツタ團體テアルカ明倫會カ在郷將校官將ヲ中心勢力トシ、其の的高貴のテアツテ自ラ教化團體ナリヲ希スルノニ反シテ本會ハ實質的テアツテ自テ一般大衆ニ密接ナ連絡ヲ保チ、積極的ニ政治方面ニ進出スルコトニ努ムルコトハ注目ニ値スル。而シテ右ノ目的達成ノ爲、本會ハ發會式當日ニ於ケル皇道ニ所謂公明正大ナ心事ト正々堂々タル方法ヲ堅持セントスルモノテアツテ近時世上ニ懸望スル險謀、暴力其ノ他非法手段ノ如キハ斷シテ採ラナイトノ主旨ニ基イテ他ク迄合法的穩健ナ方法ニ依ツテ會ノ精神徹底實現ニ努ムルモノデア

第一 瑞穂俱樂部

瑞穂俱樂部

(一)豫備役砲兵大佐小林順一郎ハ「エムテ」共販株式會社ノ社長トシテ營業ヲ爲ス傍ラ、自衛社ヲ操縦シ、機關紙「自衛」ヲ通シテ或ハ新經濟國策研究會ヲ設立シ、現下ノ行詰レル政治、經濟、外交、思想等ノ打撃ニ努メテ來タノテアルカ、昭和九年一月以來、内外共ニ我カ國ノ根本的建直シヲ痛感シテ各種印刷物或ハ講演ニヨツテ之カ實現ニ努メテ來タノテアル。

(二)更ニ其ノ後一九三五、六年ノ國難ニ對シ全國民之ニ應スル非常時準備ト覺悟トヲ徹底セシメテ之ニ備ヘントシ豫備役砲兵大佐湯原徳助、同中佐吉見隆治外數名等ノ同憂ノ士ト共ニ三六俱樂部ヲ組織シ、目的貫徹ノ爲ノ運動ヲ開始スル爲ニ十二月一日機關紙「一九三六」ヲ創刊シ、全國各官衙、學校工場、在郷軍人會青年團、婦人會等ニ無料配布シタ外三六情報ト云フ「パンフレット」ヲ發行シ主ニ右翼團體方面ニ配布シ、又時ニ軍隊軍人ニ對スル文書策勵ハ相當活潑ヲ極メタノデアアル。

(三)昭和十年天皇機關紙問題發生スルト共ニ現下非常時局ノ打開ハ國體明徹ノ顯現ニ在リトシテ各地郷軍同志會ニ呼ビ掛ケ政府並ニ在郷軍人會本部ニ迫リ、又同年十二月一日發行ノ三六情報第二十四號ニ於テハ「恐懼引責ヲ知ラナイ政府カア

レハ御親率ノ下ニ終ニ武力ヲ用セテ迄モ必ス引責セシメン云々トノ記事ヲ記載シ、直心道場ノ大森一聲、澁川善助等ヲ地方ニ派遣シテ機關說排撃運動ノ衝ニ當ラシメ、或ハ十一年二月十四日發行ノ三六情報第三十號ニ於テ相澤事件ノ公判ヲ機ニ維新黨行ヲ強調宣傳シタ。

(四)然ルニ二、二六事件ニ關シ本俱樂部主要人物四王天中將、松本少將、小林大佐野田大佐、伊藤大尉ノ反亂幫助トシテ事件送致(九月十九日全部不起訴釋放)セラレタ後ハ著シキ活動ヲ見ナイヤウニナツタ。

學生團體運動

第五項 學生團體運動

(一)右翼學生團體トシテ組織形態ノ稍整ツタモノカ結成セラレタノハ大正十二年頃テアル。即チ世界大戰ノ直後カラ澎湃トシテ勃興シタ左翼思想カ學校内ニモ瀾漫横溢スルニ及ンテ之ニ對抗セントシテ勃然國家主義、國民主義ヲ掲ケテ外來思想ノ排撃ヲ叫ビ、學内ヲシテ祖國意識ニ蘇ラシメントスルニ始マル。而シテ當時創立セラレタ右翼學生團體中著名ナモノハ上杉慎吉ヲ中心トスル東京帝大ノ七生社、山本美越指導ニ係ル

京都帝國大學續興學會、松村松年ヲ會頭トスル北海道帝大ノ北大興亞學會、大川周明ノ創立ニ係ル拓殖大學ノ魂會、官原民平ノ指導ニ係ル同大學ノ日本魂會、其ノ他東京農大ノ一志會、第一高等學校ノ瑞穂會、第五高等學校ノ東光會テアツテ何レモ學内ニ於ケル右翼思想ヲ抱懷スル教授ヲ中心トシテ其ノ指導ニ係ルモノテアツテ勿論政治的色彩乃至實行運動的臭味ニ濃ク純然タル思想修養團體ノモノカ多シ。而シテ其ノ後更ニ學校ニ現役將校カ配屬セラレルニ及ンテ之ヲ中心トシテ教化若クハ國防研究ヲ目的トスル各種右翼團體ノ結成ヲ見ルニ至ツタ。

(二)次テ昭和六年滿洲事變ヲ契機トシテ據頭シタ右翼思想ハ之等學生ニ對シテモ偉大ナル刺戟ヲ與ヘ、昭和六年末乃至同八年互ツテ結成セラレタ右翼學生團體ハ殆ント全國高等若小專門學校以上ニ及ヒ其ノ數枚學ニ違カナク終ニ各學校ノ橫斷的連絡ヲ策スルニ至リ、或ハ學外ニ於ケル團體ニ加入シ或ハ學

外圍體ト連絡ヲ保チ、其ノ目的トスル所モ修養研究ノ範圍ヲ逸脱シテ行動ニ出ツルモノカ出來テ我カ國右翼學生運動上、劃期的躍進ヲ爲シタノテアル。

第三款 右翼團體ノ指導精神概観

右翼運動ノ主張スル主義精神ハ各種各様テアルカ其ノ共通點ハ日本精神テアル。從ツテ之ニ反スルモノ即チ、我カ國體ニ背キ我カ國家ニ背反スルモノハ一切ヲ擧ケテ之ヲ排撃スル點ニ於テ亦一致シテ居ル。

本運動ノ目的ハ初メハ單ナル研究的、修養的即チ精神運動トシテ出發シタモノカ妙クナイノテアルカ、漸次政治的ニ進出シテ殆ント政治運動ト區別シ難イ状態トナツタ。各團體ノ具體的改革主張ノ中、政治、經濟ニ關スル主ナモノヲ擧ケルト次ノ如クテアル。

第一 政治的主張

(一) 天皇中心政治ノ徹底

此ノ主張ハ右翼團體ノ中核ヲ爲ス精神テアツテ其ノ國粹的タルト無産的タルトヲ問ハス一貫シテ居ル。然シ其ノ綱領等ニ表ハレタ字句ハ必スシモ同一テナイ、或ハ一君萬民政治ト稱シ、或ハ天皇中心政治ノ確立ト稱シテ居ル。

(二) 強權政治ノ主張

天皇中心政治ノ確立トハ右翼諸家ノ主張ニ依レハ天皇中心ノ強權政治ノ意テアツテ歐洲ニ於ケル獨裁トハ大イニ其ノ趣ヲ異ニシテ居ル。即チ現在ノ政黨政治、議會政治ノ無能、墮落、私闘政治ヲ批難シ、國家國民全般ノ福利ヲ圖リ日本ノ國家トシテノ發展ヲ目的トスル君民一致ノ天皇政治ヲ叫フモノテアル。從ツテ其ノ究極スル處ハ天皇中心政治ノ確立ト同様テアル。

(三) 政黨解消既成政黨打破

此ノ主張ハ前項ノ實績ニ外ナラヌ。政黨解消ノ聲ハ右翼運動ト殆ント同時ニ興ツタモノテアルカ、其ノ實際運動トシ

政治的主張

テ表面化シタノハ昭和八年末松岡洋右カ唱道シ、之三井久
非蘭雄、赤松克麿等ノ率テ國民協會、青年日本同盟カ參
加シタ時テアル。其ノ主張ハ黨利黨略以外何物モナイ既成
政黨打破ヲ唱唱強シタモノデアツテ其ノ歸スル處ハ、
天皇中心政治ノ確立要望ノ具體的運動デアアル。

經濟的主張

第二 經濟的主張

經濟政策トシテ右翼團體ノ主張ノ根本ヲ爲スモノハ資本主義
經濟組織ヲ改革シテ國家統制經濟ヲ樹立スルト云フニアル。
此ノ點ハ右翼團體ヲ通シテノ特色デアアル。而シテ右翼團體
中ニハ國粹團體ニ於テ若干資本主義ヲ肯定スルモノカアルカ
日本主義團體乃至國家社會主義系ノ團體ハ殆ント全部明確ニ
此ノ資本主義ノ否定乃至改革ヲ要望スル。即チ、國家社會主
義派ノ主張ニ依レハ現在我カ國ニ於ケル社會的惡弊ハ經濟ニ
於ケル個人主義、營利主義、自由主義デアツテ其ノ結果國家
經濟全體トシテ無統制、無政府狀態デアラカラテ其ノ改革ヲ

ハナラヌトシ、又純日本主義派ハ一君萬民主義、國民全體主
義ニ對シ個人主義營利主義ノ根底ノ上ニ立ツ資本主義ハ相容
レナイト主張スルモノデアアル。

以上反資本主義ヲ主張スル結果之ニ代ルヘキ經濟組織トシテ
ハ、或ハ社會主義的經濟組織ヲ主張シ、究極ニ於テハ社會
範圍ノ法コソアレ等シク統制經濟組織ニ歸一スルモノノ如ク
デアアル。

第四款 軍トノ關係

右翼運動團體ニハ其ノ標榜スル目的、精神等、一國國家ノ
皇威ノ發揚ヲ念トスル軍人ノ共鳴ヲ得易キモノカ少クナイ
然シナカラ其ノ根本精神ヤ、又其ノ實際運動ニ至ツテハ我カ
國ノ精神ニ反シ、或ハ左翼破壞的運動ト何等邊ヲ所ナキモノ
モ絶無テハナイ。

彼等ハ強固ナル軍部ノ支持ヲ獲得スルニ急務スル餘リ軍人ノ
共鳴ヲ得易キヲ奇貨トシ、之ニ接近シ、之ヲ自己陣營内ニ導入

労働運動ノ意義

スルコトニ是レ努メル、此ノ結果ハ彼等ノ敬愛ノ爪牙ニ對シ、
軍秩ヲ蒙リ、建軍ノ本旨ニ反シ、兵軍ノ歴史ニ一大汚點ヲ印シ
タル生々シキ事例モアル。

故ニ憲兵ハ常ニ彼等ノ動向ヲ察ニシ、特ニ軍ニ對スル働キ掛
ケニ付テハ周到ナル監視ヲ怠ツテハナラヌ。

第三節 労働運動

第一款 労働運動ノ意義

資本主義カ高度ニ發達シタ結果中産階級以下ノ工業者ハ資本
家ニ隷屬スル一労働者トナルノ餘儀ナキニ至リ、茲ニ労働者ノ
生活困難ヲ招來シ、所謂社會問題即チ労働問題カ發生シタ。此
ノ労働問題ヲ労働者ノ團結力ニ依リ資本家ニ對抗シテ解決シヨ
ウトスル實行運動ヲ労働運動ト謂ヒ、労働運動ヲ效果的ニスル
爲數多ノ労働者カ労働條件ノ維持改善ヲ目的トシテ團結シタ集
合體ヲ労働組合ト謂フ。從テ労働運動ハ即チ労働組合運動ト謂
フコトカ出來ル。

我が國労働運動ノ推移

第二款 我が國労働運動ノ推移

(一) 我が國ニ於ケル労働運動ハ大別シテ左ノ四期ニ分ツコトカ
出來ル。

第一期 労働運動發展ノ初期（明治年間及大正七年前後迄）

第二期 労働組合勃興時代（大正八年ヨリ大正十二年關東大
震災迄）

第三期 労働組合分裂抗争時代（大震災以後滿洲事變迄）

第四期 總合統一運動期（日本主義運動ノ勃興時代（滿洲事變
以後）

(二) 我が國ニ於テ労働運動ノ發生シタノハ日露戰役以後テアル

即チ、尙戦役ヲ繼テ一時産業ハ暴落ノ憂ヲ遂ケ、労働者モ
亦此ノ悲運ニ浴シタケレトモ、其ノ反動的不況時代ニ入ルト
足尾、別子、赤松等ノ山ニ大暴動カ起リ、數カ樹動シテ
足シタ。之等ノ労働運動トシテハ無統制無秩序ナモノテアツ
タカ、其ノ後大正元年、鈴木文治ニ依テ友愛會ト稱スル組織

協同主義ノ組合カ設立セラレハ、我が國労働組合運動ノ母體ト
ナツタ。之カ即チ第一期テアル。

(三) 歐洲大戦中ノ好景氣時代ニ紹介セラレタル「デモクラシー」
思想竝ニ「ロシヤ」革命ハ労働界ヲ刺戟シテ労働組合モ亦飛
躍的ニ進出シ、「サンヂカリズム」ノ激進的階級論的思想カ其
ノ指導精神トシテ之ヲ風靡シタ。

前シテ從來協同的無産階級テアツタ友愛會モ悉ク資本主義ニ對
スル改修的態度ヲ採リ、其ノ名稱モ日本労働組合總同盟ト改
稱サルルニ至ツタ。其ノ後大正九年春、財界大隈後資本家
ノ改修的態度ハ労働組合ヲシテ防衛ニ立タシメ争議ハ敢ニ於
テハ減少シタケレトモ其ノ手段ハ益々深刻化シ、新カル情勢
徑ニ亂立シタ労働組合ハ大同團結ニ依ツテ其ノ苦難ヲ脱シヨ
ウトシタ。然ルニ「サンヂカリズム」系ト既ニ漸入シテ居タ
共産主義系トノ思想的對立ノ爲大正十一年組合統一ハ不調ニ
終ツタカ之ヲ契機トシテ空襲ナル革命運動ヲ目標トシテ居タ

「サンヂカリズム」系組合運動ハ漸次凋落シ、現實的ナル共
産主義系組合運動カ勃興スルニ至ツタ。之カ即チ第二期テア
ル。

(四) 第三期ハ所謂労働組合ノ分裂抗争時代テアツテ且共産主義
ヲ指導精神トスル労働組合ノ全盛時代テアル。即チ現實的ナ
ル共産主義ノ登場ハ既成組合内ニ思想的對立ヲ生シ、日本勞
働總同盟ハ大正十四年ニ第一期大分裂ヲ爲シ、日本労働組合
評議會ノ設立ニ因テ左翼労働組合カ發生シ、其ノ後第二次分
裂ニ因テ中間派テアル労働組合全國同盟カ生レ、更ニ第三次
分裂ニ因テ全國労働組合同盟カ現ハレ、共産主義ヲ中心トス
ル理論闘争ト内部的對立抗争トハ益々激化シタノテアル。然
ルニ一方激化セル共産黨ニ對スル連綿的檢舉ハ必然的ニ左
翼組合運動ニ大障礙ヲ築ク、日本労働組合評議會ハ昭和三年
結社ヲ禁止セラレ、得坐セル共産黨ノ指令下ニ在ル日本労働
運動全國協議會（略稱全協）ハ非合法共産主義労働組合トシ

組合統一
運動日
本主義
運動時
代

テ全く流行運動ニ入ルニ至ツタ。而シテ前述ノ如キ内部的對立抗爭ノ裡ニ世界恐慌ノ下ニ於テ資本家ノ強力ナル攻勢ニ當面シナケレハナラナカツタ勞働界ハ必然的ニ之カ對策トシテ勞働組合戰線統一運動ヲ促進スルニ至ツタ。

(四) 滿洲事變ヲ契機トスル國民全般ノ思想的覺醒ハ必然的ニ一般勞働者ニモ影響シ從來ノ勞働運動ハ恰モ反國家的運動ノ如ク看做サレテ國家主義的運動カ急激ニ擡頭シ、日本精神ヲ強調スル勞働運動カ勃興スルニ至ツタ。

支那事變勃發以來勞働者一體產業報國ノ風潮ハ益々擡頭シ、就中產業報國會ノ進展ニ依ツテ勞働組合ハ漸次其ノ存在價値ヲ失ヒ、昭和十五年七月全日本勞働總同盟ノ解體ヲ中心トシ之ト前後シテ社會民主々義系、右翼系ヲ初メ、勞働組合ハ悉ク解散スルニ至ツタ。

一面昭和十三年二月頃ヨリ發生シタ產業報國會ノ組織ハ其ノ發展ニ伴ツテ政府モ亦之カ積極的指導ニ進出シテ來タカ、昭

勞働爭議
ノ意義

勞働爭議
ノ戰術
勞働者側
同盟罷業
(一)スト
ライキ

和十五年大政翼贊會カ結成サレルニ及ンテ其ノ一翼トシテ勞務新體制異化ノタメ同年十一月二十三日大日本產業報國會ヲ結成スルニ至ツタ。

第三款 勞働爭議

第一項 勞働爭議ノ意義

勞働爭議トハ所謂勞働問題ヲ繞ツテ資本家ト勞働者トノ間ニ生スル紛議テアツテ通常勞働者側カ其ノ賃銀、雇傭、休業、勞働時間問題等ヲ中心ニ自己ノ屬スル資本家トノ間ニ惹起スルカ時ニハ他ノ勞働者ノ爭議ヲ援ノタメ其ノ爭議ニ參加スルコトモアル。

第二項 勞働爭議ノ戰術

第一 勞働者側ノ戰術

(一) 同盟罷業 (一)ストライキ

同盟罷業トハ多數ノ勞働者カ結集シテ同時ニ勞働ヲ停止スルコトヲ謂フ。此ノ方法ハ資本家ヲ脅威スルニ最も有效テ

アルカラ、從來ノ勞働爭議中約八割ヲ占メテ居ル。罷業實施ニ當ツテハ爭議團長、交渉委員、會計係、内務係、外務係、傳令係、警備隊、炊事部、婦人部等各種ノ機關ヲ設ケ最高機關トシテ指導部ヲ置イテ各種ノ戰術ヲ練リ、示威運動演說會、ピラ撒布、商會懇談、工場占領等ヲ行フノカ常テアル。

罷業團ノ最モ苦心スル所ハ結束ノ鞏化ト資金ノ獲得テアル單ナル勞働爭議トシテノ同盟罷業ハ固ヨリ犯罪テハナイガ共產主義宣傳ヲ目的トスルモノ、或ハ政治的目的ヲ持ツ「ゼネスト」等ハ犯罪トナルコトカアル。

怠業(「サボタージユ」)

(一) 怠業(「サボタージユ」)
怠業トハ多致勞働者カ結束シテ仕事ヲ怠リ能率ヲ低下スルヲ謂フ。怠業ノ目的トスル所ハ事業主ニ損失ヲ與ヘテ之ヲ屈伏セシメントスルニ在リ其ノ戰術モ略々同盟罷業ト同一テアルカ正面カラ堂々ト争ハス陰性消極的ナル點ニ於テ相

資本家側ノ戰術

第二

導カアル。
特異ナ戰術トシテハ煙突上リ、絶食同盟等ノ例モアル。

(一) 同盟的非賣(「ボイコット」)宣傳
爭議ノ相手方タル資本家ノ生産品ニ對シテ大衆的非賣ヲ宣傳シテ資本家ニ痛棒ヲ與ヘヨウトスルモノテアル。

(二) 工場閉鎖(「ロックアウト」)

爭議團ト對抗スルタメ資本家カ自己ノ事業ヲ自ラ停止シ以テ勞働者ノ生活ヲ脅威セントスルモノテアル。

(三) 團體交渉ノ拒否
團體トシテノ交渉ヲ拒否シ個別的ニ接衝シテ一部勞働者ヲ説得懷柔シ此ノ間ニ罷業破リヲ行ハントスルノテアル。

(四) 暴力團ノ使用
所在縮隘發見忌避

(五) 爭議首謀者ノ解雇乃至御用組合ノ使用ニ因ル爭議團ノ切

勞働爭議
最近ノ傾向

崩。

第三項 勞働爭議最近ノ傾向

我カ國ノ勞働爭議ノ推移ヲ見ルニ歐洲大戰前ニ於テハ其ノ發生件數ハ僅カニ一年數十件ニ過キナカツタケレトモ大戰後ニ於ケル產業界ノ急速ナル發展ト當時ニ澎湃トシテ流入シタ西洋思想トノ影響ニ依テ大正五、六年頃ヨリ勞働者ノ生活向上ヲ内容トスル爭議カ勃發スルニ至ツタ。其ノ後社會事情ノ變遷ニ應シテ若干ノ消長カアツタケレトモ大體年ヲ逐ツテ増加ノ一途ヲ進リ、遂ニ昭和六年ニ至リテハ爭議件數二、四五六件ニ上リ、其ノ内同盟罷業息業、工場閉鎖等ノ爭議手段ヲ伴フモノ又九九八件ノ多キヲ數ヘ、我カ國爭議史上ノ最高記録ヲ示シタ。然ルニ昭和七年ヨリ之ト反對ニ漸次減少傾向ヲ示シ、昭和十年ニ至リテハ發生件數一、八七二件トナリ、其ノ内同盟息業等ノ爭議手段ヲ伴ヒタルモノ又五九〇件トナツタ。

此ノ傾向ハ十一年ヨリ又モヤ逆轉シテ發生件數ニ於テ前年ニ

比シ、約百件増加シ、越テ翌十二年ニ入ルト毎日夥シキ數ニ上リ上半期ノ狀況ニテハ昭和六年ノ最高記録ヲ突破スルノ形勢ヲ示シタケレトモ偶々七月支那事變勃發シ、之ヲ轉機トシテ下半年以後ハ再び減少スルニ至リ昭和十五年ニ於テハ七一八件ニ激減シ最近十一年ノ最低記録ヲ示スニ至ツタ。斯クノ如ク勞働爭議ノ傾向ハ年ニ依テ著シキ消長アルモ此ノ原因ヲ見ルニ昭和七年以降ニ於ケル爭議減少ハ滿洲事變ヲ契機トシテ我カ國社會思想ニ大ナル變革ヲ來シ國家主義思想カ著シク興隆シ延テハ勞働運動ノ方針ニモ相當大ナル方向轉換ヲ指示シテ漸次産業協力ノ機運ヲ馴致シ、從來社會運動ノ一翼トシテ盛ニ利用セラレタ爭議激發主義ノ如キハ茲ニ大ナル修正ヲ見ルニ至ツタコト又所謂軍需インフレニヨル軍需工業ノ好轉、金輸出ノ再禁止以來爲替低落ニ依ル輸出向産業ノ好況等カ産業界ニ潤ヒテ齎シタコト等ニ基因スル。

又單ニ爭議件數ノ減少ノミテナク爭議ノ質ニ於テモ從前ニ比

シ著シク懺悔化シ勞資互讓ノ精神カ見ラレルコトハ注目スヘキ現象テアル。

第四款 軍ノ關係

平時ニ於テ勞働者ノ社會的地位向上ノ爲ニ行ハレル純粹ナル勞働運動ハ軍ノ使命ト相關連スルコト比較的稀薄テアル。然シ一度戰時ニ入ルヤ此ノ關係ハ一變スル。即チ、戰時ニ於ケル國內一切ノ産業ハ戰爭遂行ヲ樞軸トシテ運營セラレナケレハナラナイ。此ノ場合ニ於テハ軍ナル勞働爭議モ戰爭遂行能力ニ障礙ヲ及ボシ、殊ニ重要ナル軍需工業、軍事輸送等ニ於テハ之カ爲ニ作戰ニ一大頓挫ヲ來シ、敗戦ノ因ヲ成スコト少シトセス、其ノ他軍需工場等機秘兵器ヲ製造スル部面ニ於テハ其ノ秘密ノ漏洩スルコトハ屢々作戰上ノ危機ヲ招來スル。

之カ爲共産黨員又ハ敵國間諜等ハ戰爭能力破摧ノ目的ヲ以テ軍需工業従業員ニ働キ掛ケ「ストライキ」、「サボタージユ」ノ煽動、爆破ノ政行、秘密ノ入手等謀略活動ニ焦慮スルヲ常ト

スル。

軍ハ自ラ經營スル幾多ノ軍工場ヲ有シ、數十萬ノ工員ヲ擁スルノミナラス軍指定ノ軍需工場ノ數ニ至ツテハ枚舉ニ遑ガナイ之等ノ従業員ヲ共産黨及敵國諜略ノ魔手カラ遮斷シ、且協力シテ圍滑ニ産業報國ニ邁進セシムルコトハ戰爭遂行上緊要ノ要務テアル。是レ憲兵カ勞働運動ノ動向ニ深甚ノ監督ヲ怠ルヘカラサル所以テアル。

第四節 農民運動

農民運動ノ意義

第一款 農民運動ノ意義

農民運動トハ農民カ經濟的社會的地位ノ改善、若クハ解放ヲ目的トシテ集團的行動ヲ爲スヲ謂フ。換言スレハ資本主義ノ發達ニ伴ヒ農村ニ於ケル自給自足ノ經濟的組織カ商業經濟組織ニ一變シタタメ農民ハ其ノ農産物ノ廉價ニ賣却シ、高價ナル商品ヲ購入シナケレハナラナイヨウニナリ、自然農村ノ疲弊ヲ招來シタ。此ノ農民ノ生活ニハ勢ヒ之ヲ打開スル爲ニ共同的運動ヲ

農民運動ノ推移

爲スニ至ツタ。之レ即チ本來ノ意味ニ於ケル農民運動テアル。然ルニ農民運動ハ思想運動ノ浸潤ニ依リ漸次政治的乃至思想的運動化シタ感カアツタケレトモ最近ニ於テハ純粹ノ農民運動ニ復歸シタ傾向カアル。故ニ之ヲ觀察取締ニ當ツテハ其ノ區別ヲ良ク監察スルヲ要スル。

第二款 農民運動ノ推移

農民運動ノ主體ヲナスモノハ農民組合テアル。農民組合ニハ其ノ數四千ヲ超ヘ全國的ニ統制セラレタモノト、單ナル地方組合トカアルカ、地方農民組合ハ團結力カ弱イノミテナク主義トシテ純粹ノ農民運動ニ携ハツテ居ル。

我國ノ之等主要ナル農民組合ハ歐洲大戰以降階級的思想ノ抬頭ニ依ツテ發生ヲ見タモノテアルカ、爾來社會事情ノ變化ニ依ツテ其ノ發展ニモ消長ヲ見タケレトモ、支那事變勃發後ニ於テハ、舊來ノ農民組合ノ指導精神ハ急角度ノ轉換ヲ見ルニ至リ、殊ニ産業報國運動ノ進出ト共ニ勞資協調舉國一體ノ日本精神ヲ

小作爭議ノ意義及推移

基調トシタ國家運動ニ刺戟セラレ、全國主要農民組合ハ孰レモ解消スルニ至ツタ。

第三款 小作爭議

第一 意義

小作爭議トハ地主ト小作人トノ間ニ於テ小作條件ヲ中心トシテ生スル紛議ヲ謂フ。紛議ノ性質ハ原因ヨリ見レハ小作權關係又ハ小作地引上ケカ平均以上ヲ占メ、不作ニ依ルモノ及小作料滞納ハ間隔ヲ置イテ之ニ次キ、要求事項ヨリ見ルト小作契約ノ繼續力半數以上ヲ、一時的小作料減額カ殘餘ノ約半數ヲ占メテ居ル。又統計的ニ爭議ノ性質ヲ見ルト小作權關係ノ爭議ハ逐年増加ノ傾向ニアルカ之ニ反シ小作料關係ノモノハ漸次減少シテ居ル。

第二 小作爭議ノ推移

支那事變勃發以來舉國一致産業報國ノ國家的氣運ニ乘シ地主

小作人側ニ共ニ時局ノ重大性ヲ認識シテ從來ノ對立抗爭ヲ捨テ極力紛争排除ニ努メ、各種機關ニ於テモ亦積極的ニ爭議防止ニ進出シテ來タノテ爭議案件數ハ逐年減少シ昭和十四年ハ二、五〇六件トナツタ。然シ乍ラ之ヲ歴史的ニ觀レハ此ノ二、五〇六件ハ尙昭和七年以前ニ於ケル件數ニ比フレハ遙カニ多イト謂フ狀況テ之レヲ以テ爭議ハ下向セリト樂觀スルコトハ早計テアル。

○爭議地方分布狀態

小作爭議ノ分布ヲ地理的ニ見レハ山梨、長野、東北、關東地方ニ比較的多イ。其ノ理由トスル所ハ之等地方ハ一般ニ農家ノ經濟狀態カ良好テナイノト、一ツハ惡質ノ土地「ブローカー」多イコト等ニ據ルモノテアル。

第二項、小作爭議ノ戰術

小作爭議ノ戰術
小作人側ノ戰術

第一 小作人側ノ戰術

當初ハ不耕作同盟等寧ロ消極的ノモノデアツタケレトモ近時

地主側ノ戰術

第二 地主側ノ戰術

ハ地主モ亦窮餘ノ結果、強硬ニ出スルカ爲ニ小作人側ハ土地ノ不還同盟、小作料不納同盟等ニ結束シ、地主ノ糾彈、立索立毛差押ニ對スル抗爭等警察心理ニ驅ラレ暴行不祥事件ヲ爲ス直接手段ニ出ツルニ至ツタ。尙地主カ訴訟ヲ提起スルニ方リ小作人側ハ各種ノ抗辯方法ヲ以テ判決ヲ延延セシメ、又示威運動、兒童同盟休校、公租公課滯納申合等ニ依リ與論ニ訴ヘヨウトシタモノカ、少クナイノハ注目ヲ要スル所テアル。

前述ノ如キ小作人ノ必死的手段ニ對シ地主側モ團結的對抗ノ必要ヲ生シ地主組合ノ組織土地會社ノ設立等ニ依リ、近時ハ寧ロ攻勢的ニ出テ滯納小作料ノ取立、土地返還要求等ノ爲民事訴訟ヲ提起シ、法ノ力ニ依ル立毛其ノ他ノ動産ノ差押及耕作地立入禁止等ヲ強行スルニ至ツタ。之レ一部ノ大地主ヲ除テハ地主モ亦窮乏ニ陥ツタ爲テアツタ小作地ヲ賣却シテ負債ノ重壓ヨリ免レヨウトスル者等ニ依テ小作權ニ關スル深刻ナ

水平運動ノ意義

ル爭議ノ激成セラルル傾向ニ在ルノハ着目スヘキ點テアル。
第五節 水平運動
第一款 水平運動ノ意義
水平運動トハ所謂特種部落民ノ社會的解放運動ヲ謂フ。即チ傳統的ノ差別ヲ一掃シテ普通人ト同一水平線上ニ浮ヒ上ル爲ノ自主的解放運動テアル。然ルニ、水平社同人ノ間ニ社會主義思想カ浸潤スルニ及ンテ水平運動ハ單ナル差別撤廢運動ニ止マラス廣ク政治乃至思想運動化スルニ至ツタ。

水平運動概説

第二款 水平運動概説
第一次歐洲大戰後民族自決解放思想ニ刺戟セラレタ一部部落民カ大正九年一月奈良縣柏原ニ燕會ヲ結成シテ部落民自身ノ力ニ依ル解放即チ差別撤廢ヲ叫ンタノカ、抑々水平運動ノ始マリテアルカ、其ノ後大正十一年三月、共產主義者佐野學ノ指導ノ下ニ京都ニ全國水平社カ創立セラルルヤ全國部落民ハ翕然トシテ之ニ趨キ爾來、差別事件ニ對スル亂彈運動ノ如キモ日一日ト

テシク大正十三年ニハ亂彈運動ハ最高潮ニ達シタ、一方水平社内ニ於ケル左翼思想モ急激ニ進展シテ大正十三年十一月ニハ社内ニ水平社青年同盟(後ニ無産者同盟ト改稱)カ組織セラレタカ、彼等ハ「社會主義社會ノ實現ヲ以テ水平運動目的達成ノ先決條件ナリ」ト叫ビ、社内ニハ濶々トシテ共產主義思想ノ浸染ヲ見ルニ至ツタ。斯クノ如キ全國水平社内ノ左傾化ニ儼ラサル一談ハ當時ト行爲ラ共ニスルヲ要ヨシトセス、昭和二年一月、全國水平社ヨリ分派シテ日本水平社ヲ創立シタ。其ノ主張ハ「五ヶ條ノ綱領」ニ基テ水平運動ヲ行フ「ト斷言ニ在ル。
昭和二、三年頃カラ差別等行カ著シク減少シタノト他面水平社内左分子ノ急進ニ因ツテ水平運動ハ自然ニ沈衰シタカ、昭和六年ニ至ツテ大部ノ消滅ハ、無産階級ノ解放運動タル階級闘争ニ變付クロトニ依ツテ水平運動ヲ挽回セントシタカ、適宜分子ハ更ニ徹底シテ奮闘スル他ノ無産組合中ニ解消シ、之等ト合流ノ下ニ純然タル階級闘争ヲ行フロトニ依リ新生面ヲ打開セン

運動方針
日本水平

日本水平

トシ全編水平運動方針ヲ定ムルニ至ツタ。

第一 日本水平性

(一) 日本運動ヲ指導トシテ指導ヲ任ズ

(二) 無階級ヲ主張スルニ在リテ階級ヲ排ス

第二 日本水平性

全日本水平運動ニハ指導ヲトシテ指導ヲ任ズ

ノ運動方針ハハスシモ一ツシテハナシ

(一) 階級性

一階級性ヲ主張スルノ階級性ニシテハナシ

モ階級性ナル階級性ニシテハナシ

階級性ニシテハナシ

(二) 階級性

階級性ニシテハナシ

階級性ニシテハナシ

階級性ニシテハナシ

軍トノ關係

(2)徹底的ニ階級闘争ニ走ル

尙極左派ノ一部ハ共產黨ニ加入シ、更ニ人民戦線運動ノ旗頭ニ乗シテ各無産階級ニ協力シテ戦線統一ノ急速ナル實現ニ努力スルコトヲ決議シタ。

第四款 軍トノ關係

全國六千ノ部落ト二百萬ノ部落民トヲ背景トスル、水平運動ハ戦時ノ兵員及輿論指導ノ爲、相當關心スヘキ問題テアリ、過去ニ於テハ軍隊内ニ於テモ差別事件ニ起因スル糾弾運動ニハ相當憐マサレタモノテアルカ、純水平運動ハ本體ニ於テ既ニ下火テアル。只今後ノ問題ハ水平社同人ニ對スル共產系分子ノ働キ掛ケテアリ、然モ全國水平社系ノ同人等カ積極的ニ反軍運動ニ乗り出シ、或ハ在郷軍人會、青年團等ニ對スル内部的働キ掛ケヲ策シテ居ル等ハ大イニ監視ヲ要スル點テアル。

第六節 民族運動

我カ國ニ於ケル民族運動ハ朝鮮人、臺灣人ニ關スルモノテア

ツテ、前者ハ共產主義運動、或ニ宗教的獨立運動ヲ、後者ハ社
會民主主義系島内自治獲得運動ヲ其ノ骨子トシテ居ル。

第一款 朝鮮民族運動概説

朝鮮ニ於ケル民族運動ハ殆ント總テ思想運動ト關聯シテキル
日韓併合前後ニ於テハ、併合ニ反對ナル人々ノ陰謀ニ依リ、
各地ニ暴動事件カ頻發シ、暴徒數ハ十五萬二千人ニ達シタカ漸
次沈靜ニ歸シタ。

第一次歐洲大戰後、民族自決ノ世界的風潮起ルヤ、之ニ刺戟
セラレテ大正八年三月、天道教徒カ首謀圖トナリ、所謂朝鮮獨
立騒擾事件ヲ惹起シ、事件参加人員五十萬人ニ達シタ。本事件
勃發ト共ニ多數ノ不逞鮮人ハ上海ニ集リ獨立運動ノ氣勢ヲ擧ケ
其ノ中心團體ヲ佛租界内ニ組織シ、大韓臨時政府（俗稱獨立假
政府）ト稱シタ。彼等ノ策動ニ依リ事行後モ朝鮮ニハ不穩文書
ノ頒布、武方圍境侵入、大官ノ暗殺、官公署ノ爆破等ノ陰謀カ
絶エナカツタ。獨立假政府首腦部ハ初メ、米國ノ力ヲ藉リテ朝

鮮獨立ヲ企圖シタカ後、共產主義ノ東漸ニ從ヒ之ニ心酔シ、其
ノ他ノ獨立運動者モ民族主義運動ト共產主義（民族解放ヲ標榜
ス）運動トノ結合ニ依ツテ目的ヲ達セントスル傾向ヲ生シ、共
産主義運動ハ朝鮮ニ於テ頗ル盛ニナツタ。即チ國際共產黨東方
朝鮮委員會指導ノ下ニ朝鮮青年總同盟、朝鮮勞動總同盟、朝鮮
農民總同盟、朝鮮學生科學研究會等ノ團體ヲ結成シ（間モナク
禁止セララル）新幹會、權友會等ノ民族團體トモ共同戰線ヲ張ツ
テ共產主義ニ狂奔シ、殊ニ國外ヨリノ策動及日本共產黨ト連絡
シテ數次ノ復讐ニモ拘ラス執拗ニ進行運動ヲ續ケテキル。

又昭和七年十一月ニハ上海韓人青年黨、韓國獨立黨（在上海）
韓國革命黨（在南京）、義烈團（在南京）、朝鮮革命黨（在滿
洲）、光復同志會（在北京）等ノ獨立運動團體カ大同團結シテ
韓國對日戰線統一同盟ヲ組織シ、又朝鮮獨立運動ト支那抗日諸
團體及關係人トノ連絡ヲ容易ナラシムル爲、中韓民衆同盟ヲ
結成シテ反抗運動ヲ續ケタ。其ノ他天道教、普天教、侍天教、

臺灣民族運動概説

青林等致十種ニ及フ宗旨類似國體モ民族意識強ク民族獨立意識ノ昂揚ニ努メタカ、特ニ基督教ハ諸宗教中最大ノ勢力ヲ有シ然モ其ノ最高幹部ハ大部分英、米、其ノ他ノ外國宣教師テアツテ今モ尙鮮人ノ民族思想ヲ鼓舞シテ布教ノ擴大ヲ圖ツテキル。然シナカラ之ヲ要スルニ朝鮮民族ノ關心ハ實現性ノナイ民族獨立運動カラ離レテ漸次「コミンテルン」ノ共產主義運動ニ移向セントスル傾向ニアルカ、又一面、非常ナ事大主義者テアツテ滿洲事變以來ノ日本ノ跋扈タル態度、更ニ支那事變ニ於ケル皇軍ノ偉大ナル活動ニ因ツテ我カ國ニ對スル認識ヲ深メ、漸次日本ニ信恃セントスル機運ヲ醸成シツアル。

第二款 臺灣民族運動概説

第一次歐洲大戰後ノ民族自決ノ思想ハ臺灣人ノ民族運動ニ對シテモ劃期的活動ヲ促シ、大正十年結成セラレタル臺灣文化協會ハ類リニ施政ヲ非難シ、反日反官反内地人氣分ヲ醸成シタカ其ノ後共產主義思想ノ浸潤ト共ニ同協會内ハ左翼共產主義派ト

軍トノ關係

右翼民族主義派トノ二派ニ分裂シ、前者ハ勞動農民大衆ノ組織化等階級闘争ニ専念シテ共產主義運動ニ走り、後者ハ昭和五年ニ臺灣地方自治聯盟ナル政治結社ヲ結成シテ三千五百名ノ會員ヲ擁シ、地方自治制ノ施行請願運動ニ狂奔シテ昭和十年四月、一部自治制ノ改正ヲ見タ。

要スルニ臺灣ノ民族運動ハ島内自治獲得運動カ其ノ主流ヲ爲シテキルカ、昭和十二年支那事變勃發以來ハ一般情勢ノ不利ヲ察シテ矛ヲ納メ、同年八月ニハ臺灣地方自治聯盟モ解散シタ。

第三款 軍トノ關係

朝鮮ハ我カ北方作戰ノ兵源基地ニアリ、臺灣ハ我カ南方作戰ノ據點タル地位ニアリ、殊ニ朝鮮ニハ既ニ志願兵制度モ施行セラレ昭和十九年度ヨリハ又徵兵制度ノ實施ヲ見ントシテキルカラ其ノ民心ノ動向ハ軍ノ施策ニ重大ナル關係カアル。

大東亞戰爭勃發以來我國ノ赫々タル大戦果ハ鮮(臺)人ニ對シ我國力ニ對スル認識ト信賴トヲ深カラシメ皇民化推進ニ拍車

的影響ヲ與ヘテルヲ認メラレルカ未タ多年ニ亘リ培ハレタ拜外
思想ト民族意識トヲ完全ニ振興スルニ至ラス依然トシテ

ノ我國力乃至戰勝ニ對スル不安感
2 民族獨立意識ノ堅持

等其ノ民心ノ底流ニハ今尙樂觀ヲ許サナイモノカアルノミナ
ラス敵國ノ策謀ニ乘セララルル虞多シトセサル現決ニアルヲ以テ
之等策動ニ對シテハ嚴ニ警戒監視ヲ要スルモノトス。

第三章 戰時下國內政治思想經濟等ノ諸情勢概観

第一節 眞實運動

第一款 新體制運動

第一項 新體制ノ意義

新體制トハ日本カ現在世界歴史ノ推進力トシテ世界新秩序建
設ノ爲全國民カ 聖旨ヲ奉戴シ、一億一心一體トナリ國家國民
ノ總力ヲ十二分ニ發揮出來ル様ニスル仕組ヲ云フノテアル。
新體制ト謂ヘハ今迄ノモノヲ總テ根本的ニ打壞シテ何カ新シ

新體制ノ
意義

新體制
發生ノ
諸因

イモノヲ作ルノタト言フ風ニ考ヘラレルノテアルカ、必スシモ
現在アルモノヲ悉ク破壊スル意味テハナイ。併シ新體制ノ要求
ニ關ハナイモノハ自然ニ崩レルコトハ已ムヲ得ナイノテアツテ
政黨ノ解消等モ即チ之カ爲ニ外ナラス。而シテ新體制ト云フノ
ハ元近衛首相カ當時緊迫シタ世界情勢ニ鑑ミ其ノ必要ヲ強調セ
ラレ、國家國民ノ力ヲ一ツニ結集シ、從來ノ國力ヲ更ニ倍加シ
以テ當面スル世界的危局ヲ乗り切り、躍進日本ノ眞姿ヲ顯現セ
ントシテ考案セラレタコトニ始マルノテアル。
今や世界ハ大動亂、大轉換ノ眞只中ニ在ルカ之ハ自由主義、
民主主義ヲ背景トシテ固メラレテ居タ世界ノ舊秩序ヨリ新シイ
世界即チ全體主義的ナ世界ニナリツツアルヲ意味スルモノテア
リ、此ノ世界ノ轉換ニ耐ヘ行ク爲必要ナル機構ニ世ノ中ノ建直
シヲスル、之カ即チ新體制テアル。

第二項 新體制運動發生ノ諸因

明治維新ハ當時ノ新體制ヲアル、ソレハ當時ノ尊皇愛國ノ先

覺者ニヨツテ昂揚セラレタ國體觀念ノ思想的基礎カ此ノ大變革ノ最大原因ニナツタノアルカ、又一面外國ノ壓迫カ重大ナ契機トナリ、明治維新カ出來タノタトモ云ヘル。ソレハ英米佛等ノ我國ニ對スル帝國主義的侵略カ我國爲テ沸騰セシメ、遂ニ明治維新カ起ツタノテアル。

斯クシテ日本ハ世界ノ仲間入りヲスルト共ニ當時ノ舊體制テアル封建制ヲ打破シ、近代國家ヘト發展シテ來タノテアツテ、其ノ開日清、日露ノ兩戰役ヲ發シ、一躍世界ノ強國トシテ國威ヲ宣揚スルニ至ツタノテアル。然ルニ夫レ迄日本ノ發展ヲ援助シテ居タ英米等ハ日本ノ強大ハ自分等ニトリ礙イ競爭者トナルモノトシテ俄ニ追迫ヲ加ヘ來リ、第一次歐洲大戰ニ依リ勝利ヲ得タル英米佛等ハ彼等ノ勝利ニ與ツテ力ノ有ツタ我日本ニ對シ四ヶ國條約、又ハ九ヶ國條約等ヲ以テ日本ノ大陸發展ヲ阻止シヤウト企テタノテアル。其ハ他米國ニ於テハ日本移民ノ入國ヲ禁止シ、又英國ニ於テハ自國貿易ノ擁護ヲ名トシ我日本商品

ノ英國領土内ニ輸出セラルルヲ極力妨害シタノテアル。如斯クイ世界ニ生活ノ途ヲ閉サレタ日本ハ活路ヲ大陸ニ求メネハナラヌコトハ當然テアルカ、一方英米佛ハ日本ヲ壓迫スル爲、更ニ當時日本ト地理的ニ、歴史的ニ非常ニ密接テアルニ不拘、國民的感情トシテ我ニ反對テアツタ支那ヲ煽動シ日本ニ反抗セシメ排日運動ヲ熾ナラシメ遂ニ滿洲事變ヲ惹起セシメタノテアル。而シテ此ノ滿洲事變コソハ日本カ世界ノ舊體制ニ對スル一ノ反擊テアリ、又之ニ依リ日本カ初メテ大陸ニ足場ヲ持ツコトニナツタノテアル。

之カ爲日本ハ從來鴨綠江マテノ國防圖ヲ滿洲國トノ共同防衛條約ニ基キ黑龍江迄延長シ、西伯利亞ニモ續ヒテ居ルノテアル。斯クシテ日本ハ一面ニ於テハ外國トノ國交カ益々複雑ニナルト共ニ自己ノ勢力範圍責任範圍モ亦非常ニ擴張セラレタノテ日本ノ國內政治モ經濟モ個人生活モ皆ソレニ相應シイ國內ノ建直シヲシナケレハナラヌト云フカト、英米佛等ヲ主體トスル從來ノ

秩序ノ下ニ生活シナケレハ日本ハヤツテ行ケナイノタト言フ
極的ナ考ヘトノ圖ヒカ政治ノ中ニ顯著ニ現ハレテ來タノテアル
即チ分リ易ク言ヘハ革新ト現狀維持、現狀打破ト現狀維持ト
ノ闘争カ有ユル面ニ展開シ來タノテアツテ、其ノ現レカ遂ニ血
盟國事件、五、一五及二、二六事件等ヲ惹起セシメタノテアリ
又右ノ如キ闘争中ニ今度ノ支那事變カ物發シタノテアル。
國內ノ情勢ハ右ノ如シ、特ニ今日ニ於ケル戦争ハ所謂國家ノ
總力戰テアリ、國家ヲ擧ケテノ戦争ナノテアルカラ國內ノ政治
經濟或ハ個人ノ生活ト云フモノヲ事變前ノ儘ニシテ置イテハ大
戦争ノ出來様管ハナイノテアル。

之カ爲所謂高麗國防國家ノ建設カ必要テアリ、眞ニ國體ノ本
義ニ徹スル萬民眞實ノ日本本來ノ姿ヲ十二分ニ發揚セネハナラ
ナシノテアツテ、其ノ結餘カ新體制ト言フ言葉ヲ呼ハレル日本
ノ建直シト言フコトニナツタノテアル。
新體制運動ハ昭和十五年八月二十八日首相官邸ニ於テ第一回新體制準備會カ開カ
レ、閣議決定ニ據リテ、

大政翼贊
運動ノ日
的

レタノヲ最初ニ爾後九月十六日迄ニ六回ノ會議ヲ開キ大體ノ成案ヲ得タノテ九月
十七日近衛首相ハ「近キ將來ニ於テ事態ハ益々重大性ヲ加フルモノト考ヘル
今日コソ眞ノ一億一心ヲナクテハナラヌト心カラ考ヘラレルノデ皆様モドウカ一
億一心ヲ以テ協力サレタイ」トノ決意ノコモル挨拶ニ依リ準備會ハ歴史的使命ヲ
終ヘ大政翼贊運動ノ具體的段階ニ入ツタノテアル。

第三項 大政翼贊運動ノ目的

大政翼贊運動規約第二條ニ「本運動ハ萬民眞實一億一心、服
分奉公ノ國民組織ヲ確立シ其ノ運用ヲ圓滑ナラシメ、以テ臣道
實踐體制ノ實現ヲ期スルヲ以テ目的トス」ト規定セラレテ居ル
即チ大政翼贊運動ノ目的ハ從來ニ於ケル個人主義的組織ヲ新ニ
換ヘテ一億國民力各々皇國臣民タルノ自覺、感激ニ燃ユ總力ヲ
擧ケテ皇運扶翼ノ臣道實踐體制ヲ確立スルニアルノテアツテ、
國民組織ト言フハ精神のニハ國民各個ノ心帶ヘカ或ハ其ノ姿勢
カ國家ノ大方向ニ統合結束サレルコトテアリ、之ヲ經濟的ニ見
レハ今迄ノ營利萬能ノ自由主義的ナ經營ヲ純粹ナ職能奉公本位

ニ換言スレハ公益本位ニ建直スコトテアル。

而シテ此ノ國民組織ハ大體ニ於テ職能的の方面ト地域的の方面トニ分ケル事カ出來ルノテアル。

職能的の方面ハ更ニ之ヲ經濟的の方面ト文化的の方面トニ分チテ考ヘルコトカ出來ル。

經濟的ニハ鑛工業商業農業漁業等夫々ノ分野ヲ經營ノ大小ト特質ニ應シテ個々ノ經營ト或ハ團體ノ公的の性格ヲ確立スル様ニ之ヲ公益本位ノ原則ノ下ニ組織換ヘスルコトカ必要ナノテアル。

文化的の方面モ亦國民ノ文化生活ヲ個人ノ娛樂ヤ營利ノ爲ニ供スルコトヲ目的トセス、例ヘハ學藝技術音樂或ハ教育出版等ノ各種ノ意識ニ應シ夫々國家ノ進展ト國民文化ノ昂揚ト云フ原則ノ下ニ組織換ヘスルノテアル。

又地域的ニハ現在アルトコロノ行政組織ノ外ニ下部組織トシテ部落常會トカ隣組トカ隣保班トカラ組織シ、之ヲ從來ノヤウニ自然ノ發展ニ任セナイテソレカ地域的ニ見テ國家ノ單位細胞

テアリ、自然生長的ナ國家ノ向ツテ居ル方向ト相貌トカ此ノ單位細胞ニ判然ト表明サレルト云フ自覺ノ下ニ新シイ激勵タル協同結束ノ精神ヲ以テ之ヲ指導スル組織ヲ確立スルコトカ必要テアル。

而シテ此ノ職能的ノ構成ト地域的ノ構成ト互ニ喰ヒ違ハス矛盾衝突ヲ起サヌ様常ニ國家目標ノ一點ニ向ツテ統合サレネハナラヌノテアツテ、例ヘハ一ツノ織物ニ付テ云ヘハ職能的國民組織カ織物ノ縦糸トスレハ地域的ナ國民組織ハ其ノ横糸ノ關係ニナルカ如キテアル。之カ相統合サレテ一ツノ立派ナ布地カ出來上ルト言フ關係ニナルコトカ必要ナノテアル。

國民組織ヲ作ルト云フノハ先刻云ツタ様ナ國家總力ノ發揮カ出來ル様ナ狀態ニ國民カ組織サレルト云フコトテアルカラ組織ヲ作ルトカ目的テナク一ノ方法手段テアル、新體制トヘソウ云フ姿勢ト心構ヘニナルト言フコトテアル。

ソレニハ先ツ必要ナノハ心構ヘノ新體制テアル、ソマリ精神のナ自覺準備カ國民組織運動ノ前提トナルノテアル。

新シイ體制ヲ作ル爲ニハ其ノ中味テアル新ラシイ人間、新シイ魂ヲ作り上げネハナラヌ。魂ト精神ヲ入レ換ヘタ人間ニ依ツテ日本ノ新シイ姿カ出來ル、其處ニ新體制ノ眞面目カ發揮サレルノテアル。

第二款 大政翼贊會

第一項 大政翼贊會ノ意義
大政翼贊會ハ大政翼贊運動ノ目標テアル國民組織ヲ作り上げル爲國民運動ノ中心トナリ之ヲ推進スル機關テアル。而シテ國民組織トハ前述セル如ク國民ノ魂ト精神トヲ入レ換ヘテ國家ノ大方向ニ統合結束セシメ、公益本位ニ建直スト云ハ内容ヲ持ツモノテアルカラ容易ニ出來ルモノテハナイ。之ニハ國民ノ中カラ燃エ上ルーツノ國民運動カ是非共必要トナツテ來ル、日本國土ニ生ヲ享ケタモノハ總テ此ノ運動ニ參畫シテ此ノ國民組織ヲ完成スル爲ノ努力ヲ共ニシナケレハナラヌ、之カ所謂大政翼贊運動ナノテアル。併シ乍ラ之等ノ運動ヲ自然ノ動キニ放任シテ置クト時ニ脱線シタリ、又ハ方向ヲ誤ル虞カナイテ

大政翼贊會ノ意義

モナイ。

其處テ國民運動ノ中心トナリ之ヲ推進シテ行ク機關トシテ大政翼贊會カ生レタノテアル。故ニ翼贊會ハ翼贊運動ノ動力テアリ又油ナノテアル。

第二項 大政翼贊會組織ノ概要

大政翼贊會ハ總裁之ヲ統率ス。總裁ハ内閣總理大臣ノ職ニ在ルモノ之ニ當リ衆議總裁ノ權限ヲ有シ、下ニ強力ナ總務會ト事務局並國民協力會議ヲ隨ヘ事務局ハ更ニ下級機關トシテ總務、實踐、調査、興亞、練成ノ五局及外ニ統制委員會ヲ有シ夫々分擔ニ應シテ政經文化萬般ノ團體統制乃至指導ニ當ツテ居ル。此ノ翼贊會ノ地方組織トシテハ道府縣ノ支部都市又ハ町村ノ支部ヲ設ケ一元的ニ上意下達ノ速カナルヲ期シテキル。又翼贊會事務局ト其ノ地方支部ノ事務局ヲ結ノ系列ト相並シテ同組織ノ中ニ協力會議カアル。

此ノ協力會議モ事務局ト同様ニ翼贊會本部ノ中ニ全國的ニ協

大政翼贊會組織ノ概要

力會議カアルト共ニ地方的支部ノ中ニモ夫々道府縣ノ協力會議市町村ノ協力會議カ設置サレ、中央協力會議ハ中央本部ノ中ニアツテ事務局ト有機的ニ連繫シ道府縣協力會議ハ道府縣支部ノ中ニアツテ支部事務局ト有機的ニ連繫シテキル。協力會議ノ地方的ナ最下位ノ機關ハ都會ニアツテハ町内會、農村ニアツテハ部落常會テアル、其ノマタ下ノ一番小サイ單位ハ都會テハ隣組農村テハ隣保班トナツテキル。斯クシテ中央本部——地方支部ノ事務局ヲ通シタ系列ハ政治指導ノ構造テ中央協力會議——隣組及隣保班ノ系列ハ下意上達ノ爲ノ諮問機關トシテ夫々兩者相俟テ「上カラ」ト「下カラ」ノ統合ヲ圖ル仕組ニナツテキル。

1 翼贊會ニハ總裁ノ外副總裁一及顧問並總務若干名（總務中若干名ヲ常務トスル）ヲ置ク。
副總裁ハ總裁ヲ輔佐シ總裁事故アルトキハ其ノ職務ヲ代理シ顧問ハ總裁ノ諮問ニ應ヘ總務ハ總裁ヲ輔ケ本會ノ運営ニ參畫スルモノテアル。
又事務局ヲ統率スルノ事務局總長テアツテ各局ニハ夫々局長ヲ置キ所定ノ仕事

ヲナシテキル。
中央協力會議ハ全國達議ノ士ヨリ選定シタル議員ヲ以テ之ヲ構成シ議長一名ヲ置ク、其他道府縣都市町村ニハ翼贊會ノ支部ヲ置キ協力會議ヲ附與置セラレテキル。

尚翼贊會役員ハ中央支部ヲ通シ總裁ヲ指名ニ依ルモノトス。
2 事務局ノ下級機關トシテ存在スル統制委員會ハ左記八國民運動團體ノ統制運営並今後ノ國民運動團體統合等ニ關スル事項ヲ審議スルモノトス。

- 大日本翼贊壯年團
- 大日本與亞同盟
- 大日本產業報國會
- 農業報國會聯盟
- 商業報國會
- 日本海運報國會
- 大日本青少年團
- 大日本婦人會

第三項 大政翼贊會ト議會及軍トノ關係
議會トノ關係

大政翼贊會ハ帝國憲法ノ範圍内ノ組織テアリ、翼贊運動ハ又
憲法ノ範圍内ノ運動テアツテ議會ノ權限ニ付テハ何等ノ變更
ヲ生スルモノテハナイ。
併シ議會ノ運用ハ新體制下ニアツテハ大キナ變化ヲ遂ケ從來
ノヤウニ政府ト對立抗爭ヲ念トシタ議會テハナク、政黨ハ解
消シ議會制度ハ最早政黨ニ依ツテハ運営セラレナイ時代ニ變
フテ來タノデアル。故キ政黨ニ變ツテ議會ニ於ケル議員ノ行
動ヲ規律スルモノハ翼贊會又ハ翼贊政治會テアル。而シテ翼
贊會ハ政府ノ議會提案事項ヲ良ク諒解シ、政府ハ又翼贊會ヨ
リ國民ノ輿論ヲヨク諒解シ、其處ニ圓滿ナル政治力運営サレ
ルノデアル。

翼贊會ト議會トノ一體化ハ地方組織ニテモ行ハレル。
中央本部ノ下ニアル道府縣支部及都市支部ハ政府ノ各省ノ下ニ在ル道府縣ト緊

密ニ結合シ、町村支部ハ町村役場ト連絡ヲスルソウシテ地方行政ニ於テモ官公
ノ機構ト國民組織ハ抱合フテ行コウトシテキルノデアル。

2. 軍トノ關係

新體制ハ萬民大政翼贊ノ旨道ヲ全ウシ且不拔ノ國防國家體制
ノ確立ヲ目標トシアルヲ以テ軍ハモトヨリ積極的ニ全權ノ協
力ヲナシ、特ニ精神的一體化ノ熱意ヲ以テ之ヲ完成ノ促進ニ
特與セシトスルモノデアル。蓋シ軍人ハ、勲勳、勳勳ニ御示
シアル如ク其ノ現役ニ在ルト在郷ナルトヲ問ハス齊シク各々
其ノ立場ニ於テ各自ノ分ヲ守リ、一貫忠誠報國ノ赤誠ヲ發ス
ヘキヲ實踐シテアリ。之レ盡テ本體制確立ノ要諦ナリト信セテ
レルヲヲテザル。
然レ共翼贊會ハ其ノ奉贊ニ於テ高度ノ政治性ヲ有シ勢力ナル
政治活動ヲ使命トシアルニ鑑ミ、之ニ對シ直接一般現役軍人
ヲ組織ニ加入セシムルハ我カ建國ノ本義ニ照シ之ヲ認ムルコ
トカ出來ヌノデアル。但シ其ノ職務ニ於テ政治ニ參與シ得ヘ

キ大臣、次官、軍務局長等特定ノモノニ限り翼賛運動ニ協力
ノ爲例令ハ顧問參與等ノ資格ニ於テ之ニ加入スルハ適當ナリ
ト考ヘラレテキル。

在郷軍人會ト翼賛會トノ關係ハ個々ノ在郷軍人ハ一般國民タル以上特ニ其ノ實
質ニ鑑ミ、本國民運動ノ熱烈優秀ナル實踐員即チ本組織體ノ核心的構成分子ト
シテ參加シ得ルハ勿論寧ロ進テ之ニ加入シ、其ノ健全ナル發達ヲ助成スヘキモ
ノナルヘシト雖モ、在郷軍人會ハ大正三年十一月三日在郷軍人ニ、及昭和三年
十一月三日在郷軍人會ニ賜リタル勅語ノ御諭シアル如ク又勅令ヲ以テ規定
セラレアル帝國在郷軍人會令第一條ノ目的及第五條ニ「帝國在郷軍人會ハ政治
ニ干與スルコトヲ得ス」ト明示セラレアルニ照シ、軍人會全體ヲ翼賛運動ノ組
織内ニ編入スルコトハ適當テハナイ。

翼賛政治

第三款 翼賛政治會

第一項 翼賛政治會組織ノ經緯及其ノ内容

大東亞戰爭ノ赫々タル戰果ニ應ヘ内ニ翼賛議會ヲ確立シ、舉
國的政治力ヲ結集シヤウトノ熾烈ナル與望ハ昭和十七年四月ニ

實施セラレタ。總選舉ニ於ケル一億國民ノ熱意ニ依テ表明サレ
同年五月二十日遂ニ翼賛政治會カ結成セラレタノデアルカ、此
ノ翼賛政治會ハ大政翼賛會ト共ニ政府ニ協力シ、内翼賛體制ヲ
確立セシメ、皇威ヲ中外ニ發揚シ、大東亞共榮國建設ノ方途ヲ
促進セシメ、世界新秩序ノ樹立ニ對スル我カ國ノ指導性ノ確立
ヲ挺身スルモノデアツテ、此ノ翼賛政治會ノ使命、性格位ニ違
營方針等ヲ細説セハ能ハズ如クテアル。

第一 翼賛政治會ハ帝國内翼賛政治組織體テアル
即チ會ノ使命トスル所ハ一億國民カ渾然一體トナリ帝國ノ大
理想ヲ世界ニ發揚シ、皇國ノ翼賛實現ノ爲ニ翼賛ノ大道ヲ全
ウセンコトヲ期スルニアリ。

之カ爲國民ノ總力ヲ發集シ、之ヲ政治力ニ動員スル仕組ミヲ
必要トシテ此ノ政治組織體タル翼賛政治會カ生レタノデアル。
ソレハ今迄アツタ政黨ヤ歐米諸國ニミル所謂政權等ヒノ政治
組織ヲモナケレハ又政黨ノ對立抗爭ヲ事トスルト云ツタモノ

テモナク、其他一國一黨ノヤウナ一方的獨裁政治ヲ實現シヤ
ウト云フモノテモナク、他國ニ比類ヲ見ナイ我カ國獨得ノ政
治團體テアル。

第二 翼贊政治會ハ翼贊議會ノ確立ヲ期スルニアリ
我カ帝國議會ハ抑々大政翼贊ノ府テアル。帝國議會ハ臣民翼贊
質ニ本分ニ從ツテ國民カ日頃考ヘテキルコト、或ハ國家ノ爲
斯クアルヘキテアルト希望シテキルコトヲ政府ニ傳ヘ相協力シ
シ、表裏一體トナツテ大政ヲ翼贊シ、公議公論ノ府タルノ實
ヲ舉クル所テアルカラ、斯カル翼贊議會本來ノ面目ヲ發揮スル爲
爲ニモ會ノ運営ニ付テハ新ナル工夫構想ヲ要スルト共ニ同會
ノ責任モ重且大テアラネハナラヌ。

第三 大政翼贊會トハ特別ノ考慮ヲ拂ハネハナラヌ
抑々政治翼贊ノ大業ヲ完成スル爲ニハ國民カ正シイ政治翼贊
ノ本義ヲ辨ヘ、夫々日常ニ於テ各職域ヲ通シ政治翼贊ノ爲ニ
組織的ヲ協力ヲ爲スコトカ最モ必要テアル。故ニ翼贊政治會

翼贊政治
會ノ略稱

ハ大政翼贊會ト緊密ニ關係ヲ保チ自己ノ政治ノ實踐ト大政翼
贊會ノ國民運動推進ノ實踐トヲ渾然一體ナラシメ、其ノ基礎
ノ上ニ翼贊政治體制ヲ確立セホハナラヌ。

之カ爲大政翼贊會ニ付テハ萬民翼贊臣道實踐ノ國民運動ノ推
進中核體トシテ其ノ活動ノ分野ヲ明ニシ、共ニ其ノ機能ヲ刷
新シ創立ノ理想達成ニ邁進セホハナラヌ。
一 翼贊會ノ組織ハ總裁ノ下ニ顧問政務調查會總務會其ノ他四個ノ下級機關ア
リ、總務會ノ下ニハ更ニ事務局參與等ヲ置キ夫々分擔任務ニ基キ活動シツツ
アル。

二 政府、翼贊會及翼贊會ハ三者一體ノ關係ニ在リ、即チ首相及各閣僚ハ翼贊
會ノ總裁（副總裁）顧問等ニ委任シアルノ外各省次官ハ翼贊會ノ參事ニ、又
各省委員ハ翼贊會ノ政務調査委員ニ、翼贊會總務ハ翼贊會總務ニ翼贊會總裁
ハ翼贊會顧問ニ就任シアリ。

大政翼贊運動規約

經濟新體

第二節 經濟新體制

第一款 經濟新體制ノ必要性

世界的ナ戰國時代ノ現在ニ於テ我カ日本ハ自己ノ運命ヲ暗シ
テ高度ノ國防國家體制ヲ編成シ、大專重新秩序ヲ建設シ國民生
活ヲ確保セントスルニハ國內ニ於ケル總テノ經濟活動カ一元の
ニ國家意志ニ結ビ付キ之ニ統合セラレ、一貫的ナ計畫ノ下ニ水
モ洩サヌ活動ヲ營ミ、限ラレタ資金、資材、勞力ヲ國家的ナ立
場カラ運用シテ最大ノ效果ヲ擧ケ得ル仕組カ必要テアル。
ソレニハ經濟活動カ從來ノヤウニ個々ノ資本家ノ自由ニ放任
サレ利潤追求ヲ以テ一切ノ經濟活動ノ主目的トサレテ來タコト
ハ最早許サルヘキテハナイ。之カ爲支那事變發生以來特ニ統制
經濟ト言フコトカ喧シク叫ハレ、之ニ依リ現下ノ國難ヲ克服ス
ル爲難局ニ處シ不自由ニ堪ヘ得ル如ク新體制ノ機構ヲ逐次整備
セラレフワアルノテアル

第二款 統制經濟ノ必要

第一項 統制經濟ノ必要
本勞力又ハ利益ヲ私有シ之ヲ各自カ最モ善膏ト爲ヘル方法ニ於
テ管轄上ノ目的ニ使用處分シ、而モ其ノ管轄目的ニ使用處分ス
ルニ付テハ公ノ秩序ニ長サル風俗ニ反セサル限り自由ニ行動ス
ルコトカ出來ル。斯クシテ國民各自ハ管轄ノ要求ニ於テ自由ニ
管ノ關係ニ立ツト云フノカ所謂自由經濟ノ義テアルカ、之ト長
シテ國家カ國民ノ管轄上ノ自由ヲ制限シ、一定ノ計畫ノ下ニ又
其ノ計畫ヲ實行スル爲メ一ノ機構ヲ整備シ、國家權力ノ下ニ統制
シテ行フ所ノ經濟カ即チ統制經濟ト言フノテアル。
第一 統制經濟ノ目標
我カ國ニ於ケル統制經濟ノ目標ハ大東亞戰爭完遂ノ爲メ一ハ優
劣ナル軍需品ヲ豐富ニ且地産ニ供給スルコト及一ハ通貨膨脹

ノ惡性化ヲ警防スルヲ以テ絶對的ノ目標トナシテキル
 由來戰爭ハ物資ノ消耗戰デアルト云ハレテキル如ク戰爭ヲ遂
 行スル爲ニハ常ニ莫大ナル物資ヲ必要トシ、戰爭カ長期化ス
 ルニ從フテ物資ノ消耗ハ甚シクナルヲ以テ物資需要ノ増大モ
 亦當然ノ勢デアル故ニ此ノ需要ニ應スル爲國內資材ニシテ不
 急事業ニ用ヒラレ、又ハ不急品ノ製造ニ用ヒラレタリスル
 トヲ制限乃至禁止シ、時局緊急方面ニ專テ用ヒラレルヤウニ
 スルト共ニ、一面需要ノ増大ハ物價ノ暴騰ヲ來シ物價暴騰ハ
 更ニ國費ノ増大ヲ必要トスル等兩者ノ循環性ニ依リ遂ニ通貨
 膨脹ノ惡性化トナリ、國民經濟ヲ擾亂スルニ至ルノデアルカ
 ラ此處ニ物資ノ供給關係ヲ調整シ、物價ノ暴騰ヲ抑制シ以テ
 惡性通貨膨脹ヲ警防スルノ必要カアルノデアアル。

第三 統制經濟機構ノ概要

前述ノ如ク統制經濟ノ目標ハ物資ノ供給關係ヲ調整シ、物價
 ノ暴騰ヲ抑制スルニ在ルノデアアルカ之カ目的ヲ達スル爲ニハ

統制經濟
 要綱

一ハ國內ニ於ケル生産力ヲ増大シテ需要ニ對スル供給ヲ圖濟
 ニスルト共ニ、一面人爲的ニ物價暴騰ヲ抑制スル手段ヲ講ス
 ル必要カアルノデアアル。

茲ニ於テ統制經濟ト物價問題ヲ中心トシ一ハ生産力擴充ト一
 ハ物價統制ト二大要項ノ實行ニヨリ初メテ其ノ全キヲ期シ得
 ルノデアアル。

一 生産力擴充

國費ノ膨脹ニ對シ物價ノ暴騰ヲ抑制スル爲ニハ政府ノ購買
 力ノ對象トナル物資ノ供給増加ヲ圖ルコトカ根本策ヲナケ
 レハナラス。

而シテ政府購買力ノ對象トナル物資ハ主トシテ軍需品デア
 ヲテ之ハ主ニ重工業品デアアル。

故ニ政府購買力ニ對應スル物資ノ供給増加ヲ圖ルニハ先ツ
 重工業生産ノ擴充カ先決問題トナツテキルノデアツテ生産
 力擴充ノ爲ニハ云フ迄モナク資産(資本)ト資材ト勞働ト

カ必要テアル。

其處テ生産力擴充ヲ目指ス全體の統制ハ具體的ニハ資金統制、資材統制、勞働統制トシテ現ハレルコトニナル譯テアル。

1 資金ノ統制（資金蓄積—消費節約）

生産力擴充資金ハ三ツノ方法ヲ以テ供給サレテキル、即チ一ハ日本銀行カ紙幣發行權ニヨリ資金ヲ造出シ、之ヲ他ノ銀行ヲ通シテ專業會社ニ貸付ケル方法テアリ、他ノ一ハ民間ニ於テ資金カ蓄積サレ之カ各種ノ金融機關ヲ通シテ貸付ラレル方法テアル。

併シ乍ラ日本銀行ノ紙幣造出ハ無制限ニ出來ルモノテハナイノテ、結局專業會社ニ對スル生産力擴充用資金ハ主トシテ民間ノ蓄積ニ俟ツ外ハナイノテアル。而シテ民間ニ於ケル蓄積ハ專業會社ノ收益及國民ノ所得カ一定テアレハ消費ノ節約ニ依テノミ可能テアル。

斯クシテ生産力擴充ノ爲ニハ消費節約カ一ノ前提トナルハ國内ニ於ケル至極重要ナル事トシテ、

ノテアル。

而シテ消費節約ノ方法ヲ大別スレハ一ハ所得即チ購買力ノ方面ニハ物資ノ方面ニ着目スルコトカ出來ル。

前者ハ保險、貯金等ニヨツテ所得ヲ蓄積スル方法テアリ、後者ハ物資ノ使用制限乃至禁止ニ依リ目的ヲ達セントスルモノテアツテ現在ニ於ケル物資ノ配給等ハ即チ之カ手段ノ一テアル。

2 資材ノ統制

資材ノ統制ハ資金ノ統制ト同様資材カ不急專業ニ用ヒラレタリ、又不急品ノ製造ニ用ヒラレタリヌルコトヲ制限乃至禁止スルト共ニ之カ時局緊急專業ニ專ラ用ヒラレル様配給ヲ統制スルコトヲ眼目トシテ居ルノテアル。特ニ現在ニ於テハ資材ノ不足カ漸ク顯著トナツテ來テ居ルノ事カ統制モ亦重視セホハナラスノテアル。

勞働ノ統制

支那學變後我國ニ於ケル勞働力ハ俄ニ不足ヲ告ケテ來タ
夫レハ幾萬ト云フ青壯年カ戰場ニ出動シテ居ルノト軍需
充足ノ爲多量ノ勞働力ヲ軍需工場ニ吸收セラレタ結果テ
アル。

勞働不足ハ債工業ニ於テモ將又農漁村ニ於テモ皆同様チ
アツテ。之ヲ放置スレハ勞働ノ需要カ多イニ不測、勞働
ノ供給カ不足シテ居ルノ勢ヒテ勞働力ノ爭奪カ起ラサル
ヲ恐テイソテアル。新カルコトハ全體カラ見レハ勞働力
ノ浪費テモアリ、又勞働ノ爭奪ハ結局勞賃ノ騰貴トナリ
生産費ヲ高メ物價騰貴ノ原因トナルモノテアルカラ勞働
者ノ雇傭ヲ統制シ其ノ爭奪ヲ防止セネハナラヌノテアル

ニ物價統制

一 物價統制ノ必要

以上述ヘタ様ニ一方テハ生産力擴充ヲ行ヒ供給ヲ潤澤ニ
スルコトニ努メルノテアルカ、商品供給カ購買力ノ増加
スルコトニ努メルノテアルカ、商品供給カ購買力ノ増加

ニ匹敵スルコトハ容易テハチイ、從テ需要供給ノ關係カ
ラ云ツテモ物價ハ騰貴ノ傾向ヲ帶ヒテ來ルコトハ又已ム
ヲ得ナイノテアル。併シ物價ノ騰貴殊ニ其ノ暴騰ハ今日
ノ時局ニ於テハ絶對ニ放任シ難イコトテアブテ、物價カ
騰貴スレハ政府ノ事業ノ遂行 所謂豫算ノ圓滑ナル使用
カ非常ニ困難ユナツテ來ルト共ニ一面國民ノ生活カ脅威
セラレ、國民ニ貯蓄力カ無クナリ、資金ノ蓄積カ不可能
トナリ、資金蓄積ノ不可能ハ又生産力擴充方面ニ大ナル
悪影響ヲ及ホスコトニナルノテアル。
其他物價ノ騰貴ハ輸出貿易ヲ阻害シ輸出業者ヲ危殆ニ瀕
セシム

2 物價統制ノ種類

現在我國ニ於ケル物價ノ統制ハ大體二ツノ方法ヲ以テ行
ハレテ居ル。第一ノ方法ハ物價ノ抑制テアツテ、第二ノ
方法ハ物價ノ形成テアル前者ハ應急的處置テアリ後者ハ

恒久的處置テアル。

(1) 物價ノ抑制

物價ノ抑制ハ暴利取締又ハ最高價格制度ノ運用並物品販賣價格ノ取締及物價ノ全面的引上禁止等ノ方法ヲ以テ行ハレテ居ル。

暴利取締ハ暴利ヲ得ル目的ヲ以テ買溜メ賣惜シミヲスル行爲ヲ取締ルモノテアルカ、此ノ方法ハ價格抑制策トシテハ最も初步的ナモノテ其ノ效果モ必スシモ大トハ云ヘヌ。殊ニ何カ暴利價格テアルカノ標準カ明テナイ爲取締上困難ナ點テアツタノテ現在ニ於テハ主要商品ニ付最高價格ヲ定メ、夫レ以上ノ價格ニ於テ取引ヲ禁止シ之カ徹底ヲ圖ル爲警察權ヲ以テ其ノ履行ヲ監察取締ヲ爲シテ居ルノテアル。

○物價抑制ノ經濟界ニ及ボス影響

物價ノ抑制ハ企業家ノ利潤ヲ少カラシムルモノテアルカラ企業家ハ

之ヲ避クル爲色々ノ手段ヲ講スル様ニナル。即チ通常行ハレルノハ生産費ノ切下テアルカ、今日ノ狀況ニ於テ原料費ヲ切下ケルコトモ勞働費ノ切下ケモ不可能テアル爲一般ニ用ヒラレル手段ハ同額ノ原料費ヤ勞働費ヲ以テヨリ多數ノ商品ヲ生産スルコトテアル。

之ハ即チ粗製濫造ヲ意味スルモノテ要スルニ價格ノ抑制ハ商品ノ粗製濫造ヲ招クト云フコトニナルノテアツテ、又一面生産ノ中止又ハ増産ヲ差控ヘルト云フコトモ生シ、結局生産力擴充カ停頓スルト云フカ如キ結果モ生スルコトニナル。

(2) 物價ノ形式

物價形式ノ方法ニヨル物價統制ト云フノハ物價抑制力ヲ生スル好マシクナイ經濟界ノ波紋ヲ取除ク爲ニ生産費ヲ抑制スルコトニ依リ物價ヲ抑制スルコトヲ主眼トスルモノテアル。

今日ノ一般狀態テハ生産費ヲ切下ケルト云フコトハ個々ノ企業家ノ力ノ及フ處テハナイカラ國家ノ力ヲ以テ

之ヲ切下ケ之ニ依リ物價ノ騰貴ヲ防壓シ様トスルメテアル。

之カ爲政府テハ昭和十五年四月物價統制大綱ヲ定メ之ニ依リ賃金ヲ統制シ次ニ家賃及地代等ノ抑制策カトラレ其他通貨又ハ利潤ノ統制ヲモ實施セラレテ居ル。

(參照)

- 1 國家總動員法 昭一三四、一 法律五五號
- 2 國民徵用令 昭一四七、八 勅令四五一號
- 3 學校卒業者使用制限令 昭一三八、二四 勅令五九九號
- 4 從業者雇入制限令 昭一四三、三一 勅令一二六號
- 5 賃金統制令 昭一四三、三一 勅令一二八號
- 6 工場就業時間制限令 昭一四三、三一 勅令一二七號
- 7 臨時資金調整法 昭一二九、一〇 法律八六號
- 8 暴利ヲ得ルヲ目的トスル賣買取締ニ關スル件 昭一二八、三 商工省令二〇號
- 9 物品販賣價格取締規則 昭一三七、七 商工省令五六號

統後治安ニ關スル諸問題

第三節 統後治安ニ關スル諸問題

現下國內諸般ノ動向ハ大東亞戰爭ニ對スル感激ニ滿チ國民ノ士氣ハ彌々昂揚シ、國民ハ何レモ前途ノ光明ニ期待シ治安動向ハ一般ニ平靜順調ニ推移シツツアルカ、是レハ一ツニ武力戰ノ赫々タル戰果ニ懸ツテ居ルモノテアツテ、未タ以テ必勝不敗ノ國防國家體制カ既ニ出來之ヲ基底トスル所謂總力戰ノ各分野ニ於テ間然スル所ナシトハ斷言スルヲ得ナイ。

即表面極メテ好調ナル進展ノ反面戰時(軍事)負擔、犧牲部面、國民徵用問題等ヲ繞ル社會問題ノ胚胎各種取締並統制強化ニ伴フ反撥逃避及必然的國民生活ノ窮屈化ニ對スル不平不滿乃至不安増加等統後ノ治安問題ニ對シテハ嚴ニ注意警戒ヲ要スヘキ事象ハ渺クナイノテアツテ輕々ナル樂觀偷安ハ嚴ニ戒慎ヲ要スル所テアル。

今現下ニ於ケル治安上注意ヲ要スル諸問題ヲ舉ケレハ概ネ左ノ通テアル。

第一、各種選舉時ニ於ケル諸策動ニ就テ

一九八

政黨ハ解消シ翼賛政治官カ特成セラレ戰爭完遂ノ爲國內ニ於ケル政治體勢ハ一應整備セラレタカ當政黨人中ニハ未タ以テ舊般ヲ脱シ得ス各種選舉ハ舊般ヲ利用シ所謂新體制ノ目的ニ反スル策動等ナシトセス

又選舉運動其他ニ於テ目己ノ立場ヲ有利ナラシムル爲軍ヲ利用セントスルカ如キ諸策動モ豫想セラレ從テ斯カル徒黨ノ此ノ種策動ハ軍民離隔ノ因ヲ爲シ國民ノ志氣及結束上ニ一大障害ヲ與フル虞アリ

第二、各種取締並禁止制限或ハ統制強化ニ伴フ反撥逃避不平不滿等ニ對スル諸問題

支那事變以來時局ノ要求ニ基キ各種取締法令ハ逐次強化セラレ特ニ國家總動員法ノ全面的發動國防保安法言論出版集會結社等臨時取締法及戰時犯罪處罰ノ懲例ニ關スル法律等ノ施行ハ國民生活ノ自由ニ對シ多大ノ禁止制限ヲ加フル様ニナツタ

ノテ之ニ對スル反撥不平不滿等其ノ動向ハ治安上相當注意ヲ要スルモノト思ハネハナラヌ。

第三、戰時（軍事）負擔ニ對スル犧牲部面徵用工員等ノ動向ニ就テ

大東亞戰爭ノ開始ニ伴ヒ防空要塞戰備沿岸警備等ノ下令或ハ車馬ノ徵發食糧其他軍需ノ急激多量ノ調達等ニ依リ國民ノ大部ニ軍事負擔ニ對スル相當ノ犧牲部面カ生シテ居リ之ハ固ヨリ戰爭遂行上必須ノ處置テアルケレ共過重ノ犧牲ハ國民生活ヲ脅威シ不平不滿ヲ生シ延テハ反戰反軍思想ヲ醸成スルニ至ル虞アリ又徵用工員ハ今ヤ其ノ數百萬ヲ突破シ今後益々増加ノ趨勢ニ在リテ之等工員ノ大部ハ國家總力戰ノ爲ニハ當然ノ歸結テアルトナシ却テ其ノ榮譽ヲ感シ欣然應徵シアルノ狀況ニアルモ作業廳又ハ工場等ニ於ケル取扱ヒニシテ適切ヲ缺カシカ工場對工員間ニ大ナル溝ヲ生スル虞アリ。

第四、國民生活問題ト之ニ伴フ治安動向ニ就テ

一九九

物資需給ノ窮屈化國民生活ノ逼迫困難等ハ大東亞戰爭遂行上必然ノ結果デアツテ今後益々生活ノ窮屈化ヲ覺悟セホナラヌ現況ニ在ルニ不拘國民中ニハ勸モスルト目前ノ困難ニ眩惑セラレ不平不滿ヲ洩ラスモノ又抄シトシナイ。

特ニ大都市ニ於ケル米、魚、肉、野菜類等食糧物資配給ハ不圓滑瓦斯、電氣其他燃料ノ極度ノ節減及農村ニ於ケル壯青年ノ應召又ハ工員徵用等ニ依ル勞力不足其他都鄙ヲ連シテ行ハレアル國債消化ノ割當テ貯蓄ノ獎勵等何レモ國民生活ニトリ切實ナル問題トシテ一般ニ多大ノ關心ヲ集中セシメアリテ之等諸問題ノ永續化ハ直接間接ニ反戰又ハ厭戰思想ノ素因ヲ形成スルノ虞大ニシテ一面生活必需物資ノ闕取引ノ横行ト相俟テ國民生活上恐怖の現象ヲ招來スル虞カナイトハ言ヒ得ナイ

第五、軍人遺家族ノ諸問題ニ就テ

軍人遺家族ハ一般ニ銃後支援ニ感謝シ自肅自戒シアリテ未タ其ノ思想動向ニ顯著ナル動搖ヲ認メナイカ戰爭影響ノ深刻化

ニ伴フ必然的生活ノ窮屈化ハ遺家族ニモ及ヒ一部ニ於テハ銃後支援ノ恩賞戰傷病死者ノ境遇等ニ對シ不平不滿ヲ洩ラシ或ハ戰爭ヲ呪咀シテ早期和平ヲ希望スルカ如キ言動ニ出ツルモノ又ハ賜金扶助料ヲ繰リ紛争シ世上ノ指彈ヲ受クルモノ等逐次増加ノ傾向ニ在リテ警視ヲ要スル點決シテ抄シトシナイ。

之ニ對シ一般官民ノ支援ハ當局ノ指導ト施策トニ依リ形式的ニハ相當強化セラレテ居ルカ精神的方面ニ於テ遺家族ニ對スル取扱ハ漸次事務的官僚的傾向ヲ帶ヒ一面偏ナリトノ退嬰的觀念ヲ抱持スルモノ等アリテ遺家族ノ不滿言動ヲ誘發シテ居ルモノモアル外戰爭ノ長期化ト遺家族ノ激増並一部遺家族ニ對スル反感等ニ原因シ冷視的態度ヲ爲スモノ或ハ遺家族ノ態度ヲ批難シ優遇停止ヲ云々スル等其ノ熱意漸次低下ヲ思ハシムルモノカアヤ。

第六、勞働者農民等ノ紛争問題ニ就テ

勞働者、農民等紛争ハ大東亞戰爭前ニ比シ一般ニ増加ノ傾向

ニアリ。
而シテ現在迄ノ處勞動者農民ノ紛争ハ何レモ思想的背景ヲ認
メラレサルモ、工場内ニ於ケル落書及左翼前歴者ノ奮動等ヲ
徴スルニ左翼分子、及舊勞動農民組合分子ノ策動カ窺ハレル
ノテ此ノ種紛争ハ之等左翼分子ニ策動ノ機會ヲ與ヘ、又ハ之
ニ利用セララルル虞アリ。

第七、時局ニ對スル國民ノ動向査察

統後ノ治安問題ニ關シ注意スヘキ事項ニ付テハ右説明シタ所
テアルカ、之等諸問題ニ對スル國民ノ動向乃至左翼分子ノ策
動等ニ付テハ常ニ周密ナル査察ヲ遂ケ、以テ戦争完遂ノ爲難
害排除ニ努メネハナラヌ。特ニ戦争ノ長期化ニ因ル一般生活
ノ窮屈化及軍事負擔ノ増大、並敵ノ我本土空襲等ヲ豫想スル
トキ國民ノ思想ハ動搖シ反戰反軍又ハ厭戰思想抬頭シ、從テ
左翼分子ノ策動ニ縫隙ヲ與フルノ虞大ナルモノカアルノテア
ル故ニ憲兵ハ常ニ社會各層トノ接觸ヲ密ニシ、國民輿論ノ動

向竝左翼分子ノ策動等ニ注意シ、微細ナル事象ト雖モ苟クモ
時局ニ影響ヲ及ホスト認メラレタルモノハ之ヲ看過スルコト
ナク其ノ根本原因ヲ究明シ、對策ニ遺憾ナキ様査察ヲ嚴
ニセネハナラヌ。然レ共以上ノ査察ハ戰時下ノ安寧ヲ保持シ
舉國一體ノ體制ニ違カノ間隙ヲモ生セシメサルニ在ルノテア
ルカラ、徒ニ法令ノ末節ニ拘泥シ國民ノ不平不滿ヲ助長シ志
氣ヲ沈滞セシメ、又ハ官民離反ノ因ヲ爲スカ如キ事ナキ様嚴
ニ慎シマネハナラヌ。

第四章 高等警察服務

第一節 總 說

高等警察ノ服務ハ高等警察關係法令ヲ維持執行スルニ在ル。
即チ法令ノ要求ニ合致セシメ其ノ禁令ニ觸レシメナイヨウニス
ルコトテアル。而シテ其ノ法令ハ行政警察ノモノト異ル所ハナ
イカ、其ノ對象カ主トシテ社會運動、即チ思想、労働、農村等
社會情勢ノ推移ニ密接ナル關係ヲ有スルノミナラス、國際情勢

ニ影響スル處極メテ大ナルモカアルカラ常ニ國內及國際情勢ノ判斷ヲ適切ニシ、法令ヲ維持ヲ計リ、豫防警察ノ完璧ヲ期セナケレハナラヌ。
高等警察ニ關スル法令ハ取締法トシテ治安警察法、行政執行法、出版法、新聞紙法、刑罰法令トシテ刑法、治安維持法、不穩文書臨時取締法等カアル。又憲兵ノ服務ニ關シテハ憲兵高等警察服務規定カアルカ。之ハ主トシテ報告、通報ノ手段ヲ規定シテキルモノテアル。

第二節 思想警察服務

第一款 思想上ノ要注意人

思想上ノ要注意人ノ意義

第一 思想上ノ要注意人ノ意義
個人ノ思想行動、不穩過激ニ互リ治安ヲ害スル虞アリテ高等警察上特ニ觀察ヲ要スト認定シタルモノヲ特別要觀察人トシ（昭一〇・五・一五内務省訓第五六九號第一條）特別ノ取扱ヲ爲シ、又現役軍人在郷軍人（歸休兵、豫備役、補充兵役ノ

モノ及退役ノ將校、准士官）軍屬、軍工員及壯丁（甲種及乙種決定者）中憲兵隊員於テ名長ニ編入シタルモノヲ軍要注意人ト稱スル（内規第七條）

種別 第二種

内務省訓令ニヨル特別要觀察人ハ次ノ如ク區分セラルル

- イ、共產主義特別要觀察人（略稱特要共又ハ共）
- 共産主義思想ヲ抱持シ治安維持法ニ違反スル行爲ヲ爲ス虞アル者
- ロ、社會主義特別要觀察人（略稱特要社又ハ社）
- 社會主義、社會民主主義思想ヲ抱持シ勞働爭議、小作爭議其ノ他ニ關シ治安ヲ紊ス行爲ヲ爲ス虞アル者
- ハ、無政府主義特別要觀察人（略稱特別無又ハ無）
- 無政府主義思想ヲ抱持シ治安ヲ紊ス行爲ヲ爲ス虞アル者
- ニ、他種特別要觀察人（略稱特要他又ハ他）
- 前記何レノ種別ニモ屬セザル者

ホ、朝鮮又ハ臺灣人中前項ノ各種主義若ハ民族主義ヲ奉スルモノハ勿論未ダ一定ノ主義ハ抱儀シテキナイケレトモ政事若ハ時事ニ關シ吾輩不慮遺憾ニシテ治安ヲ害スル虞アル者其ノ他警察上注意ヲ要スル者ニシテ特ニ視察ヲ要スト認メタルモノハ之ヲ特別要視察人ト爲シ左ノ如ク區別セラレル

- 朝鮮人特別要視察人（略稱、特長録又ハ朝鮮）
- 臺灣人特別要視察人（略稱、特要臺又ハ臺）

特別要視察人ハ凡テ甲號及乙號ニ分テ治安ヲ害スル虞特ニ著シイモノヲ甲號（略稱、例ハ特要共甲又ハ共甲）ト爲シ其ノ他ノモノヲ乙號（略稱、例ハ特要社乙又ハ社乙）トスル。（以上第一條）

尙特別要視察人又ハ重要注意人ハ何レモ管轄ヲ定メ名簿ヲ備付ケル

第二款 警察服務

第一、指導精神ノ檢討

（中略）

概説

資料ノ蒐

第二、闘争形態ノ觀察

高等警察務ニ關スル査察内偵ハ刑事々件ノ如ク法令違反ナルカ否カラ標準トシ之ニノミ重點ヲ置イテ實行スヘキモノテハナイ、更ニ一步ヲ進メテ當該行爲ヲ支配スル根本精神換言スレハ指導理論ニ迄遡ツテ研究セネハナラヌ即チ其ノ根底ヲ流ルル社會主義、共產主義、國家主義等ヲ理解スルコトナクシテ到底完全ナル査察内偵ハ望マレヌ。

併シ乍ラ指導精神ノ研究ト謂フモ之ヲ究極スル所學的研究ニ非スシテ査察内偵上必要ナル程度ニ於テ社會運動ノ根本ヲ爲ス主義並理論ヲ了解シ認識スレハ足ル。

之カ爲査察内偵ニ務ハルモノハ各種團體ノ主義綱領又ハ政策等ヲ充分研究スルハ勿論ノコト更ニ其ノ裏面ヲ流ルル思想ヲモ理解セネハナラヌ即チ彼等ノ動カントスル精神及方法ヲ併セ研究スルコトカ肝要テアル。

高等警察務ノ對象タル社會運動ハ一定ノ指導精神ヨリ創出シ

タル自己ノ擴大強化ヲ爲スノ宣傳運動ヲ爲スト同時ニ政治上社會上ノ侵略ヲ暴露シテ一般大衆ノ闘争心ヲ起サシム。而シテ此ノ闘争手段ハ闘争形態ノ典型的ナモノトシテ無産階級運動ノ行方所必ス附随スルモノデアリ。故ニ之等ニ對スル警察科偵査彼等ノ指導精神ヲ研究ノ外此ノ闘争形態ノ研究ヲクシテハ其ノ目的ヲ達成スルコトハ困難ナリ。例ヘハ共產主義運動ニ於ケル「プロレタリア」ハ彼等運動ノ先驅ヲ爲シ其ノ思想犯罪ノ本體究明ノ先驅ヲ爲スモノデアリ。テ夫レ自體カ團體ノ變革又ハ私有財產制度ノ否認ヲ爲スコトアリ又個別的ノ「プロレタリア」ハ犯罪トナラサルモ之ヲ一聯ノ行爲トシテ見ルトキハ暴力示威ヲ計畫セル場合アリ。更ニ政治的經濟的曝露等ニ付テモ夫レ自體又ハ系統組織立ツルトキニ對シテ其ノ主義思想ヲ宣傳ヲ目標トシテ行ハルルヲ發見スル場合アリ。

故ニ査察内偵ニ携ハルモノハ常ニ此種闘争形態ノ方法、系統ヲ良ク調査研究シ其ノ進行變遷ヲ明ニスルコトハ職責遂行上不可缺ノ要件デアリ。

第三、諸調査

高等警察務ニ關スル事件及犯罪ハ個人的ニ區別セラレサルノ特徴ヲ有ス從テ各種ノ行動ニハ一脈相通スルモノカアツテ各部分ノ行動ヲ分離シテ其ノ全貌ヲ把握スルコトハ不可能デアリ。故ニ各種ノ行動ヲ捉ヘ之ヲ綜合シテ其ノ根本主義、指導精神綱領政策等ノ由テ來ル所以又ハ實踐ノ方式等ヲ判明セシムルヲ要シ更ニ過去ヨリ現在ニ至ル縦ノ沿革及精密ナル横ノ關係ヲ調査スルニ非サレハ其ノ本體ヲ極ムルコトカ至難デアリ。而シテ調査ノ方法ヲ分類セハ人物、團體、思想等ノ各關係ニ基ク調査ト現況調査及沿革調査ノ三ト爲スコトカ出來ル。

(一) 人物關係ニ基ク調査

或ル特定ノ人物ノ主義思想、經歷、性質、素行團體トノ關係
 交友人物、職業關係資産、生活程度事件ト本人トノ關係
 及闘争經歷等ヲ各方面ヨリ調査シテ明ニナシ置クコトハ高
 等警察務上緊要ノコトデアル
 然レ共調査ニ當ツテハ獨斷的先入主ニ捉ハレテ公平ヲ失ス
 ルカ如キ或ハ誣々ニ他人ノ言ヲ信シ實地調査ヲ等閑ニ附ス
 ルカ如キコトチク常ニ其ノ人物ノ真相ヲ傳フル如ク著意ス
 ルヲ必要トス尙人物調査ニ付注意スヘキハ派閥系統ナリ特
 ニ各層ノ社會連繫ニ從事スルモノヲ問ニハ多少ニ不拘此ノ
 系統ヲ存シ相互間ニ排斥抵抗ヲ續クル事實存在スルヲ以テ
 調査上之等ノ派閥關係ヲ明ニスルコトモ亦肝要デアル

(二) 團體關係ニ基ク調査

高等警察務ニ關スル事件及犯罪ノ調査ニハ團體關係ヲ度外
 視スルコトハ不可能テアル團體ハ人ノ結合體テテアリ夫レ自
 身ノ指導精神ヲ有シ夫レハ必ずシモ標成各員ノ思想ト向
 二查テ内則ニハハチハ常ニ此種團體ノ指導精神ヲ察スルニ

一テハナイ

而シテ團體ノ調査ハ先ツ其ノ沿革、指導分子勢力分野、構
 成員ノ思想的分野、活動狀況資金關係指導精神運動方針、
 其他ニ付テ爲スヘキモノデアル

更ニ團體調査ニ付留意スヘキハ合法團體ノ中ニ非合法團體
 ノ存在スルコトアリ又右翼團體中ニ左翼分子ノ潜入スルコ
 トチアル尙特ニ資金關係ヲ明ニスルノ緊要ナルコト多シ即
 チ會員ノ離出ニ依ルカ寄附ニ基クカ或ハ同情者ノ提供ナリ
 ヤ等ヲ能ク承知スルコトハ觀察上重要ナルコトヲ忘レテハ
 ナラヌ

(三) 思想關係ニ基ク調査

人物團體ノ思想關係ヲ知ルコトモ亦調査上緊要デアル而シ
 テ之カ調査ハ總テ系統的ニ爲スヘキモノデアツテ即チ此ノ
 人物團體ヲ指導スル精神ハ社會主義カ共產主義カ或ハ此ノ
 人物ハ如何ナル思想的變遷ヲ經テ今日ノ主義ヲ信奉スルニ

至レルカ或ハ又其國情如何ナル運動方針ノモトニ如何ナル
 新組織ヲ有シ如何ニ闘争ヲ爲スヤ等ニ付テ系統的調査ヲ行
 フコトハ其ノ人物關係ヲ在野ヲ知ル上ニ於テ極メテ重要ナ
 アルニシテ、
 各種社會運動ノ一般的現狀ヲ知ルコトハ在野内偵上最重要
 事項テアル面シテ此ノ調査ハ之ヲ管内全體的及國際的ノ
 三條ニ分テ考察スルヲ要ス
 一管内ノ現況調査
 第一ニ其ノ管内ノ現況ヲ知ラヌハ大ラヌ之カ爲各種ノ情
 報ヲ收集シテ管内一般ノ現況ニ付テ判斷スヘキモノテ了
 ツテ單ニ容疑人物ノ氏名ヲ承知シ關係ノ數ヲ知ルノミヲ
 以テ足レリトサス其ノ動キヲ察知スルコトカ肝要テアル
 蓋シ管内ニ於ケル之等ノ動キヲ知ラスシテ高等警察務ヲ
 執行スルコト能ハサレハナリ

2 全國的現況調査

第二ハ全國的現況調査ナリ高等警察務ニ關スル事件及犯
 罪ニハ地域的區別ナシ故ニ單ニ其ノ管内ニ於ケル現況ヲ
 知ルノミニテハ不充分ニシテ必ズ全國的現況ヲ調査スル
 ノ必要ナルコト論ヲ俟タズ況ヤ今日管内ト全國トノ連絡
 關係密接ニシテ特ニ中央本部ノ勸告ハ直ニ地方支部ヲ左
 右スルノ傾向顯著ナル現況ニ於テ特ニ然リテアルニシテ
 國際的調査
 第三ハ國際的現況調査テアル諸外國ノ對支政策ハ直接我
 國ニ影響ヲ及ボス所大ニシテ又一モスコトハニ於ケルニ
 コミシテルン一ノ如キハ我國及滿支ノ共產主義運動ニ至
 大ノ關係アリ故ニ斯カル國際的現況ハ高等警察務ニ關ス
 ルモノ常ニ研究調査ヲ爲シ置カネハナラヌニシテ又
 (因沿革調査) 高等警察務ニ關スル事件及犯罪ハ一時的ニ勃發シテ直ニ消
 滅スルモノアリ

波スルモノテハナイ必ス過去ヨリ現在ニ至ル沿革ヲ有スルヲ以テ其ノ本體ヲ究明センカ爲ニハ先ツ過去ヲ知ルノ必要アリ蓋シ過去ヲ知ラスシテ現在ヲ知ルコト能ハサレハナリ故ニ先ツ社會運動ニ關係ヲ有スル團體、人物、主義、運動等ノ沿革ヲ明カニセハナラズ之即チ沿革調査テアル而シテ沿革調査モ亦現況調査ト同シク管内全國的ニ區分調査スルコトカ必要テアツテ就中全國的關係ヲ最モ重要トス又其ノ手段トシテ管内ニ於ケル沿革調査ハ主トシテ事件ノ記録ヲ整理スルヲ以テ足リ全國的又ハ國際的調査ハ新聞雜誌書籍其他ノ出版物ニ依ルヲ主トスヘシ尙沿革調査ハ警察内偵ノ基礎ナルヲ以テ成ルヘク詳細正確ニ爲サネハナラヌ

第四、軍事關係高等警察職務上ノ主要ナル著意左ノ如シ

(一)資料ノ收集
軍事關係高等警察上憲兵ノ職務ハ主トシテ外部ノ策動ヲ除去シテ軍人軍屬ノ思想ヲ健全ニ保持シ軍務ヲ擁護スルニ在

ル之カ爲ニハ常ニ關係官憲兵ニ他ノ警察官署ト密接ニ連絡シ社會一般ノ情勢ニ適應スル如ク努メ其ノ資料中ヨリ軍事關係事項ヲ抽出シテ之ヲ精査シ又ハ憲兵獨自ノ著眼ニ依リ視察内偵ヲ實施シテ資料ヲ收集セネハナラヌ犯罪非違事件等ニモ思想的觀察ヲ加ヘ又思想、勞働、政治等ノ諸情勢モ統計的ニ觀察シテ將來ニ對スル判斷ヲ的確ニスル著意ヲ必要トスル又軍隊内部ニ關シテハ常ニ軍隊幹部ト密接ナル連絡ヲ保チ思想對策ヲ實行スル上ニ於テハ常ニ協力シ綜合能力ノ發揚ニ必掛ケネハナラヌ例ヘハ軍要注意人ヲ速ニ發見スルカ如キハ之テアル。尙昭和四年頃ヨリ師團、鎮守府、警備府ニ思想委員會カ設置セラレ、其ノ組織内容ハ各種各様テアルカ、何レニセヨ憲兵ハ進ンテ之ニ十分ナル貢獻ヲ爲スヨウ心懸ケネハナラヌ。

軍要注意人ノ發見

(二)軍要注意人ノ發見

軍要注意人ノ發見ハ極マテ緊要テアル。之カ爲學校、職業

關係、交際人物、通信、贈賄物等ハ勿論服裝、態度等ノ微細ニ至ル迄能ク注意觀察シテ遺漏ノナイヨウニ努ムヘキデア
ル。又調査ノ爲他ノ警察官署ニ照會スル場合ニ於テハ單ニ
軍要注意人ノ有無ノミヲ照會セス、軍要注意人トシテノ推
定資料ヲ具體的ニ列舉シテ該當事實ノ有無ニ付回答ヲ求ム
ルコトガ必要テアル。

(三) 軍要注意人ノ行動觀察

在營要注意軍人ノ營外ニ於ケル行動觀察ノ手段トシテハ尾
行又ハ立寄先ニ就テ其ノ情況ヲ探知スルヲ例トスルケレト
モ尾行ハ相當困難テアルト共ニ之ノミヲ以テ真相ヲ知ルハ
不可能テアルカラ、寧ロ尾行等ニ依テ彼等行動ノ大要ヲ承
知シタル後ハ其ノ重要個所ニ諜者ヲ使用スル等ノ方法ヲ用
フル方カ效果的テアル。尙憲兵ハ成ルヘク早く要注意軍人
ノ容貌ヲ認識スルヲ必要トスル。之カ爲入營時ヲ利用スル
コト等ハ最モ適當テアル。

軍要注意
人ノ行動
觀察

軍當局者ヲ注意如何ニ依テハ彼等ト外部トノ連絡狀況乃至
外出時ノ行動ヲ察知シ得ル資料ヲ得ルコトハ困難テハナイ
然シナカラ近時營内ニハ注意ヲ要スヘキ手紙、眷片ノ類等
ヲ持込マス之等ハ專テ營外ニ於ケル秘密下宿等ニ保管シ或
ハ連絡スルノ傾向アルコトニ注意ヲ要スル。
在郷軍人及壯丁ノ軍要注意人ニ對スル行動觀察ハ兵營ト家
宅トノ相違アル外概ネ以上ノ要領ニ準スル。

(四) 軍人軍屬ノ言動觀察

軍人軍屬殊ニ戰時尋常ニ於ケル凱旋又ハ遣送軍人等ノ言動
ニシテ往々社會一般ニ不利ナル影響ヲ及ホスコトカアル。
之ニ對シテハ特ニ查察ヲ密ニシ取締ヲ嚴ニスヘキテアル。
而シテ聞込、流言ノ如キモ之ヲ放置スルコトナク其ノ出所
ヲ探知シテ根本的處置ヲ必要トスル。

(四) 皇軍利用ノ傾向ニ注意

皇軍利用
ノ傾向ニ
注意

右其團體又ハ政治團體等ニシテ或ハ軍ニ接近ヲ假想シテ策
 勵スルモノカ少クナイ。殊ニ所謂不穩文藝記事ノ如キハ其
 ノ弊害ハ甚メテ大テアル。而シテ之等團體中ニ於テモ皇軍
 本然ノ任務ヲ理解シ純眞ナル立場ニ於テ軍ヲ後援スルモノ
 モアルケレトモ其ノ多クハ自己ノ利益ノ爲ニ軍ヲ利用シ
 ヲウトスル疑アルヲ以テ常ニ其ノ眞意ヲ辨別判斷シ自己ノ
 利益ノ爲ニシヨウトスルカ如キモノニ對シテハ斷乎タル處
 置ヲ講ジ以テ軍人利益ヲ保持スヘキテアル。

新聞記事ニ注意

新聞ノ記事ハ犯罪捜査ノ端緒トナリ、其ノ他警察實務上利
 用スヘキ事項カ多イ。然ラテ新聞ハ遠ニ一覽スルノ習慣ヲ
 養フコトカ好マテアル。

新聞記事ニシテ法令ニ抵触スルモノハ法令上ツ體分ヲ爲ス
 コトカ出來ルケレトモ、苟モ一度新聞ニ發表セラレタル以
 上發表前ノ狀態ニ回復スルコトハ至難テアル。又取締上積

法的ニ記者ニ連絡シテ捏造ヲ豫防シ、或ハ當事者ノ德義心
 ニ訴ヘテ理解ヲ求ムル等機宜ノ處置ヲ講スルヲ要スル場合
 モアル。

軍事關係記事ハ其ノ出所ヲ内査スルヲ必要トスル場合カア
 ル。此ノ際注意スヘキハ新聞社ハ德義上或ハ政策上、其ノ
 出所ヲ絕對ニ秘密トスル不文律カ存スルコトテアル。憲兵
 ハ當ニ軍事上ノ利益保護ヲ念頭ニ置キ他ノ官廳及新聞社等
 ト緊密ナル連絡ヲ保ツテ其ノ目的達成ニ努メナケレハナラ
 ス。記事ニシテ事實無根、捏造又ハ曲筆ニ直リ軍事上不利
 益ナ場合ハ取消、訂正ヲ要求シ爲シ得レハ警告ヲ與ヘテ新
 聞社自ラ有效ナ正誤ノ處置ヲ執ラシムル等最善ノ方法ヲ講
 シナケレハナラヌ。

現役軍人ノ私生活、就中將校又ハ其ノ家庭ノ内情乃至秘密
 ニ屬スル行爲ニシテ事實未タ明カテナイモノニ對シテハ之
 ヲ内査ヲ要スル場合ニ於テモ極メテ慎重ナ手段ヲ必要トス

ル。即チ若シ内査ノ方法カ適當テナイ時ハ却テ噂ヲ大ニシ
爲ニ新聞記事トシテ掲載セラルルニ至ルコトカアルカラ注
意スヘキテアル。又軍隊ニ關スル新聞記事ノ内容事實ニ關
シ軍隊側ノ一片ノ通報又ハ辯明ノミヲ採取シ之ノミヲ以テ
真相テアルト遂斷シテ處置シ、憲兵自ラ何等ノ内査ヲ遂ケ
ナイ時ハ、不慮ノ失策ヲ來スコトカアル。宜シク憲兵ハ自
主的ニ眞否ヲ内査シ真相ヲ摺ムコトカ緊要テアル。

(七) 出版物ニ對スル處置

内務大臣ニ於テ發賣頒布ヲ禁止シタ軍事關係出版物ハ其ノ
都府憲兵司令官ニ通報セラレ、司令官カラ之ヲ各隊ニ下達
セラレル。然ル時ハ之等カ一般ニ頒布セラレサル如ク注意
シ、若シ發見シタル時ハ速ニ左ノ處置ヲセネハナラヌ。
1 禁止出版物ヲ所持シ又ハ發賣頒布ノ疑アルモノハ本人ノ
承諾ヲ待テ沒收又ハ焼却セシメル。
2 禁止出版物ヲ現ニ發賣頒布ヤル時ハ之ヲ差シ押ヘル。

出版物ニ
對スル處
置

發禁以外ノ出版物ニシテ軍事ニ有害ナルモノヲ發見シタ時
ハ必要ニ應シ治安警察法第十六條ヲ適用シ、或ハ内務大臣
ノ禁止處分ヲ要求スル手續ヲナシ、且關係軍事當局ニ通報
セネハナラヌ。

第三節 爭議警察服務

爭議ト憲
兵

第一 爭議ト憲兵

労働、小作等ノ爭議ハ動モスレハ暴動化スル虞カアルヲ憲
兵トシテハ其ノ情況ヲ詳ニシ、出動ヲ要スル場合ニハ直チニ
之ニ應ズルコトカ出來ル如ク準備ヲ整ヘテ置カサケレハナラ
ヌ。

而シテ憲兵ハ軍關係工場等ノ爭議ノ場合ハ軍事警察ノ立場カ
ラ當然ニ出動スルノテアルカ其ノ他ノ場合ハ治安維持上特ニ
必要ナ場合ニ出動スルコトカアル。

第二 出動前ノ處置

憲兵カ出動スル前ニハ有ニル手段ヲ講シテ左ノ情況ヲ審ニセ

出動前ノ
處置

ホハナラヌ。

1、勞資ノ主張

2、闘争氣分

3、闘争準備

4、他團體トノ脈絡系統

5、争議團中心人物特ニ左翼分子又ハ争議「ブローカー」介

入ノ状況

6、其ノ他争議ノ情勢ヲ判断スルコトノ出來ル事項

而シテ所謂争議「ブローカー」ヤ左翼分子カ潜入シテ居ル場

合ハ之等ヲ檢束スル等ノ方法ニヨツテ争議團ト隔離セホハナ

ラヌ。此ノ隔離ハ軍關係工場ノ争議ノ場合ハ當該軍當局ト連

繫ノ下ニ憲兵カ主トナフテ之ヲ行ヒ、其ノ他ハ一般警察官ニ

委スルノデアル。

情報ヲ收集スル手段トシテ通常私服憲兵カ派遣セラレル。

派遣セラレタ憲兵ハ關係官公署、争議關係者、其ノ他在郷軍人分會等ト連絡シ

テ情報ヲ收集スルノデアルカ、此ノ際公平ニ觀察シ決シテ先入主ニ捉ハレタリ

或ハ一方ニ偏シタ觀察ヲシナイ様ニ注意セホハナラヌ。

連絡ヲ觀察内偵ニ依リ得タ資料ハ逐次之ヲ取纏メ上司ニ急報セホハナラナイ。

服務上ノ 著意

第三 服務上ノ著意

憲兵ハ軍關係工場ニ對シ平素カラ其ノ内情ヲ觀察シ争議ノ未

然防止ニ努メナケレハナラヌ。若シ其ノ效力ナク争議カ勃發

シタ場合ハ成ルヘク其ノ範圍ヲ最小限度ニ喰止ヌル如ク善處

セホハナラヌ。之カ爲著意セホハナラヌ主ナル事ハ次ノ通テ

アル。

1 常ニ思想勞働政治ニ關スル從業員ノ系統ヲ觀察セホハナラ

ヌ。

工場内ニハ勞働團體ノ組織カアル場合ト組織ノナイ場合ニ

於テモ實質的ニハ種々ノ色彩カアルノテ此ノ點ヲ明ニシテ

置カホハナラナイ。

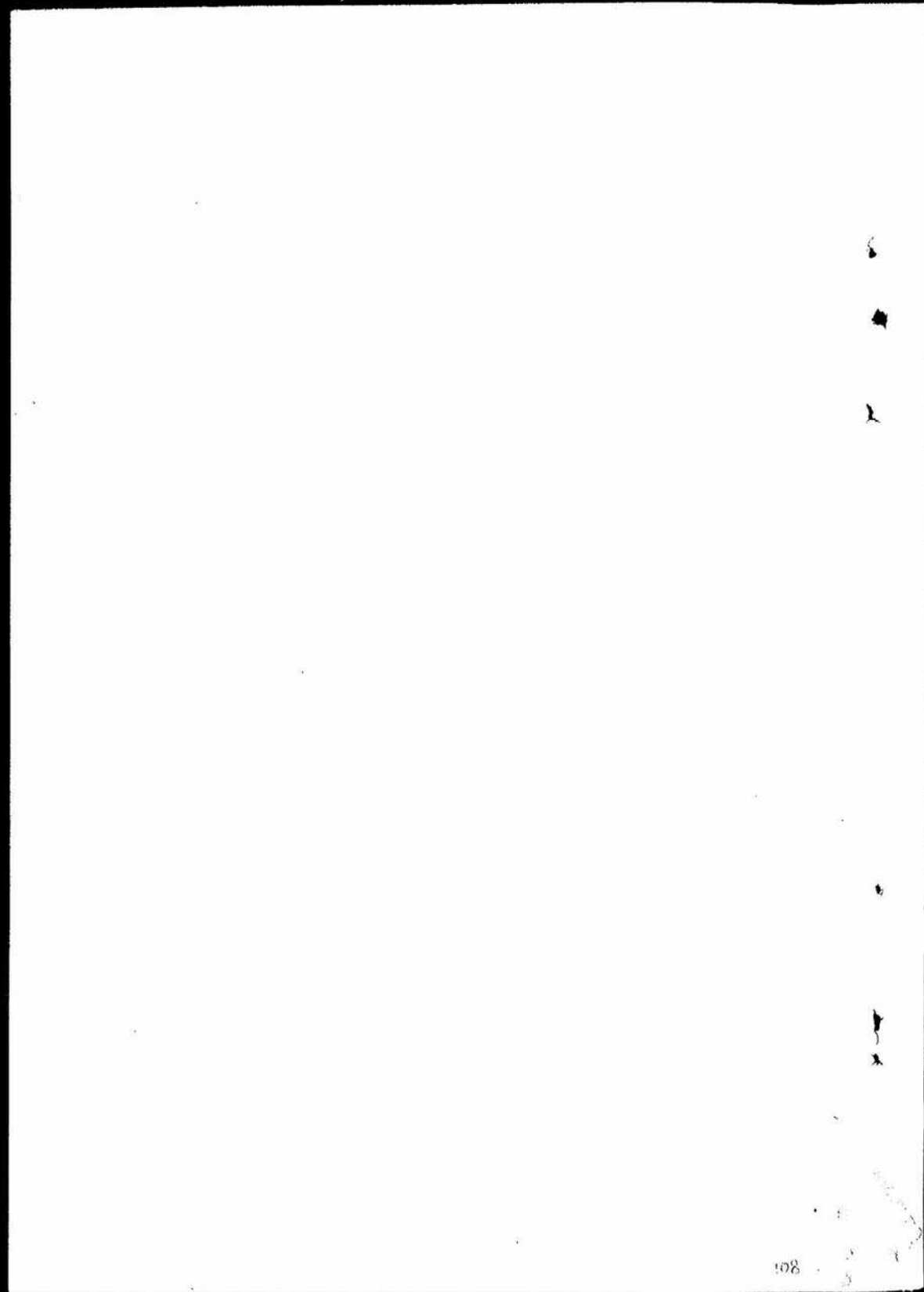
2 要注意人物ヲ發見シ其ノ者ノ行動ヲ特ニ注意セホハナラヌ

即予當ニ關係當局ト密接ニ關係當局ト密接ニ連繫スルト共ニ視察内偵ヲ實施シテ思想上危險性ヲアル者ヲ發見シ、其ノ者ノ行動ニ付テハ特ニ注意ヲ拂ハナケレハナラナイ。

3 従業員ノ言動就中不平和言辭テアツテ相當ノ理由カアルモシハ機ヲ進セズ工場當局ニ連絡シ適宜對策ヲ講セシメ事ヲ未然ニ防止セネハナラヌ。

4 争議カ勃發シタル場合ハ工場當局ト密接ニ連繫シ主謀者ノ隔離ハ因勤職工ヲ保護シ宣傳防止、反對宣傳ニ依ル事件ノ擴大防止ニ努ムルト共ニ一面職工側ノ真相ヲ看破シテ機ヲ失セズ、當局ニ善處ノ資料ヲ提供スルトニ努メ情況已ムヲ得サルニ至ツタ時ハ兵力ヲ以テ之ヲ鎮壓スル。

5 軍職工ヲ多數整理等カアル場合ハ克ク關係當局ト連絡シテ争議等ヲ未然ニ預防ニ努メナケレハナラヌ。之カ爲關係情報ハ機ヲ失セズ内報シ、當局ヲシテ善處セシメ、又各方面カテハ機動等ヲ防止スルコトニ注意セネハナラヌ。



裏面白紙

原本不明瞭

選舉無料郵便規則

府縣制市町村制等

第五節 水平事件服務

水平社糾
彈態度

第一 水平社ノ糾彈態度

差別事件ニ對スル水平社ノ糾彈態度ハ現役、在郷軍人ヲ含ムコトカ別的ノ言動ノアツテ場合、其ノ團結力ニ依ツテ軍部糾彈ニ出テ其ノ目的ヲ貫徹セントスルノヲ例トスル。而シテ軍隊攻撃ノ急先鋒中ニハ水平社同人出身ノ在郷軍人ヲ含ムコトカ多ク其ノ手段ハ實名附テアツテ徒ラニ事件ヲ誇大ニ宣傳シ、モ軍ノ内部ニ大ナル缺陷カアルカノ如ク吹聴シ、誠意ア度テアルト認メ難イ事例カ多イ。

服務上ノ
著意

第二 服務上ノ著意

1 軍隊ニ對スル糾彈ノ手段トシテ兵營ニ團體訪問
時トシテハ立合演說會ノ開催等ヲ要求スルコトカ
下シテハ折様ヲ要求ニ應スル筋合テナイコトハ勿論

原本不明瞭

選舉ニ關スル主要法令

考へ觀察スルト共ニ、之等ノ反軍運動ノ警防ニ注意ヲホナラヌ。

軍人ハ軍隊内務書ニ於テ世論政治ニ關スル集會又ハ演說會等ニ臨ムコトヲ禁セラレテ居ル、又學術技藝ニ關スル集會ヲ催シ、若ハ之ニ臨席スル場合ハ所屬隊長ノ許可ヲ受ケレハナラヌコトトナツテ層ルコトニ留意セホハス。

選舉ニ關スル主要法令ハ左ノ通りテアル。

衆議院議員選舉法、同施行令

選舉運動ノ爲ニスル文書圖書ニ關スル件 (大正一五、二、三内務省令五)

地方議會議員ノ選舉運動ノ爲ニスル文書圖書ニ關スル件 (大正一五、六、二四内務省令二一)

施行令第三六條第四號ニ掲クル理由ニ關スル證明方 (大正一五、二、三内務省令一)

施行令第二八條第一項第四號ノ部隊又ハ陸上軍各部隊ノ指定 (大正一五、二、一五海軍省令一)